

※ 親鸞聖人 四幅御絵伝指図

※ 福成寺大仙 述・興教書院・明治三十二年十一月二十五日発行

※ 文字コード：Unicode(UTF-8)

※ 最終更新日：二〇一〇年一月三日

※ 配布元：http://www.icho.gr.jp/seiten/

※ 非営利目的に限り転載・再利用・再配布自由

※ 一、旧漢字・旧仮名遣いなどを現代のものに変え、句読点などを適宜補い、私に改行した。

※ 一、現在の観点から、差別的な表現・内容、あるいは誤った史実に基づいた部分があるが、出版された時代の状況を鑑み、

※ 史料としての価値を考え、これらはそのまま残した。

親鸞聖人 四幅御絵伝指図 上巻（高祖聖人四幅御絵伝の御絵解）

但馬 福成寺大仙 述

第一段 出俗入真之段

今回は浄教西方の先達、真宗末代の明師たる、我浄土真宗御開山聖人の、御伝記を御咄に及ぶについて、四幅の御絵伝の上を一々御指図申し上げて、御讃歎に及びましょう。

桜を書くに三義

さてこの処が京都東山粟田口青蓮院の体相なり。即ち吾祖九歳の御時、なお松若君と名づけさせられた頃、御出家あらせらるるにつき御登山の体。即ち頃はと言えば、人皇八十一代安德天皇の御宇、養和元年三月十五日。依てこの処に桜を書かせられたは、三つの訳がある。

一つに時候を示すとして「見たせば花の盛りは日も永く風ものどけき春の空かな」とある如く、実に三月十五日なれば、花も爛漫と咲き乱るるの頃であるとの体を知らせたもの。

二つに発心の由来を示さんがためとて、「立ちよらば花の木陰もかりの宿ころとむなと嵐吹くなり」と詠し、また「色は匂えど散りぬるを我が世たれぞ常ならん」とある如く、花ばかりではない、今日高位高官も一旦の盛りありとも、一度は衰うる墓なき浮世と観じたまい、栄華栄耀の御車も夢の浮世と、今に散り行く桜花の本に乗り捨てて、ついに法華一乗の大白牛車に乗り換えて、二十年の間、日枝（ひえい）の深山に籠らせられ、羅洞の中に三観一諦の妙理を観ぜさせられ、三百由旬の宝渚を過ぎて、直ちに道場に至る円融の法門もお難行の陸路、迂路まわり道と思召しなされ、二十九才にして法華一乗の大白牛車を、弘誓の舟に乗かへたまい、法然様と共に、弘誓の舟を、吉水の、清き流れに浮めさせられ、掉出（そくて）目出度往生をなされたぞと示す。

三つに不定の露命を示すとして、「明日までとおもふころはあださくら夜は嵐の吹かぬものかは」とある如く、命の花は無常の嵐にあえば、ついに墓なく散り行くを観じて、すぐにその夜御剃髪なされしことを示したまう。

乗車について三義

時にここに御所車を書いたは、我祖九歳の御時、召させられた御車。かかる御車に乗せられ、青蓮院へ御入なされた、尊い雲上の御方ぢやと、御系図の尊いことを示す。祖師聖人の俗姓は藤原氏、天兒屋根の尊二十一世の苗裔、大職官と云うて、如何なる官位か田舎のものは知らぬ、そこで御絵の上で御車を画いて、御家の勝れたことを知らせられた。時に他宗の者から親鸞聖人は、皇太后宮の大進、有範の御子なれば、まだ御車に召させられる御境界でないなどと誹る者あれども、それは「燕雀、鴻鵠の志を知らず」と言う諺の如く、紀州様の御隠居が、熊野浦へ御成りなされた時、ある漁師の唄の言うには「オウは紀州様の奥方となるのはいやぢや、あの大勢の人に飯焚いて食わさねばならぬか」と言った。境界が違ふと訳が分らぬ。碌々たる他門の衆が、口の齒に掛けて誹らるる様なことを、覚如さまが書いて残させられる筈はない。今この車に付いて三つの証拠を示す。

一には『世継ぎ翁の物語』には「後白河院の御即位には、御所車八百軸にあまる近代公家まつしくして、土御門院の御即位には、三百軸に満たず」とありて、すべて昔は今の綱代（まじろ）の乗物に乗るごとく皆乗りたものじゃ。よつて綱代の長柄の黒塗は、みな御所車の長柄にかたどられたもの。

二つに時の官位は兎も角も、御家柄によりて御召しなされる。吾祖は日野家に御生れなされた。この日野家は同じく藤原氏でも御歴々ぢや。即ち天津兒屋根の命より、二十一代が大織冠鎌足公。鎌足公の六代後の玄孫が内麿公。内麿公に御兄弟ましまし、御総領が真楯公。これが日野家の御先祖。弟御が冬嗣公。これが九条の御先祖。されば同じ公家方でも、御家が御歴々ぢやゆえ、召させられたに違いない。

三には御身代が御歴々。今時のような貧乏な御公家さまとは違う。ある公家履（くつ）をあつらえたまうにより、沓屋は早速に拵え持つて行き、御代物を願うたらば「あつらへし沓を矢橋の舟にして膳所まはるまで栗津とも待て」と、真手の小路大納言様が仰せられた。また貧乏人豆腐の糠（かす）を買いにゆきたれば、向こうより「下に下に」の掛声が聞こえたる故「どなたで御座るか」と尋ねたれば、「飛鳥井大納言殿なり」との事なればその時狂歌に「世の中はたった一字で大違い君は飛鳥井我は糟かい」と詠んだ。如何様今時の公家はそこらのことぢやけれども、六百年の昔、御開山の御時代は淳和井字の両院は禁庭にありて、禁庭より御捌きなされて、堂上方は皆今の大名の如き勢いがあった。その時分の日野家は知行が二十万石三十万石もありた。

法界寺の縁起

即ち日野の御屋敷は、今の醍醐の三寶院の宮より、半里ばかり未申に日野村と云うがありて、昔の日野家の御屋敷の跡がある。それに親鸞聖人産湯の井と云うがある。その処に法界寺と云うが今に残つてある。これが日野家の御菩提所ぢや。今は知行百石塔中八坊ある。古は日野家より二千石の寺領を付けたまうとある。

時のこの法界寺の濫觴（らんちよう）は、伝教大師戒壇を比叡山に御建立の時、日野家の先祖家宗卿勅使に立たせられ、右勅使への御礼に、「これは唐土より伝来の薬師如来なり。貴卿（あなた）に付属したてまつらん。これを信じさせられなば、必ず御子孫の内、一宗開闢の高僧生まれさせられるならん」とて、伝教大師は御贈りになりました。それより家宗卿法界寺と云う七堂伽藍を、日野の里に建立したまひし所、後回祿の災に遭い、今は薬師堂のみ残れり。この薬師に乳を祈れば与えたまうゆえに、世に乳薬師とて乳の出ぬ女多く参詣する。古は知らず今は寺中八ヶ寺あり。寺中に日野家御代々の御墓あり。

御菩提所の法界寺には寺領二千石も附けたまう位、さすれば、家元は豊かにして、かかる御所車はなんぼうも御召しかえありて、御乗り遊ばされたに違いはない。かかる御車に御一生涯乗らせられ、朝廷に仕へて霜雪を頂き、射山に走りて栄花を開き、摂政関白にも御昇進遊ばされなば、その替り我々はかかる御法は、聞くこともならず。未来は火の車に乗らねばならぬ。然るに栄花の車を乗りすて、十にもたらぬ苔（つばみ）の御身が浮世の塵を外にして、出家得度の御恵みがあればこそ「ちぎりおきし炎の車引きかへて蓮（はちす）の上に乗るぞ嬉しき」の身分として貰うた。貴方がごんず鞋（わらじ）と御召下された故、今我々は畳の上で御教化を聴聞して、未来は思いがけなき百宝の、青蓮の上に乗られるぞよとて、青蓮院の御門前に御車が引き付けてある。

御所車のたとえ

さてこの御所車に付き、上來はその自行に付いて弁ず。これより我々を御教化の、化他について云えば、この車は直ぐに我等が流転輪廻の迷いのことを、車に譬えて知らせたもの。この車の輪が豎横どちらへでも九尺有るは地獄、

餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道は分段生死。声聞、縁覚、菩薩は變易生死。九尺は九界に象どりたもの。また『心地観経』に「有情輪廻して六道に生ず。猶車輪の始終なきが如し」と。実に我々は四州四惡趣、六欲、梵天、無想、五那含、四禪、四無色の二十五有界を迷うことは、車のぐるぐる回るが如く。天上、人間はなお平地を回るが如く。畜生道を回るときは、車がしるい道でのころのぢや。地獄へ落ちたは車が谷へすべり落ちたと同様ぢや。人間道の大道へ引き上げるまでが大抵でない。

よつて今この二つの長柄は、二種生死の迷いの永いに御たとえなされた。またその長柄に綱がある。これは我々が弥陀の本願を疑う、疑いの綱につながることを、御譬えなされた。

無明を黒牛に喩う

この疑いの綱はたれが牽くかと云えば、「痴闇の心体恵明無し故に無明と云ふ」とあつて、この無明の牛が牽くゆえぢや。およそ本願を疑うは愚痴ゆえぢや。よつて心内の愚痴をこの牛にたとえた。なぜと云うに、無明とは「あかるきことなし」と書く。牛は真黒なもの、牛の黒いを愚痴の無明にたとえ、その無明の牛に生老病死の四つの足ありて無始曠劫以来、我々はこの牛に引かれて歩くのぢや。なおこの車の側を牛が離れて書いてあるは、早く疑いの綱を断ち、無明の牛を追い放ち、再び輪廻の車を引かるるなと云うことを御示し下された。

当流は別途無明

そこで『正信偈』では「還来生死輪転家 決以疑情為所止」とある。これは『選択集』の、三心章のころを取つて御かきなされて、御当流は別途無明とて疑いが無明の根本ぢや。『大経』では上は等覺の弥勒様さえ、弥陀の本願を疑えば、不了仏智の人とおとしめ、五惡痛燒の惡人も信すれば明信仏智の人とほめたまい、龍樹菩薩は「もし人善根を種え、疑へば則ち花開かず、信心清浄なれば、花開いて仏を見てまつる」と仰せられ、天親菩薩や曇鸞さまも「不実功德人」とも、「無明猶在の人」とも、おとしめさせられた。よりて御和讃には「流転輪廻のきはなきは 疑情のさはりにしくぞなき」と釈したまい、『御文章』には「このころつゆちりほども疑ひなければ」等と仰せられ、疑いは蚤の糞ほどでも邪魔になる。また「つみはいかほどふかくとも」とあれば、罪はおかまいはない。それは如何がなれば、罪は懺悔すれば消してくださる。光明の因がある。疑いはそのものを助ける手がかりの縁がない。

匠石と別人の信用

丁度莊子の雜篇に匠石と云う大工、呈と云う所に居りし左官が、鼻端に白土を塗ること、薄きこと蟬の羽の如きを、斧を使うて落とすに、呈人立ちて自若として居る故、過またずして落とす。世人大いにほむ。宋の元君、寡人のためにせよとて、家中のものの鼻の上に、白土をつけて出でよと仰せられた。匠石が云うには「呈人はすでに死せり。彼の者は拙者（わたくし）を信じて鼻を任すゆえ、その業ができます。御家中さまがたは、鼻は見事に御ざれども、私を疑うて御ざる故に、業は出来ませぬ」と申したれば、元君大に感心してかえしたまう。

我々が後生大事の鼻端の、煩惱の土は弥陀の匠石さま、五劫永劫かためさせられ、あなたには御不調法はない。御任せ申しさえすれば、たのむ一念のとき、一時に消滅と落として下さるけれども、何分我々は、今の家中のごとく、助かるか助かるまいか、どうだこうだと任せぬゆえ、助けたまう縁がない。

心猿意馬の事

次にこの駒は伯父範綱卿の召された駒。この松は文字の上でも十八公とかく。松のもとに引きそえたるは、禪家に「心猿意馬」とて、凡夫のこころの騒がしさは、野に馬を放ちし如くである。今我祖の自行に付けば「定水を凝らすと雖も色浪頻りに動く」と仰せらるる如く、おれは叡山にて二十年の間、修学してみたれども、名利にほだされては野に馬を放つ如く、利に走りては猿の木の実を食る如く。それゆえに今吉水に入りて、心の駒を十八願の松に、かかるものをも御助けと、つなぎとめるぞよという御意を示す。

また衆生の化門に付けては、「ゆるしなば悪き道にも入りぬべしこころの駒に手綱ゆるすな」。今日の我等の心はさながら、野に馬を放ちし如く、散乱の身の上。その駆けめぐる内には、現世祈りの崖におち、有無の二見の谷へ転び終には法身の恵命を失うほどに。早く足元の明るい内に、第十八願の松へかかる者をも御助けと、つなぎ止めよとある。一念繋ぎ止められたも御慈悲からぢや。また散乱のころは止まねども、悪しき事とすれば、嗜ませて下さるぞ

や。そこを『御一代聞書』に「信の上はさのみ悪しきことをすべきやと仰せられ候。今度生死の結句をきりて、安養に生まれんと思ふひと、いかでか悪しきことをすべきやと仰せられ候」と。それを歌に詠めば「今ははや六字の綱にしばられてこころの儘にならぬ嬉しさ」というものぢや。

十八願の松の枝振

さてこの十八願の松の枝が、四幅の御絵へ振り分けて居る。まず「弘法の因うちにきざし、利生の縁外にもよほす」と有りて、藤原の御家に松若丸さまと、御生れなされたは、十八願の松の実が初めて、人間界へ生出させられたのぢや。そして叡山二十年の御修学は、第十八願の松の根つくろいぢや。吉水入室が二葉を生じた処。よつて元祖の御教化が宗の淵源（安心）教の理到（教相）と二葉をわけての御教化ぢや。範宴少納言さまも、すぐに他力摂生の旨趣と（信法）凡夫直入の真心か（信機）二葉をわけて御了解なされた。二葉というものが、すえをつみ揃えたように、寸尺を極めて出る如く、元祖は安心教相、吾が祖はその安心を信機信法と、とんとつみ揃えたような、両聖人の御了解まえぢやと云うが吉水入室の段。

門徒は松葉の喩

さて次に六角夢想の段は、この峨々たる岳山に、数千万億の有情とは、十八願の所被の機類。十方衆生をおし込み、在家出家、有知無知、貴賤老若が相集まりて居る体。その内に大割にしたれば、四通りの機がある。御門跡さまと、御連枝さまと、御末寺と、御門徒である。御門跡さまは仏法の棟梁松の茎ぢや。御連枝は松の大枝。御末寺は小枝。御門徒は松葉ぢや。そこで御門葉と云う。なぜに松葉ぢや。ハテ胸に針がありてクシャック、つい平生に意恨でもある人が、町の参会の人中で、何兵衛どんと殿付きで、もしそこな草履直してくれというときは、ヤツ人中で恥をかかしくさつたと、向こうの針がこちらの胸へグサツト通る。蜂や百足の刺したは、五日か七日でなおる。人間同士の胸の針は、三毒と云う毒の針ぢや。忘れて居てもあいつ悪い奴ぢやと、胸の痛みが止まらぬ。一生五十年持ちこたえ、未来は修羅の苦しみとなるぞや。さすれば在家は松葉で、クシャックけれども、ここに有り難いことには、松は寒中に雪や霜に遭うも、青々たる色をかえぬ。この御門葉の我々、クシャクシャの身の上なれども、末代の寒中にも煩惱の雪霜の中に、御助け一定の色をかえぬぞや。

ときに夜中に降った雪霜も、朝日が出やしやると、とけて雫となりて落ちるぞや。無始曠劫よりの悪業の雪霜も、お光明の朝日に融けて、やれやれかかる者をもこの儘の御助けと。歡喜踊躍の雫となるぞや。

今この第十八願の松は、主もなき野中のあだ松とは違う。五劫永劫の根纏いをし、極楽浄土七宝の大地にはえた松にして、まがう処もないこの祖師御開山は、第十八願の松の主なることを、蓮位夢想の段に、御示しなされた。また聖徳太子三歳の春。三月三日に桃花をすてて、詠めもない松の枝をもてあそびたまうは、御一生涯の弘法はただ十八願の松にあるぞよということを示された。その第十八願の松を養育したまう主は吾が祖御開山ゆえ、本地を崇めて「教礼大慈阿弥陀仏」と礼したまう。

さて第二幅めに移り、始め選択付属の段は、第十八願の三信の中で到心の法体の徳を御示しなされ、至心の体は至徳の尊号南無阿弥陀仏。その南無阿弥陀仏を『選択本願念仏集』とつづらせられたものぢや。よつて『選択集』の独留章と云い、付属章と云うは、十八願の松の到心のみきの太く、たくましく末法万年の末まで、栄えることをお示しあらせられた。さて次の信不退の段に到れば、これは三信の中では、第二の信業に当たる。この信の字を真なり、実なり、誠なり、満なり、極なり、成なり、用なり、重なり、審なり、驗なり、宣なり、忠なりと十二訓を用いて、第十八願の松の枝の、こもったことを御示しなされ、次に信心諍論の段は、三信の中では欲生にあたる。よつて「善惡の凡夫、ともに仏の方よりたまわる信心なれば、源空が信心も、善信房の信心も、さらにかわるべからず、ただ一つなり」等とある。その疑い晴れた信は、元あなたから貫うたものぢや。故に欲生は仏の大悲回向心なることを示し、十八願の松の枝の働きのよきことを御示しなされた。つぎに禪定法橋の夢に、「善光寺の御房これなり」と、おがまれさせられたは、我が祖は重ねて、第十八願の主なることを御示しなされ、初幅の上の段ではや蓮位の夢に、太子本地を敬礼なされたことを明かしてあれば、吾が祖は弥陀の化身なることは知れてあるに、今また定禪の夢に、本地を顯したまうは如何と云うに、されば上に弟子の蓮位の夢に見えたは、師弟の間なれば他人の証にならぬ。然るに今

は他人の定禪の夢にさえ、善光寺の本願の御房と、おがまれたまうぞと示された。

親鸞松の因縁

ちなみに申すが信州善光寺の、御堂内の賽銭箱の上に、大きな花瓶に松がたった一本立てありて、今に毎月立てかえる。あれは親鸞松と云うて、即ち御開山善光寺の塔頭、道性坊に御逗留なされ、御立てなされてからこのかた、今に親鸞松と云う。今を以て古をはかるに、御開山の思召し、善光寺の如來の本懷は、この十八願の松に目をつけよとて、御堂へ入ると賽銭箱の上に、鼻の先に松が立ててあるのぢや。

さて三幅目へ枝が振り、第十八願の十方衆生という、所被の機類にまた三段あることをお示しなされた。第一には謗法の人。叡山、南都の大衆の妬みにより、両聖人を御流罪に逢わせた。信謗は天秤の上下するが如く、信ずるものがあればまた謗るものがある。その信ずるものとは、つぎの稲田に十年の御逗留なり。けしもからぬ御繁盛。仏法弘通の本懷ここに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足すと御喜びは、息の根のたえた闍提の女人まで、往生することを御示しなされ、次に弁円御済度は、五逆の人まで往生することを御示しなされ、既に長刀の鞘はずし、聖人さまを唯ひと討ちにと思ふた奴が、聖人さまを一目拝むなり、害心たちまちに消滅して、あまつさえ後悔の涙禁じがたし。めつた無性に有り難くなり、いまだ一句の御教化さえ聞かぬうちに、早や御弟子入りをし、それから刀杖を捨て頭巾を取り、柿の衣を改めて仏教に帰しつつ、一念帰命の御了解をせられた。そこで法に明らかたと書いて、明法房と下された。この山伏昔は大日や不動を信じたが、今は六字称えりや神々方へ、常に日参するのと同じこと、こんな御慈悲とは知らなんだ。今までは現世ばかりを祈つて居た。この様な奴が地獄通れの御祈祷仏は、六字離れて外になし。こんな御慈悲とは露知らなんだと、大いに後悔したれば、今は早何にもあきらかにしられたゆえ、名を明法房と下された。

さて四幅目に枝がふりては、その十八願を信ずれば、未来は御助けでも、この世は神明のお守りはあるまいと、疑うものがある故、みよみよ御開山六十の御年、関東の御教化を仕舞いて、都へ帰らせたまうとき、仏法にくいあいのない箱根権現が、第十八願の行者なればこそ禰宜に云いつけ御饗応なされたでないか。それは一宗開闢の祖師故ぢや。今日の我々が第十八願を信じたかとて、神明のお守りはあるまい、オオサ合点と、これを見よとておがませて下されたが平太郎ぢや。即ち常陸の国大部の郷、なかの西の郡に平太郎という庶民ありとある。庶民とは並々の百姓と云うこと。それでさえ第十八願の行者なればこそ、熊野権現様が三拝なされた。ソウスリやいよいよ往生になりますか。オオサ第十八願の誓い空しからず。

吾が祖御開山弘長二歳、霜月二十八日往生の御先達をなされたぞや。よつてこの御火葬の処に松が二本ある。青蓮院の御門前の松は若木。この処は老木で四方へ枝がある。聖人御一代の御教化の御手入れ故、第十八願の松の栄えることを示させられた。シテみれば貴方は極楽往生なされてあとは、かまわぬと仰しやるか。否々。四幅目の上にて拝めば大谷の御廟処に御真影を残させられ、「親鸞化縁の薪つきて、一旦は浄土へ帰るも、弘法の魂はこの木像に止め、この大谷の廟処より、日本国中の同行を昼夜にながめ、一度はこの十八願を、信ぜささずばおくまいぞ」と、六百年來じつとながめ通しにながめて御座るが、御本山の御開山さまぢやぞや。その一念が通りて、今は我々の様な罪業深重のものが、ようやく一念の信心にもとづいたのぢや。

衛の靈公の因縁

衛の靈公、弥子瑕（みしだん）を愛して宰相とし、遼白玉（きよはくぎよく）を用いず。央雄三度（たび）諫めても聞かれず。ついに我が境内の北の隅に、北堂とて一つの堂を立て、子息に遺言し云うには、「君を三度まで諫めてなお用いたまわず。我は腸（はらわた）あばいて死なん。さりながら骸を葬ることなかれ。吾が魂魄はこのしかばねに留め、吾が念力を以て一度は弥子瑕を遠ざけ、遼白玉をもちいささずばおくまい」と、昼夜に城をにらみ、ついに三年たちて、弥子瑕の悪を露顯し市にさらし、遼白玉を用いたまう。そのとき靈公かの北堂をとむらい、「生きては詞を以て諫め、死しては骸をもつて以て諫む。忠なるかな孝なるかな」とのたまえば、死骸はたちまちみしみしと碎けた（『史記』）とある。

今大師聖人は六条本願寺、御影堂より昼夜にながめ、一度は難行の弥子瑕を去り、信心の遼白玉を用いささずばお

くまいとの御念力の御真影様ぢや。

松の二本ある理由

さてこの松が二本あるは、第十八願の松には、必ず三十五の願の実生のあることを示す。さあ女中方目を止めて拝もうぞよ。二本あるのは一本は十八願。一本は三十五の願ぢやぞや。弥陀の大悲深ければ、仏智の不思議をあらわして、変成男子の願をたて、女人成仏誓いたり。なおらぬ病気をなおすで名医、強い奴を負かすで闘取ぢや。助からぬ女人を助けるで、弥陀の不思議が顯れる。そんなれば女人は女人で往生。また龍樹天親はおれは菩薩ぢやと、菩薩貌して往生なされるではない。あなたがたも極楽まいりと云えば、やつぱり女人の相伴ぢや。

和歌浦まつりの故事

「巡礼やけふぞはれする和歌まつり」。いかさま、紀州の四月十七日の、和歌の浦のまつりは、京大坂の歴々の町人でも、御構えの内へ入ることはならぬ。巡礼ばかりは入られる。あれは昔紀州の御先祖、南龍院さまと云うは、東照宮家康公の御胤三男にて、紀州へ御入国なされ、その年四月十七日初めての御祭り、巡礼が入ろうとしたれば、警固の者が打ちたたきだした。そのとき南龍院、御簾の内より他のものを出して、巡礼を入れて見せよと鶴の一声。後には他のものは入れず、巡礼ばかり入れる。この度の極楽のおかこの内へは誰が正客ぢや。五障三従の垢だらけの女人の巡礼が、第一番の正客ぢやぞや。そこで京大坂の歴々の町人、縮緬綸子の衣服を着ても入ることはならぬ。そこでその結構な衣装の上に、赤い木綿と白い木綿縫い合わせの真ん中に、奉納西国三十三番、南無大慈大悲の觀世音菩薩、京都室町同行八人とあれど嘘の皮ぢや。三十三番どころか一所もまわらぬ。その日一日巡礼仲間に入り、見度（みたい）ばかり似せてゆくのだぢや。嘘としりつつも負いつるかけさえすれば入れる。今龍樹天親のお歴々が、極楽の御祭り見たいばかりに、下には十廻向満位と云い、あるいは初歡喜地という衣装の上に、信機信法の二枚の木綿を、機法一体とぬい合わせ、奉巡礼西国三十三番ぢやない、奉歸命尽十方無碍光如来と、一念歸命の負いつる背おうて、女人の巡礼の尻から付いて、御相伴に極楽へ往生なさるぞや。よって十八願の御手柄は、三十五の願で女人を往生させるゆえ、顯れると云うことを知らして、ここにわざわざ二本の松をかきたまう。

これなる桜は、この処に御車が引き寄せてあるゆえに、車止めの桜とも下乗の桜とも云う。またこの松は駒が引きそえて有るで駒とめの松と云う。古来これは絵相の上でみだれて有って、すなわちこの栗田口青蓮院と云うは、今の知恩院の黒門前の白川を北へ登り、東へ入る門がある。その内の北側に觀音か庚申やら堂がある。あれから南へ植髪さまへぬける。それをぬけずに東へゆけば、南へ入る総門がある。その内へ入れば、即ち青蓮院の御門前。この通りの体相が今に残りてありて、そぞろに昔が思い知られる。

家康公と登与上人

ときにちなみに弁ずる。この十八願の松について、今天下四海浪静かに「弓は袋、鉄砲にては湯をわかくす、天下泰平天下泰平」と治まるは、ひとえに御神君権現さまの御仁徳とは云いながら、その元は弥陀の第十八願のおまもりゆえぢや。その訳はすでに家康さま、十八歳の御とき、三河の桶狭間にて、武田勝頼と対陣の折から、すでに敗北したまい、御馬回りの武士たった十八騎にて、菩提所大樹寺へ入らせられ、十八人が車座、家康さまは真ん中で、すでに鎧の上帯をとき、御切腹の御用意。そのとき登与上人御諫め申し、「君には何故の御殺害で御座る」と尋ね上げたれば、「今日ははからず味方は敗北、徒らに命ながらえ恥をえんより、待冥加腹かきさばいて、弓矢の神へ手向ん」との仰せ。和尚につくとして笑い、「ああ流石に御若將、今拙寺は君の御菩提所。出家の役目一句の教化つかまつらん。人身甚だ得難く、仏世また値ひ難し。今君十八歳。人界に生まれ出で武將の家を継ぎたまうとも、ただ郡をかこみ国を奪い、我が天下を取らば子孫に榮華を伝えんと思召さば、これ名利の爲のいくさなれば、一日天下を掌握したまうとも、永く保つこと能わず。君には浄土宗にましませば、我が天下をとらば何とぞ、日本国中念仏を弘めたく、津々浦々まで弥陀の本願を弘めたく、弥陀の御代官たらんと思召せば、光明の摂護ありて、自然と天下は御身に帰するは、あたかも掌（たなごころ）を握るが如し。して君の御宝算いくつに在らず。僅か十八歳。打ちもらされの残卒は眼前にさえる十八人。そのうえ君の御生まれ在処は松平村。松は十八の公（きみ）。今の弥陀の本願も十八願。かくまでも言葉のつがうは、弥陀の加護ある前標なり。目出度し、目出度し。まず御馬に召させられよ」と、一旦臆

病神の付いた家康さまを御引き立て御馬に召させまし、登与和尚が口をとり、三百人の所化中を先陣させしが、坊主のことなれば葬礼は度々したけれどもいくさは始めてぢや。おのおの竹槍をもて、ワアワアワア平生読経の癖で、鯨波の声は大きな、中でも祖洞と云う六尺有余の荒坊主、竹槍位は面倒なと、大樹寺の山門のかんぬきを、大袈裟にもちあげ、縦横無尽のふり回しは、目覚ましくありたとある。ところが武田勝頼、大音声にて徳川家には死するを覚悟、坊主を力にとむらいいくさ。とてもものに鎧は似合わぬ。経帷衣を着て、出陣こそ致されよと嘲ければ、家康さまにはいよいよ手に汗にぎり、十に九つ死を極め名残いくさと思し召し、心に御名を称えて在すおりから、不思議なことは、西方より一陣の風吹き来たれば、大樹寺の境内の木の葉、一寸二寸の山蜂と化して、味方には一匹も食いつかず、寄せ手の勢にブンブン。アイタアイタアイタと、何ほどふさえても尽き難く是非に及ばず。かれこれするうち日も晩景に及び、ついに敵勢この有様に防ぎかね、蜘蛛の子散らす如く敗走し、ついに味方は勝ち鬨をあげて引き退きた。そのとき神君大樹寺の仏前で、涙滝津瀬の如く、今日和尚の教化は、馬の耳に風の如く思いしが、いかにも我武將の家に生まれ、ただ名利の爲に天下をとり、子孫に榮華を伝えんと。これ私の慮分なり。何ぞ神仏の冥加に叶わんや。今幸いに浄土宗にながれを汲みたれば、天下掌握の後はなにとぞ日本津々浦々まで、念仏の大法門を弘め、弥陀の代官をつとめ奉らん。今我が年は十八歳。残卒僅か十八人、生まれし在所は松平村。松は十八の公とかく。弥陀の本願も十八願。かくまで言葉の揃うとは目出度し目出度し。我いよいよ天下掌握せば、この十八願の恩を報ぜんため、関東に十八檀林とて、浄土宗十八ヶ寺の寺を建立せんと誓いたまう。誓いたまいし言葉に違わず、まのあたり十八檀林とて今に残り居れり。

第一段に四類の機あり

さてこの門内に二人が差し向かいになりて相談の体。この若き人は侍従之介。モ一人は縫之介。ともに若松君の御傍につかえられた、近習ぢやとある。

ときにこの侍従之介はまだ年も若し、妻子ない身分。御傍に仕えて浅からず御恩に預かりたに、聞けば若公さまには、かねて御志願かなわさせられ、いよいよ今宵のうちに、御得度あそばすげな。今までは御傍につかえ、朝夕の御配膳、夜の御寝冷えもあそばされぬようにと、御いたわり申したに、これよりは比叡山の深山（みやま）の修学の御いとまには、峯に登らせられては薪を拾い、谷におりさせられては水を汲ませられ、あられもない修行をあそばすであらう。手前もこれより出家して、比叡の深山はいざおろか、上は非想非々想の頂きより、下は金輪奈落の底までも、御供をして御傍に仕え、御給仕して御供が申したいと、供に慈鎮和尚に御願い申し、剃髪せられて法名を、正詮房と下されたとある。

また一人の縫之介は、これは宿に妻子もあり、いかに若公さまも御大切なれども、女房子にはかえられぬとて、御暇申して我家へ帰られる、水くさい人ぢや。またこの車の御番の者は、あまり御咄が長いゆえ、退屈して居眠られる体。またこの長柄や杓持ちの雑兵の類は、若公さまのこととおもわず、春の永い日に四方山の雑談ばなし。

ざつとこの段に四人の機類が、違うことを示されてある。侍従之介は叡山まで、御供をしたいの親切なところ。縫之介は御暇を願うと云う水くさいところ。それはうわ気な水あざぎで、水色の装束が書いてある。さて御車番は退屈して居眠るる体。雑兵ばら雑談咄。

芝垣の絵相について

実に人のこころの違うことは、この折掛垣の片柴のかたちがいなる如くぢやぞよとて、かかる築地（ついで）檜皮（ひわだ）ぶきの御門の中に、わざとかたちがいになりてある、折掛垣が書いてある。

昔の咄ぢやない。今のこの御座でもまず、ざつと四人の機が有る。旦那の尻からついて参る丁稚は御車番ぢや。女房の尻から付いて参る下女はこの雑兵ばらぢや。尻につくものにろくなものはない。御前のそのかんざし誰に貰うたえ。わしや置銭仕て貰いたいと、隅へよりて蚊の鳴くようにぶんぶん雑談ばなし。また無宿善のものになりては、説教するのは坊さんたちの口すぎ、地獄極楽はこの世にあると、誹りて一座も参らぬはこの縫之介ぢや。水臭い水浅黄ぢや。また御勧化とあれば付いてまわりて、聴聞つかまつりたいと云う信者は侍従之介ぢや。極楽まで御供をするのぢや。

そこで人の心はかたがいがい。そろわぬことはこの芝垣の、かたちがいなる如くぢやぞよと示す。トキニ芝垣もどこぞでは根がくさる。風が吹けば倒れる如く、眠るものも雑談咄の雑兵ばらも、水臭い縫之介も、どうで一度は無常の

風の吹き次第、不浄の大地へ倒れねばならぬほどに。悪人の真似をしようより、善人の真似をせよぢや。早く侍従之介を学んで一味の安心になりて、御開山の御跡を慕うて、御浄土まで御供を致しましょうぞや。

御絵相は安心の曼荼羅

さて先席にこの車の輪が、豎横九尺は九界、長柄は生死の長きにたとえ、牛は心の内の愚痴にたとえ、松は第十八願の松、駒は散乱のところにたとえて弁じた。

全体御当流のこの上下二巻の御伝、四幅の御絵は他宗の伝記とは違う。年序の次第にかかわらず、任放不羈の御示しは、ただ御開山御一代の行状に事よせて、真宗一流の安心をのべたまう。四幅の御絵相は安心の曼荼羅ぢや。例せば紫式部は石山寺にこもり、名月の湖水に写るを見て、書かれたる源氏の六十帖は、言葉は莊子の偶言にならない、時の天子の治世にことよせて、法華の安心をのべたまう如く、今は御開山一代の御行状にことよせて、浄土真宗一流の安心を述べたまうたがこの御伝、ならびに四幅の御絵相ぢや。

それにつけて昨日この車の御番の眠つていられると弁じたが、古来の伝にこれは日野家につかえた、若狭之介と云う人で「わだちに眠るは憂いの体」と、古書にありてこれは若公さまの御別れを、悲しまれる体ぢやとある。ああ聞けばいよいよ若君さま、今宵のうちに御出家の御願いが叶い、御得度をなされ、この山寺に御登りなされるげな。ほんに今まで春は嵐山の御遊覧。秋は高尾の紅葉狩り。にぎにぎしくも御供をして、御機嫌のよきを喜んでいたものを。今宵御得度をあそばして、この山寺に御残し申し、主もなきあだ車、すぐす引いて戻らずばならぬか。いついづまでも主従の御契り、お仕え申そうと思ひしに、ホンニ墓ない世の有りさまと、お別れを悲しむ体相にて。

悉多太子の出家

あたかも古え悉多太子、浄飯大王の御子と生まれて、摩耶夫人の御胎内よりお生まれなされるなり。すぐに現行七歩（ぶ）と七足歩ませられ、「天上天下唯我独尊」と称えさせられた。その後僅か六ツの頃、乳母の人に手を引かれ、南門に出でさせられ、老人の杖にすがりて行くを御覧なされ、「あれは何者ぢやぞ」。「あれは老人でござります。人間は年寄れば、あの通りに腰折れ屈みます」と申し上げたれば、太子はやがて年寄ればあの如くなるかやと悲しませられ、またある時西門へ出させられ、病人の打ち倒れて居るを御覧なされ、「あれは何者ぢや」。「あれは病人で御座ります。人間には四百四病がありますれば、あの通り苦しまします」と申し上げたれば、太子は人間には病患の苦しみがあるかやと深く悲しませられ、またある時北門へ出させられ、死人の棺槨を御覧なされ、「あれは何者ぢや」。「あれは死人で御座ります」と申し上げたれば、太子は深く生老病死の理を悟らせられ、我身も一度は無常の風に遇うことかと、いよいよ浮世をいとわせられ、その後はただ朝夕出家したいといのお願ひ。

さてそれから太子十四五にもならせたまえば、絶世の美人を后にそなえ、美人の黒髪にて出家の願ひを引き止めんとて、耶輸多羅（やそたら）女と云う、御后をおそなえなされたれども、なおも迷いの色欲には耽りたまわず、頻りに御出家のお望みゆえ、大王にももだしがたく、しかれば世継ぎの一人の太子を残さば、出家をゆるさんとの勅定なれば、ある時後の胎内を指さし「さて後六年まさに男子を生ずべし」と。これより六年たち、一人の男子が出産いたします。されば御約束の通り出家との御願ひなれども、あてごともない人間は十月でこそ生まるれ、六年すぎてなんの生まれようと、御承知がなかりたれども、案の如く六年後に生まれさせられたは羅睺羅さまぢや。

四門を堅めて用心厳しく御守護をなされたが、ある夜太子はお馬屋のそばへ独りお出ましなされ、平生御召しの駒健隲（けんげき）を引き出し、馬の背にのらせられ、車匿（しゃのく）童子を引具して、黒鉄の御門に至り、お手を合せて天を拝し、「あわれ願わくは梵天、帝釈、四大天王、日天、月天、二十八宿、自らを扶助し出家させしめたまえ」とのたまえば、たちまち増上天、広目天、持国天、毘沙門天、四大天王が顕れさせられ、彼の駒の四つの蹄を四人の手にのせさせられ、御門を出で檀特山へと向かわせられたが、山の麓に馬と車匿を引返し、御髪を断ち切りて、衣冠宝服を脱ぎ捨て、山の奥へ入らせられ、始めて阿羅羅仙人に仕え、四静慮を習いたまへども、これはまことの三界出離の法にあらずとて、それより独り深溪岩窟に閉じ籠もり、御入定なされたとあれば、サア王城は大騒動ぢや。

ヤレ御太子が夜の間に抜け出て出家なされたが、舍人（とねり）の者が叱らるるやら、門番が迷惑するやら、中々の大事。ところが父大王さま明け暮れ何もお上がりなされぬ。あら可愛や。太子は出家をしたが、いずこいかなる山へいらたぞや。いかに仏道修行ぢやとて何にも食わず、身にも着けず定めて命も続くまい。今一目太子に逢いたいと

泣き明かし泣き暮らし、お泪の乾く隙はない。その筈ぢや銘々が内でも、一人息子が伊勢へ参り、二十日三十日の旅でさえ、水あたりがせずばよいが、馬の乗り降りに怪我せぬか、もしも寝冷えはせまいかと、案ずるは親の慈悲。ましていわんや大王さまの御太子、人に人を使うて、何不自由ならぬ御身の上が、たったお独り山中で、吞まず食わずの御修行ぢやもの、御案じなされたも道理のまえ。

ところが風の便りに檀特山で、御修行なされて御座るときき、ヤレ太子の氣に入りの、車匿童子に行てこいと命ぜられ、行くに付いては一の車に太子の平生御所持の道具、三度の食事も不自由にならないよう、かねて好物の膳部を調べ、夜の寝間着昼の着物までも、お氣を付けて積み立て、早く至りて給仕をせよと、お遣いしなされたが、車匿童子は檀特山、山また山を踏み越えては、「オオイノウ太子様」。谷また谷と渉りては、「オオイ何処に在すか悉多君。オオイノウ」と声をばかりに呼びまわり、尋ねられしが、はるか向こうの洞の穴に、古木のようなものがみえる。傍へ立ち寄り窺えば、古木ではなく太子様。御衣は雨露に朽ちはてて、お裾からは葛が生え、お膝の上には苔がむし、おツムリの髪はごみだらけ。一目拝むより車匿童子は、「もうし御太子さまいノウ。これが勿体ない浄飯大王の御太子さまと云われうか」と、暫くは地へ打ちたおれ、正氣も失い泣き叫びしが、ようように涙を押さえ、「もしもし太子さま」とゆすり起せば、御太子いとも哀れにお目をば開かせられ、「ヤレ車匿は用事もないうに、この処へは何しに來たりしぞ」との御咎め。「なにしに來たとは情けない。申し申し貴方が御出家なされてより、御父大王さまは、明け暮れ泣いてばかり御座らせられます。いかに仏道修行ぢやとて、お命ありてのことなればなにとぞ私がおそばにありて仕え、朝夕のお膳も水回り、御不自由にならないように、夜のお衣具のものまでも持参つかまつりました」と、半分云うや云わぬうち、「オレハ禪定を食物とすれば、なにも空腹なことはない。また忍辱を衣とすれば、いささかも寒いところはない。おつけ成等正覺して、多くの衆生を済度すれば、ただこころは楽しみばかり。その時にこそは親しく御対面を申しましよう。よろしゅう申し上げられよ」と、また目を閉じさせられて禪定に入りたまう。車匿童子は「もしもし御太子さま、それはあんまり胴欲な、折角ここまで山また山、谷また谷を踏みこえて、ここまでは参りました。ことに大王様からお心添えてのこの車、御不自由にならないようにとての、御馳走の七珍万宝、すぐすぐ引いて王城へ戻り、何とて大王さまへ言い訳を致しましょう。邪魔になろうが私を、どうぞここに於てたまえ」と申しあげれば、御太子はまたお目をあかせられ、「我が禪定を妨ぐるならばその車は火の車、汝はさながら獄卒と、我が目には見えるぞよ」と云いすて、すぐにお目を閉じ、深く禪定に入らせられ、童子は太子のお膝にすがり、呼べど叫べど古木の如く、再び御返答もなかりしかば、今は詮方あらばこそ、空しく車を引きもどし、王城さして帰られしが、今この御者の若狭之介も、ホンニこれまでは春は花見、秋は紅葉見、処々の御遊覧にお供をせしが、いよいよこの山寺に止まらせられ、主もないあだ車、牽いて戻らずばならぬかと、お別れを悲しむ体相なり。

門の内外の体相

さて門内の土間に蹲踞（つくもう）て居るは、みな若君さまの御供。門の内外に書いたは、すべて堂上の御歩行にはお召使いのあとがつく。都の近所の人かねて見聞の通り。

さてこれに門外に用事ありげに立ちむかわれる体は、青蓮院の俗家老、日野源十郎なにがしと云う。「藤原有範が一子、松若丸今宵の内に出家得度させます。度牒の儀よろしゅう願ひ奉る」と、座主より禁庭へ奉聞の体。

ときにこの出家の作法は六ヶ布ことで、浄行優婆塞とて、まず叡山あたりでも、あたまからずツと出家はならぬ。九歳のあいだ試みのために、俗形有髪にて学問をさせ、いよいよその器量あるものと見込んで、それから九年目に一山の碩学より、いろいろの法門を難詰せられ、それをいちいち答釈し、それより一山の納得の上、度牒を願うに付いては、まず生まれし国主より添え文がありて、その節の玄場寮、治部省の両役所の奥印がすわり、そして禁庭に願ひ上げて、出家が許るのぢやとある。それを略したのが当時長橋の局よりおくる綸旨ぢや。

もつとも昔は寺というは、今時のように沢山にはない。聖徳太子の時分に国分寺とて、一国に一ヶ寺ずつ建立なされたとある。また京辺では寺と云えば三井寺、山と云えば叡山。また今時のように俗人に手本を書いて、文字を教えてくれる人もなかりた。みな寺へ行かずは手習いはならぬ。よつて三井寺や叡山へ行て習うたゆえ、今でも手習いをしにゆくを、寺入りすると云う。それが今は寺が沢山。坊主もいかいことある。そこで町人なぞでも耳が遠いと坊主にせい、百姓の子なればこいつ麦飯が嫌いぢや、そこで寺へやれなんぞ、坊主と云うものは人間のはきだめか、ごもくばのように思つておる。それを御和讃に「五濁邪惡のしるしには 僧ぞ法師といふ御名を 奴婢僕使にひとしくて いやしきものと定めたる」と御歎きなされた。いかさま昔は学問がありて、氏素性が卑しくば出家が許されず、氏

素性はよくても学問がないとまた不足。道人とてみな故郷へ帰され、有髪の優婆塞の姿で、仏道修行したものを居士と云う。それが今は飢餓のために出家するとか、かん寡孤独とて、養い手のないやもめや、一人婆が坊主になって、破れ衣を着て鉢鉢する。後生の爲ぢやない。今生の鼻の下の爲に、坊主になりて鉢坊主と云う。また寺の台所で納所をつとめ、味噌するを所作にして居るを、味噌すり坊主と云う。これらは木で拵えた長刀と同じこと。ソツタばかりぢや。この様な坊主が多い故、人があなどる筈ぢや。けれども飢餓の爲に出家するとも、仮にも袈裟衣を着すれば、一生食うだけのことは残しておいてやろうとて、釈迦如来は百年まで御存命なされる筈の処をば、八十にして御入滅なされ、二十年の福分を末世の坊主の、飯米に残すと仰しやられたぞや。かかる徳もなければ智慧もない、名ばかり出家でも、供養すれば利益がある、粗末にはするなとて、「無戒名字の比丘なれど、末法五濁の世となりて、舍利弗目蓮にひとしくて、供養恭敬をすすめしむ」と、贗絵符でも宮門跡のお名があれば粗末にはならぬ、贗坊主でも掛けたる袈裟は、三世諸仏の幢相の法服なれば敬えとあるぞや。

法に依りて人に依るにあらず

もつとも浄土真宗は、その坊主の徳を敬うでない、説く法を敬う。「法に依りて人に依らず」とて、聞かして下さるお寺様は不行儀でも、説く所の法が大切ゆえ、坊主を粗末に思えば、法が耳へ入らぬ。「一口もさりの道を説く人は三世（よ）の仏の使ひなりけり」。

よつて北国あたり仏法繁昌の地は、何宗によらず向こうから坊主が来ると、百姓までが頬被りを取る。在家の家へ伴僧が行ても、畳の上敷きを敷き敬う。上方では門徒が寺へ参るに、送つて出なだとしてボヤイテ居る。送つてほしくば何時でも死なつしやれ。送つて下さる。

そこで仏が有つても法がなくば威徳がしれぬ。法が有りても説く僧の役前がなければ、法の威徳が顕れぬ。よく法を説いて仏を尊敬させるは、僧の役前なれば、三宝は鼎の三足の如くどれ一つとて離されぬ。そのうち仏の尊高、法の利益を教えて下さるはただ僧宝なれば、まず僧分を粗末にはならぬ。

出家得度御願

次にこの所は同じ青蓮院方丈の体。雲間は二段なれども、共に一段ぢやと云うことを知らせて、この門前の桜が上へ貫きて書いてある。ときにこの青蓮院は叡山の掛け所。禁庭へのお出入りは、叡山は程遠いゆえ座主は多くはこの青蓮院に、御住まいなされたとある。

ときにこの青畳の上におわす、緋の衣に緋の袈裟を掛けられたるは、法性寺忠道公の御息男、月輪殿下兼実公の御兄、叡山の座主の御坊、慈円慈鎮和尚。小倉山蔵百人一首にも「おほけなく浮世の民におほふかな我たつ袖（そま）に墨染の袖」と、お詠みなされたはこの御方のこと。またはこなたを有明の僧正とも云う。即ち叡山の御本坊、無動寺の大乗院は、手の下が近江の湖水ぢや。そこで「ふもとは千里（ちさと）の波をただへつつ枕の本（もと）に有明の月」と、御よみなされた御方ぢや。

これなる御装束の御堂上は伯父範綱卿。松若丸の出家をお願いの体。「この稚児は有範が一子若松丸。当年九歳になります、いまだ幼稚にござれども、いかなる因縁のなすことにや、頻りに出家を願います故、今日は貴坊へ誘引仕りましたが、何卒何卒御弟子の一分に召し加えられ、御教授のほどよろしく願ひ奉る」と。そのとき和尚の御答えに、「それは年端もゆかぬ十歳未満にして、出家したいとは神妙のいたり。マヅマヅ十五歳の年までは、その稚児の姿にてこの山寺で滞留し、手習い学問をいたされ、いよいよ十五になり得度いたされて遅からぬこと」、ただ一通りのお挨拶。ところが若松丸さまは伯父範綱卿様のお袖にすがり、しくしくとお泣きなされる。その時範綱卿、和尚に向い「御覧下され、さすが小児のこと故、折角連れてまいりましたが、また里こころが出来、母の元へ帰りたきか。あの通りに泣きます」と申したればその時、若君は伯父範綱卿の袖をひかえ、「実母の元へ戻りたき野心ありて嘆くでば御座りませぬ。師の御房の仰せに十五歳まで有髪の形でこのお寺に逗留のほど仰せ聞けられるなれども、兼ねてうけたまる出る息は入る息を待たず。命終われば明日をも知られぬ不定の人命。なにとぞ今宵の内に出家の式御免なし下され」と嘆き仰せられてあれば、さては九歳にして無常を覩じ、出家得度とはアツパレの器量。弟子を見るは師にしかず。「わが山の法（のり）のともしびかかぐべしすゑたのもしき稚児のこころは」と遊ばされ、かような聡明な若君を弟子として育てたなら、定めて末には名僧知識となり、我が天台の法門も益々盛大になることであろうとお喜びなされ、「一山の碩学へは拙僧よりことわりおく。いかにも願ひ通り今宵のうちに、得度の儀式用意すべし」

とて、ただちにその夜お得度の体。

桐に鳳凰の絵解

よつて御幼稚ながら御徳の優れたことは、この壁の張り付けに鳳凰が書いてある。鳳凰は雛鳥の時分から違う。流石は元が仏の御化身。お九つの時から仰ることが違つて御座ると示す。いかさま世間なれば八ツや九ツは穴一、鬼事、隠連房（かくれんぼう）にて、腕白盛りと云うか。それが早やお九つにして無常を觀じ、出家の望みとはいかにと云うに、「弘法の因内に萌し、利生の縁外に催ししによりて」と。鳳凰の玉子が内外からぬくめられ、すでに若松丸と云う、雛鳥に御なりなされ、おつつけ衆生済度の羽を拡げて、日本国中駆けめぐりたまうぞよとて、鳳凰を画く。

さてここに桐が書いてある。「中々に見ぬ唐土（もうこし）の鳥はなし桐の葉おとや秋の夕暮」と、昔堯舜の時分は鳳凰が来下した。上げて聖人（せいじん）の御代には、鳳凰が顯れる。上宮太子御出産のときも、鳳凰が下りたゆえ、鳳来寺と云うが三河にある、後には宝来寺と書く様になりた。もとは鳳凰が来ると書く。今我が祖は御入滅以後十一年目に、龜山の院より大谷留主職覚恵法師へ、本願寺の勅号を下さるとして「それ親鸞聖人は」と、書き始めさせられたからは、表向き打ちわられて我が祖開山は、聖人（せいじん）の徳をそなえたまうお身ぢや。すでに九つの時より、鳳凰の雛鳥におわすと云うことを祝いて、この張り付けにわざわざ鳳凰を書きて、御残しなされた次第である。

菩提心を起こす因縁

また張り付けに牡丹が書いてある。周茂叔（しゅうもしゆく）が讃めた語に「牡丹の花の富貴なる者なり」と書いた。「年をへてかずそう色のふかみ草ふかくもとめる宿の花園」と。ふかみ草とは牡丹のことぢや。牡丹は花の形からして富貴な姿にみえる。今我が祖は『涅槃經』の説の如く、口すぎの爲の出家ではない。藤原の富貴の家に生まれながらも、九歳にして出家とは元が仏菩薩の衆生済度に、お生まれまされたるなれば、サモあるべきことを示す。

『大報恩經』に「一切衆生菩提心を発す。其の事一に非ず。或いは恩愛に因り、或いは怨憎に因り、或いは別離に因る」とある。いかさま播州書写の性空は、時頼大納言の内に仕え、小太郎と云う草履取りなりしが、この御家に松影の硯と云う重宝あり、君のお留守にこれを見せんとて押し戴きしが、誤りて取り落として打ち破りしを、十三歳になりたまう御公達が、我破りしと云い爺に詫びすべしと、自ら罪を我が身に負いたまい、やがて父君帰りましたまえば、御公達自ら誤りて破りしぞと詫びたまえば、父君即時に稚児を殺したまう。そのとき小太郎粗相は自分なれば、懺悔せんとおもいしが、また思う様殺されて益なし、それよりか公達の爲に出家して菩提をとむらい参らせんとて、雉髪（ちはつ）せられしが、のちに性空上人ときこえた、高德の聖人となられた。

また遠藤武者盛遠は、同じく朋輩の北面の士に、源の渡（わたる）が女房袈裟御前を恋し、艶書をたびたび通わしけるに、今は返答にもだしがたく、わが夫とよなよな寝所に入るに、髪を洗うて臥す。今宵忍び髪を濡れしを印に殺したまへ。御意に従わんと。盛遠忍び入り、髪を濡れしを印しに、首打ちて帰りみれば、日頃に恋しと思う袈裟御前なりしかば、さては夫の身代わりに命を捨てしか、可愛いやあわれ君が菩提を申わんとて髻（もとどり）を切り、後には名高い高雄の文覚上人となられた。またかの源の渡はこれも出家して、奈良大仏再建の俊乗坊重源とは聞こえた。これらは怨憎のかたきが因縁となり、また小太郎の出家は、若君に別離とわかれたが、因縁になりて出家せられた。これはみな年たけて後の出家。たま弘法や伝教は幼少の時から、無常を觀じて御出家遊ばされた。これらは皆菩薩権者の化現ぢや。化現の御方は御在世にさのみ名がなくとも、末代になるほど顯れる。また一世の人はその時代は、飛ぶ鳥も落ちる勢いありとも、後に名がない。いま我が祖は仏の御化身ゆえ、九歳にして出家遊ばされ、末の末まで御名はいよいよ高く顯させらるる。

寒梅の譬喩

さてごく御念入りの御絵は、またこの外に寒梅と菖蒲の花が書いてある。寒梅は寒中に雪を凌いで咲く。菖蒲は六月の炎暑を凌いで咲く。今我が祖は寒暑を厭わず、叡山にて二十年間修行なされ、よく御学問の花を咲かせたまうぞと示す。

一説に寒梅は古歌に「梅の花匂ふあたりの夕暮はあやなき人にあやみられつつ」とありて、春二月にもなれば、梅も盛りにして匂う筈なれども、寒梅は寒中に、はや咲き初めて匂う故、如何なるものも感心する。我が祖も幼少にして御学問の花もさき、御法の匂いの薫するは、寒梅の冬の中に薫する如く、如何なる者も聞き咎めぬ者はないぞと示す。

また菖蒲は「あやめ草幾世も絶ぬ長き根のいかで浅香の沼に生ふらん」と、あやめ草は花の形はやさしいが、根が仰山に長いもの。そこで如何で浅香の沼におうらんと、小さい池や沼の浅き処には、生い育ちにくいと。我が祖は九つの始め幼稚の有様は、あやめの花のしおらしいやさかたにおわすとも、根があやめと同じく、弘法利生の根の深い、真実清浄の阿彌陀さま。流罪にあわして根絶やしにかかりても、根が深いから、遂に日本国中へ根がひろまり、後には浄土真宗を建立したまうぞと示す。

得度式

さてこれに白き直綴を着て居られるは、御召使いの僧。この稚児は慈鎮和尚の朝夕のお膳などを、御給仕せられる稚児。すべて僧正僧都は、多く稚児を召し使わさせられるとある。貴人のお客へは、後ろ向くが礼ゆえに、背を向けて居らるる体。これなるは表の方丈にて、すぐにその夜御得度の体。これなるは座主の御坊、慈鎮和尚御剃刀をあてて、本座になおらせられたる体。これなるは権智坊阿闍梨性範とて、座主の上足の御弟子。座主にかわり御名代に御髪をそられる体。二人の僧が手に紙燭を持ちて居られるは、すべて夜の体相（蠟燭は天正年中葡（ポルトガル）人のもたらし来る所にして、それまでは皆紙燭を用いしと云う）。それゆえ前に燭台に火を点じた体も見える。よつて本山でも今時末寺の僧分が得度にも、阿弥陀堂の御門の扉の閉まるは夜の体をうつす。もちろん新門さま御得度は、今に青蓮院の宮にお成りなされ、夜中に御剃髪をなさるる。また若君の前にある盥（たらい）には湯をとりたる体。御祖師若松丸公は、御堂の上にあります御方にて摂政関白にもならせられる御身が、我々故に御出家なされるなれば、これが御俗形を拝みおさめと、お名残をおもうて、お礼をいたされよう。次にこれなる御束帯は叔父範綱卿様。「夢の世にあだにはかなき身をしれとおしへて帰る子は知識なり」と。この範綱はおつつけ四十二なれども、いまだ後世とも未来とも気づかぬ。それにアノ若松丸はようやく九歳にして、はや出家とは、やれやれ恥ずかしい我が心底なるかなと、恥じ入らせらるる体なり。

この座主の前なる机の上には香炉、香箱、水瓶の類みな得度式について、入り用の具を並べさせられたる体。ときに詳しく云えばこの得度について、色々の儀式が有りて、まず香湯をもつて大地七尺四方をそそぎ、四方の隅に幢を掛け、末席に出家する人を座せしめ、正座（しょうざ）には和尚と、阿闍梨との高座をおき、始めは在家の素服ながら故郷の方を向きて、『清信土度人経』の「流転三界中 恩愛不能断 棄恩入無為 真実報恩者」の文を唱え、それより白衣を着し、阿闍梨の前にて「帰依大世尊 得度三有苦 又観諸衆生 普入無為楽」と唱え、四方の髪をそり、和尚の前にて剃つて貰うなり。初めて袈裟を戴き首にかけ、「善哉値仏者 何人不善哉 我今獲仏法 福田之時会」と唱えり。ツイ二入沙門の身と成ると有るぞや。今はこの業はみな略したもの。

植髪の御影

さてこのとき剃りおとさせられた緑の黒髪をば、手づから御九つの稚児の姿を刻みて、その黒髪を植えて、御母君吉光女さまへ送らせられたが、今青蓮院の御境内に、植髪の御影として御遺りなされてある。田舎の衆は京参りの節は、わざわざ御札をいたされることぢや。

ときにここにひとつの不審は、この若君の御姿が、きれいに御髪を剃らせられんのに、御袈裟をば掛けさせられるはいかが。さればこれには深い思し召しがある。『大経』の序分に悉多太子が十九にして、入山学道とて御出家なされたのに、いまだおつむりも剃りたまわず、御俗体のままお袈裟を掛けさせられ、それからおつむりを剃らせられたとて「法服を着して鬢髪を剃除す」と説きてある。これは訳者の粗相かと云うに、なんの今悉多太子は天竺に御出世。浄飯大王の御太子となりて、始めて出家したまうとは思ふな。因位を云えば久遠の薩埵、往古の如来にして、最早過去に於て、御出家はすんで有るのぢや故、御俗体でお袈裟をかけたまうとも、苦しからぬ身ぢやと云うことを示す。今我が祖もそれに習いて、お稚児の御俗体に五条の袈裟をかけさせらるる。今松若君さまが始めて御出家とは思ふな。天方（あなた）は弥陀の化身。法蔵さまのときに御出家は、すんで有ると云うことをお示しなされて、再びの御出家と云うことを知らせたまう。

「からかさはふたたび雪の重荷哉」。「幾度も雪に縁ある藪の竹」、竹と云うものは雪には孝行なもの。藪に有りたときも雪の重荷をしつかりと負い、また傘（からかさ）に成りても、雪ふりには雪をもつ。弥陀は法蔵因位のそのときも五劫永劫の衆生済度の重荷を、しつかりと荷わせられ、今松若丸さまとお生まれなされても、満九十歳の間、衆生

済度の重荷をしつかりと荷わせられたぞや。

聖徳太子の霊告

さてお九つの御得度より、二十九歳にして吉水入室のその間、二十年の叡山の御修学は、この雲の間に略してある。これを御伝文に、「凡そ聖人在生の間、奇特これ多しと云へども羅縷に遑あらず」とおことわりされた。

しかしながらそのあらかたを弁ずるに、十、十一、十二、十三、十四の間慈鎮和尚に仕えてお学問。その暇々には竹谷の静厳、大僧都智海、権大僧都証真の方々にて御研究。三井の慶阿（べんあ）、醍醐の寛雅にも仕えさせられた。さて十五の御年より十六、十七、十八は南都に御遊学あらせられ、あるいは東大寺新造の屋として、二月堂の前の寺にて、今に範宴少納言御逗留の寺がある。その本尊のお足の甲に釘が打つてある。これは昔御開山の跡を恋慕うて、お歩きなされた故、堂守が釘を打ったのぢやとある。その節『般若』の理趣分を書写して、春日へ奉納なされたとある。十八の御歳は招提寺にて、行乘法印に随い律の奥義を究め、十九の御歳の秋九月十三日、河内磯長皇太子の御墓へ参詣なされ、その夜墓処にこもり、終夜読経奉讃したまえば、即ち太子が顕させられて「我三尊化導塵沙界 日域大乘 相応地 諦聴諦聴 我教令汝命今応十余歳 命終即入清浄土 善信善信真菩薩」と御告げあらせられた。そのとき範宴大僧都、さては汝の命今まさに十余歳とあれば、今十余年したらば、死ぬることぞと思し召してござられたが、二十九歳にて吉水へ御入室のとき、元祖の御教化は「本願を信受すれば前念命終、即得往生、後念即生」と、弥陀をたのむ一念に迷いの命はきれて、そのときが光明の中へ、生まれたのぢやと云うことを聞いて、さては体の死ぬることではない、心の迷いの命終わることでありたかと、今こそ明らかに知られたり、御喜びあらせられた。

今日の我々でも、信のなかりた昔は闇夜（あんや）の道中、無茶で暮らしたのぢや。それが無上の浄信が得らるるなり。三有生死の雲晴れて、信前は夜中（やちゅう）の道中、松や杉の立木をば高入道とおじ、蒲の穂を幽霊と思うたが、夜が明けるとさては松の木でありたか、蒲の穂でありたかと知られる如く、信のない昔は日の善悪、方角の善し悪しを気にかけては、松の木を高入道と思ひ、すすきの穂を幽霊と恐がりたのぢや。それが一念帰命の夜が明けると、これは雑行雑修、これは自力とさっぱりと、何もかも皆わかるぞや。そこで「今こそ明らかにしられたり」と仰せられた。

知らなんだ節の歌

それに付きオレがこのまえ、泉州佐野の飯（いい）の後室に書いてヤツタ、知らなんだぶしの歌がある。「焼けば灰、埋めば土となるものを、いらぬ後生とあざけりて、実に未来のあることを、ほんに今まで知らなんだ」。「福德を神や仏に祈りなば、なき福德もあるように、現世の欲に目がくれて、過去の因縁なることを、ほんに今まで知らなんだ」。「悪をするとき恐るる気なく、善事するときや自慢が先に、共に地獄の種なることを、ほんに今まで知らなんだ」。「親はただこの世の親を親と知り、久遠劫来のみ仏を、真実大悲の親さまと、ほんに今まで知らなんだ」。「雑行や雑修自力のすたり場は、本願たのむ一念と、ほんに今まで知らなんだ」。「幾たびかたのんでみても落ち着かず、おのがたのむをたのみにし、本願他力のお助けと、ほんに今まで知らなんだ」。「御助けの聞こえぬ内は朝夕の、礼拝供養も称名も、浄土へ参る種として、仏恩報謝の称名と、ほんに今まで知らなんだ」。「かかる末世に生まれしわたし、祖師の教えをそのまゝに、つたえて聞かせてたまわるは、伝灯知識の御恩ぞと、ほんに今まで知らなんだ」。「おもいがけなき藤原氏に、降誕なされし祖師さまを、越路越後の雪の国、わたくしゆえの御苦労と、ほんに今まで知らなんだ」。「弥陀の撰取の光の内と、思えば嗜め身の咎を、信を得たれば正定不退、こんな御慈悲を受くる身と、ほんに今まで知らなんだ」と読んだ。

功德善根を持ちそえるは雑行。御花御掃除は信の上からは御敬い。それが御助けが聞こえぬから、往生の根つぎに思うは雑行雑修。また同じ御称名も、信の上からは御礼報謝。それが御助けが聞こえぬから、往生の因と思うは自力。唯罪深きものを願力の不思議で、このままの御助けと拝み付けたのは、彼尊（あなた）の御光明の御恵みで、拝みつけてくだされたのぢや。「我が目にて月を見るぞと思ふらん月の光りで月をみるかな」。なにもかもみな彼尊（あなた）からの、御慈悲で御浄土参り。

ときに範宴少納言の君、十八の御歳に磯長御廟にて、太子の御霊告に、今十余歳すぐれば死ぬるとは、迷いの命の終わる御告げ。信決定の時節を御知らせ下され、すみやかに清浄土に入るとは、参る身に定まることぢや。よつて「即

得往生後念即生」と、その時が極楽へ往生したまうのぢや。けれどもここに体があるではないかと云うに、それはちょうど内の亭主が五日先に江戸へ出立したに、近所から留守ままいに来て、「内方の御亭主は江戸へ御出て御座るに、御無沙汰を申しました。御淋しゅう御座りましょう」。「はい御親切にかたじけのう存じます。五日前に江戸へ御立ちなされました」。ナンノ五日前に出立。まだ伊勢の桑名か宮へつかぬ道中ぢや。けれどもころろずすは、江戸へ行くとして出立せば、道中に居ても江戸へ行つた体ぢや。信決定の一念が迷いの家の踏み出しで、まだ極楽の江戸へは往生はせぬけれども、五十年は相統の道中ぢやもの、はや参りたも同じこと故、信の一念に即得往生と仰せらるるのぢや。江戸行きの男は半分踏み出しても病でも起こり、あと戻りせうも知れぬが、今は即得往生の上に住不退転。後戻りする氣遣いはない。

隠遁の志の近因

さてこの雲間に叡山二十年の、御修学のことを御含めあらせらるる。それを取りひろげて云えば、御伝文に「隠遁の志に引れて」とある。「去万里宿徳露耻」(『止観』の文なり)とて、叡山は浮世を離れた、隠遁の土地であるのに、なぜまた隠遁の志があるかと云うに、これには訳のあること。慈鎮和尚はかねて御歌をあそばし、ある時「我恋は松と時雨のそめかねて真葛が原に風さはぐなり」と詠まれた。それを堂上一統にては、一生不犯の清僧なれば、恋の情けを知るべき筈はない。恋する女があればこそ、詠まれたれとの評定。和尚迷惑に思し召し、歌なればこそつかまつれとて、「人ごとにひとつのくせはあるものを我にはゆるせ敷島の道」とは、その時の御歌ぢや。

箸鷹の歌

ところがその時の帝、土御門院様より、手にはかけ習わずとも、殺生の歌も詠むならんとて、鷹の羽の雪と云う題を詠まれよとあれば、早速に箸鷹の歌を詠みたまう。「雪ふれば身に引きそふる箸鷹のたださきの羽や白ふなるらん」と。その勅答の歌を御持参なされたは、範宴僧都さまぢや。禁庭にてさすが座主は、仏道修行のいとまには、やさしくも和歌まで達せられしかと、御褒美の御沙汰。使僧はたれぞとあれば、藤原有範が一子範宴僧都との御披露。帝聞こし召され彼にも、身よりの羽風をよめと勅定ありた。そのときに開山は、天子の御前にて「箸鷹の身よりの羽風吹き立てておのれとはらふ袖の白雪」とお詠みなされた。師も師なれば弟子も弟子。まことにいとやさしげなる、山法師なるかなと叡感の余り、御手ずからクシナシ色の御衣を下されたとある。ある時範宴僧都、叡山へお帰りなされる道中で、やれやれ今日は生涯のはれがましき席でありしぞ、もし範宴が歌つかまつらずば、父有範が汚名ともなり、かつは師の御房へは申し訳なし。また師の慈鎮様には、なまぐいに歌なされるゆえ、色々の御評定にも掛りたまう。実に叡山は一鉢一囊(のう)にして、仏道修行いたすべきに、高位のつきあい詩歌の交わり、官位の増進を争うことの五月蠅さや。実に当山は魔場なり魔界なり。今この山内に逗留せば、ついに名聞利養にふけり、後世の大事を取りはずすならんと、頻りに叡山をいとい倦ませられたことを、御ことばに顕して、「隠遁の志しに引かれて、源空上人の吉水の禅房に尋ね参りたまひき」と云い、そのことをば御式文には「何ぞ浮生の交衆を貪りて、徒に仮名の修学に疲れん。宜しく勢力を抛ちて、直ちに出要を希ふべし」とありて、それより根本中堂、山王七社へ丸三年後参詣されて、出離の要道をねがわせられたれど、何のしるしもなかりしかば、百日の間六角堂の御通いが始めぢや。

六角堂の百夜通い

そのことをば「特に歩を六角堂精舎に運んで、百日の懇念を底すの処、告げを五更の孤枕に得て、数行の感涙に咽ぶの間、幸いに黒谷聖人吉水禅室に臻り、始めて弥陀覚王浄土の秘局に入る」と。なんと京へ参りた衆は知りての通り、あの見える高い叡山の絶頂から、毎晩毎晩百日の間、京の平地の六角堂へ通わせられたぞや。今では太閤様が二条の御城を築かれてより、三条の大橋が掛かりてある。御開山の時代は橋はない。毎晩毎晩歩(かち)渡りをなされたぞや。寒中は朝起きて水で手水つかうさえ冷たいに、素足で川をお渡りなされ、お衣の袖は露に濡れつつ、ところどころが水にしたたり、氷花(つらら)が下がりと有るぞや。朝暗いうちに御本山の、お朝事に参るのさえ大義ぢや。あの叡山雲母坂の、鳥さえも通わぬような所をば毎晩毎晩かよわせられ、そして六角堂は京の真ん中。町々の番所は町々の門をたてつめ、盗人の用心夜中から先は通さぬ。それにあなたは我々が爲に叡山の衆徒、志願ありて六角堂へ参籠するものとして、番太にまで小腰をかめさせられたぞや。ところが百日満する夜の暁方(あけがた)に「法然上人今苦海を度す、かしこに至りて要津を問うべし」とのお告げ。それより喜んで吉水へお入りなされたが第二段じゃ。

通い小町の譬喩

何と世間では通い小町ということがある。小町は通わぬ。通う方は少将ぢや。けれど通わせたは小町ゆえ、通い小町と云う。今通わせられたは聖人さまなれども、通わせたは悪性ものの御座の我々。少将は九十九夜通うたれば、もう一夜のことで得通わず、根機かまけて死んだということぢや。今聖人さまはまんまと百日通わせられ、観音のお指図に依りて、この念仏門をお開きなされた。それに我々は何とも思わず、ただうかうかとして我が身に引き受けて聴聞せずば、聖人の百夜（ももよ）通わせられたが、むだ骨にならせらるるぞや。四方山の雑談には目を円うし耳をかたむけども、御法義相続の談合には、とかく目はふさぎ耳へは入らず。誹り話する口は軽々とすべるが、御念仏称える口はなかなか重い。これではならんあれではと、慎む下から懈怠がち。金銭の勘定が少し違うたら、算盤いじめて吟味するが、さて後生の一大事心の落ちつき場、昇ると沈む証ると迷う、地獄と極楽の大違い、これほど大きな違いに心をとめず、座ごと座ごとの御勸化も蛙の面に水で、地獄と聞いても恐ろしゅうなく、極楽と聞いても飛びたつ程、参りたいとも思わねば、まして朝夕の御勤めは、六首引きが大義なと、三首引きでしまうておく。それはまだしも時には、今日はくたぶれたもつたいないがこれよりと、次の間から高お礼。百夜どころか三丁か五丁の所でさえ、今日は雨降り下駄傘じやまぢやと、まるでよそごとにしておる。こんな心中では千座聞いても安心は出来ぬ。ちと本氣になつて聴聞さつしやれや。

御開山聖人は、御歳九歳の頃よりも、慈鎮和尚を師とたのみ、夜の嵐の吹かぬまに、緑の髪をそりたまひ、あらゆる艱難苦勞をなさせられ、二十九歳の御時まで、出離の要路を求めんとあらゆる靈仏靈社へ祈願をこめ、叡山から六角堂まで、雪のふる夜も雨のふる夜もお厭ひなく、百夜があいだお通ひなされ、その祈願の感応によりて、百夜満ずる曉方に靈告を蒙りたまひ、吉水の法然上人におあひなされ、たつた一席の御教化で、「たちどころに他力撰生の旨趣を受得し、あくまで凡夫直入の真心を決定しましけり」と、他力の信心を決定なされた。それから御歳九十に至るまで、「利生の縁外にもよほししによりて」とありて、末代の我々や各々を濟度したいばかりに、艱難辛苦あそばさせられたのぢや。誠にもつたいたいなことぢや。聞く氣にさえなりや、ただ今この席で安心決定が出来るぞや。くわしくは次の段にて弁す。

第二段 吉水入室之段

二十九歳御入室の体

これなるは吉水の御庵室の体。吉水とは今の知恩院と、東大谷との間、丸山安養寺の境内、少し奥へ行くと吉水旧跡の石碑あり。そこに池がある、あれが御庵室庭前の池ぢや。その上に権阿弥、蓮阿弥と云う坊あり。その門前が昔の御庵室の跡ぢや。昔はこのように筋塀築地はない。今の知恩院の繁昌を以て、古に及ぼして書いたもの。法然様はこの庵室にて御往生遊ばされた。

今の知恩院は元祖の御滅後、筑後の久留米（有馬玄藩）領内の香月の庄に生まれた、性光坊弁阿上人の建立ゆえ鎮西浄土宗なり。今の御影堂あたりが昔の知恩院、その下の山門の北、崇秦院が大谷の御本廟、法然さまの御影堂と並んでありたが、それを東照宮権現さまが、鎮西派ゆえ、あなたが天下をとらせられて、今のように知恩院の境内を取り広げるに付き、御頼みによりて大谷は五条の東へ引き取り、大雲院も御影堂も寺町へ引き取り、あとが知恩院境内になった。よつてこの御庵室は、昔の吉水のことぢや。

この白装束で御沓を召して御座るは、まさしく我が祖御開山範宴大僧都ぢや。この白装束は、僧都の衣体ぢやとある。これが二十九歳の御姿。叡山二十年の御苦勞はこの御すがたにおさめてある程に、氣を付けて御礼せられよ。なんのあなたは弥陀の化身。二十年自力の修行なされずともと思えども、酸いも辛いもおれが勤めて知っている、なかなかつとまらぬゆえ、おれさえ捨てたこれを手本に、雑行捨てよと我々への御催促。またこの吉水へ御入室までに丸三年。根本中堂そのほか枝末の靈屈へ御参籠。あまつさえ百日のあいだ六角堂へ通わせられ、ついに観音の御告げにより、吉水へ入らせられたは、末の世の同行兎角足を運ばねば、法を聞かれぬと云う御手本ぢや。

これなる門外の輿は、範宴僧都の召された御輿。外は奉供の御僧。この稚児は御召使いの稚児。僧正には十二人、

僧都には六人づつ、稚児を召し使わせられるとある。丁度御本山で御法会御練りの時分には、大童子小童子とて、御門跡さまが稚児を御連れなされる通り、今も六人連れなされるを、一人画いて略したまう。

さてこれ開山の次なるが権智坊性範、これは慈鎮和尚上足の御弟子。これは座主より見送らるる体。さてその次なるは侍従之介入道証詮。かねて聴聞の御近習ぢや。叡山に御つきそうて御給仕、また吉水入室のときも一緒に、御つき申して御給仕をせられたとある。

西仏房の来歴

その次なるは太夫坊覚明。慈鎮和尚のみもとでは乗観房、吉水では西仏房と名を賜り、本は歴々の大名の子ぢや。即ち清和天皇第四の皇子、繁野親王と申すが、左の御目に燕の糞が入り、お目を悩ませられ、信濃の国の水掛と云う所へ御入湯され、湯場の女に御手がかり、御胤を宿して出来させられた、御男子を御取り立てが雲野家の大名ぢや。即ち今の松代は、真田伊豆の守さま十萬石有る、御先代が雲野家ぢや。その雲野家九代の後胤、信濃の守幸親が一子、進士藏人道広というが、この西仏房の俗名ぢや。そのときの文章博士とて、すさまじい学者にして、京都の勸学院にて、始終儒書の講釈をせられたとある。その節南都興福寺から請待にあずかり、南都に遊学せらるるおりから、かの大相国清盛入道は、娘徳寿を入内させ建礼門院と称し奉りしが、この頃鳥羽の法皇を離宮へ押し込め奉り、御子の高倉の院は新院の御所とて、また押し込め奉り、己が孫に当たる安徳天王を御世に立て、自身はみずから関白職となり、天下の政事をほしきままにし、あまつさえ諸寺諸山を焼き払う故、諸寺諸山は清盛を仏敵としておる。ところに彼の高倉の院の御弟に、高倉の宮というがましたが、彼の清盛のほしきままの政道を憎みたまい、これを亡ぼさんとて、源三位頼政を総大将とし、戦をせんと御謀りのおりから、かの高倉の宮より三井寺へ、仏敵の清盛を亡ぼすなれば、何とぞ味方を頼むとの御教書。三井寺より興福寺、東大寺も御味方とて南都へ向け、高倉の宮に御かたらい申すまいかと云う、書面の返事がまいりた。その時この進士藏人、その返書はおれが書こうとて、「それ清盛入道は平氏の糟糠、武家の塵芥なり」と書き出した。ついに頼政一戦に及びしが、利あらずして打ち負け、宇治の平等院扇の芝にて、腹あばいて死なれた。ところが清盛怒り強く、治承四年極月二十八日、平の重衛をもつて、南都東大寺大仏殿を焼き払ろうた。「よおもあの道広め、この入道を平氏の糟糠、武家の塵芥とぬかした。逆さはりつけにあわす。連れて来い」と厳しい吟味。そこで道広は南都にて、西乗坊という寺へゆき、真教という出家になられたれども、なおも怒りつよく、連れ来たれ礫にせんと、いよいよ詮議した。そこで道広は北国へ逃げ、木曾義仲につかえ、名を大撫坊覚明と貰われた。さてそののち彼の入道清盛は、その以前に我が子重盛公にも死に別れ、そのうち北国より義仲起こりて、ついに平家を西国へ没落させた。この勝ち戦に義仲は、朝日將軍と呼ばれるほどに、身の威光に誇りしがため、鼓判官の讒言により、ついに関東よりは範頼、義経を討手にむけ、栗津ヶ原の合戦に、木曾の軍勢は打ち亡び義仲も討ち死にしたれば、覚明はせんかたなく叡山に登り、慈鎮和尚の弟子となられたが、あながちに後生菩提が苦になりて出家したでない。頼る主人もなく、また世の盛衰の有様にて、マア坊主になれとて出家した。そのときに名を乗観房と下された。ところが叡山中で仏学者は沢山あれども、おそろくは儒書一まきは、おれが片腕ほど知つたものはあるまいと思いが、範宴少納言様とは、弟子朋輩のことではあり、仏学のひまひまに儒書の咄をするに、範宴僧都はみなそら覚え、『史記』、『左氏伝』、『文選』、『淮南子』、その他経史、百家の書、なんでもこいぢや。そこで荒肝とられ、やれやれ叡山中に仏学者はありうち、このほうは勸学院にて文章博士となり、儒書一まきは、我に及ぶ者はあるまいと思いに、さては範宴様はただひとではましまさぬわいと、ふと帰依の思いが起こりしが、その後ある夜の夢に、根本中堂へ御礼をすると思いに、薬師如来がたちまち、範宴少納言と拝まれ、また西方の観音様が、雲間に顕れたまうとの夢にも、また御開山と拝まれ、またあるときは範宴少納言、御机に依りかかりて御座ると夢見しが、たちまち正身の阿弥陀如来と拝まれたまう。かかる霊夢を七返まで見て、強慢邪見の角をとられ、ついに慈鎮和尚にことわり、「私は範宴僧都について、なにかのことを御尋ね申し上げとう御座る」と。その時座主にも「こなたは、範宴に有縁の人なれば、範宴に付いて学ぶべし」と慈鎮よりのゆずり弟子が、この西仏房ぢや。このお方が即ち今の信州塩崎の、康楽寺の開基ぢや。その西仏の孫（あるいは子なり）が、浄賀法眼とて覚如様の御時代に、御命令をこうむり、この四幅の御絵を、こう書けそう書けとの、御指図を蒙り書かれたのぢや。かかる歴々の学匠さえ、御徳を慕うて帰依せらるるもの。御流れの御門徒として、御帰依申すまいようはないとて、ワザワザとの御示しぢや。

法然上人に御面会

さてこの室内の右なるは、正しく範宴大僧都。始めて法然聖人へ御会いの体。これなるは元祖法然聖人。六十九歳の御老体。御手に数珠をつまぐり、御念仏をこたりたまわぬ体相。ときのこの範宴様の御尋ね、「私はしばらく山内に籠もり、慈鎮の会下は云うに及ばず、一山の碩学諸事の達者に会い、出離の要道を研究すれども、余法は末世の機に及び難し。今聖人には末代の時機相應の要法を、見きわめたまうことあらば、何とぞ親しく教えたまえ」と。その時法然聖人、「いささか愚慮に存することなし、ただ弥陀の本願の不思議にたすけられ、念仏して往生するより外に弁えたる義候わず」と、たった一口に答えたまう。何ぞむつけしき経論を弾きて、御答えかと云えば、「ただ弥陀の本願の不思議にたすけられ、念仏して往生するより、外に弁えたること候わず」と御答えは、弥陀の御本願は、智慧や学問では参られぬ、一文不知の身にならねば、往生はならぬと末世の御手本ぢや。ところが御開山はその一句の言下に、瓦解氷消とて、多年の疑いが一時に晴れさせられて、すぐに天台を捨てて、浄土門へ御入りなされたぞや。そこでさては速やかなる了解、まことに大唐の道綽禪師の、氣風ある人なりとて、道綽の綽の字に源空の空の字をととりて、綽空房と下された。御開山の一念帰命が、すぐに末代の総御門徒の往生の礎ぢや。

須達長者の因縁

ちようど須達長者、釈迦如来様と我が国の舍衛国へ、御招待申したいとて、舍利弗さまを御一人御供して帰り、大院太子の別荘を貰い、金を敷きつめて買い求めそれから、伽藍の縄ばりをせられた。舍利弗様がお指図で、そこへは大講堂、ここへは十三重の塔、かしこへは山門とあらまし、伽藍の縄ばりがすむと、舍利弗仰向きニンヤリ笑われた。いかにと問えば今祇園精舎の縄ばりがすんで、はやそこもとが未来生まれる。刀利天に宮殿が出来ましたと云われた。それは見たい、見せて下されと。その時舍利弗が須達に天眼通を貸してやり、見せられたとある。ナント祇園精舎の縄ばかりかすむなり。はや未来生まれる宮殿が出来るぞや。

今御開山吉水で、初めて一念帰命の御了解の所が、末世末代御門徒の、礎の地場が定まりたのぢや。地場は定まりても普請させずばならぬ。その普請とは、聞其名号信心歓喜の外はない。

善恵房の安心

さてこの縁端に居られる一人の御弟子は西山派の開山、善恵房証空さまぢや。この御方は元祖の門人でありながら、二十の願を勧むる御方。よって初めは共にこの座中に御座りになりたれども、元祖が御開山に御咄の、他力往生の旨が合点がゆかぬ。そこでそつと立ち尻むけて、池を眺めて御座る。非常のことは常人の耳に入らず、なほほど下地から、御弟子でも宿善がなければ聴聞はならぬ。このお方の御了解の悪いことを、この池のほとりに葦を書いて、お知らせになられた。すなわち元祖のお歌に「阿弥陀仏といふより外は津の国のはのこともあしかりぬべし」(『和語灯録』)とありて、善恵様のお了解は、表は一類往生念仏義とたてて置きて、あとで傍正開会とて、この念仏申すひまひまには、法華もよめ維摩、勝曼經もとなえ、何をするのももと、念仏胎内の功德とさえ思えば、『大般若經』をとなうるが、やはり念仏の胎内の功德なれば、すぐに『大般若經』が念仏ぢやとお勧めぢや。よってこの葦を書いてみせて、本願のお誓いの正定業の念仏より外に、色々と言ひ訳して、雑行つとめるは悪いぞよとて、阿弥陀仏と云うより外は津の国の浪速のことはあしかりぬべしと、葦を書いて御異見あらせられた。

青柳の絵解譬喩

またここに柳がありて、その下に雑木の書いてあるは、「青柳の糸ばかりこそなびきけれ木毎に春の風は吹けども」と、まことに元祖の春風によくなびきたまうは御開山、喩えばさながら、柳の如くやさかな御安心ぢやぞや。他の御弟子衆は丁度、雑木の春風になびかぬ如く、三百八十余人もあるなかに、元祖の御教風になびかぬつれない、自力の青みだった雑木見るような、御弟子衆ぢやぞよと、比況して柳と雑木とに書き分けて御遺し下された。昔ばかりではない当時でも、かの三業各立安心をつのは、この雑木ぢや。何ぼうでも善知識の御教化になびかぬ。なんと同行衆とてものことに、柳になり弥陀の本願になびこうではないか。「身は柳となりと吹けそちの風」。助けたまえは願いぢやない。無心ぢやない。運心ぢやない。ただこれ大悲の勅命に信順する心なり。さてはそれで御座りますかと、なびくが信順である。

この御門前の柳と、門内の池の辺の柳とは、元祖と範宴僧都とに、御喩えなされ、門前の柳は元祖に喩えるとは、「春

の来る道のしるべに我宿の柳の眉やはやひらきけん」と、春風の御來客があつたで、柳の主人も眉を開きて、喜んだと云う歌のころ。今範宴少納言の春風のお客が有りて、法然聖人の柳も眉を開いて、お喜びなされると云うことを示す。又門内の柳は御開山。春風は元祖。門前の柳とはありやこりやになる。即ち歌に「春風に池の氷のとけそめて結びかへたる青柳のいと」と、このとき範宴少納言、今まで叡山二十年の御修学は、池に氷のはりつめた如く、それが他力の暖かな、法然聖人の御教化の春風に会わせられ、今は胸にはりつめた、一心三觀の氷も解けそめて、第十八願の柳の枝に、御助けは一定と、極樂参りの緑の糸を、結びかえたまうぞよと示す。

鴛鴦の譬喩合法

さてこの池の内の鴛鴦（こまどり）は、元祖と御開山にお喩えなされた。なぜ鴛鴦にお喩えなされた。されば鴛鴦は極めて仲の睦まじきものぢや。昔関東の阿曾沼という処の領主、一日狩りに趣きたれども、一向獲物がなかりし故、池の辺りにて鴛鴦のめどりを撃ちかえりて食するに、鴛鴦の雄鳥男と化し来たり「日暮るればさびしきものを阿曾沼のまこもかくれのひとりねぞうき」と告げると思いが、たちまち雄鳥となり彼の領主の肩にとまり、羽ばたきすると首が落ちた。かたき取りに來たに依りて、鴛鴦の羽をつるぎ羽と云う。それ程に仲のよい鳥ぢや。

化土の往生について

これについてちなみに化土のことをちよつと弁ず。同行は何ぞと云うと化土へやる。阿彌陀様も意地の悪い。折角浄土へ引き取りたれば、皆引ってくるめて真実報土へ往生させたがよい。それに化土で難儀させるとは聞こえぬと思えども、そうでない皆一真実報土へ参るのぢや。されども十九二十の行者は、弥陀の本願を疑うた罪が目に見えて、真実報土が拝まれぬのぢや。

丁度昔弘法大師が、延喜の帝へ夢の御告げが有りました。「昔我薩多に値い、親しく因明を伝う。無比の誓願を起こし、辺地異域に侍り、昼夜万民を憐れみ、普賢の悲願に住す。肉身三昧を証し、慈氏の下生を竣（ま）つ。我久しく土中に居し、衣破れ髪生じたり。願はくは衣と袈裟を与え、髪を剃らしめよ」と御告げがありました。それより袈裟衣並びに剃刀を清浄にうたせ、般若寺の觀賢僧正と、資紙中納言を勅使に立てられた。觀賢の弟子に、淳祐と云うが有りて、何とぞ御供して行きたいと願われた。よつて召しつれられたが、觀賢はまのあたり弘法をおがみ、石の唐戸へ入り、髪をそり衣を召しかえさせたまうに、淳祐はエエ拝まぬ。「何として私は拝まれませぬぞ」と問えば、「それはそちが罪障の深い故ぢや。懺悔せよ」と。懺悔しても拝まれぬ。そこで師もあわれに思ひ召し、淳祐の手をとりて、大師のお膝をなげさせたまうに、その手に当たりながら目には拝まれぬ。その撫でたる手に五分法身の匂い香のこり、一生手を洗わず、その撫でたる手を紐にくくり、一生首にかけられたが、真言の呪字袈裟のはじまり。何とこれで合点せられよ。大師は師匠の觀賢には拝まれても、弟子の淳祐には拝まれぬと云うは、大師に隔てはなけれども、拝まれぬはこなたの罪の深いゆえぢや。

今の同じ真実報土に往生して居ながら、弥陀が拝まれぬのは、彼尊（あなた）には隔てはなけれども、おのが本願を疑うた罪が目に見えて拝まれぬのが化土ぢや。あなたは平等覺ぢやもの。隔てはないけれど、エー拝まぬのはこちらの咎ぢや。

水の種々の徳ある事

さてこれが吉水の池の体。この水には種々徳がある。一には卑流の徳。水と云うものは高い所より、少しでも低い所に流れくだるもの。今弥陀の本願を信ずる手前では、弥勒菩薩でさえ「惡露不淨」とのたまひ、善導様は「我等愚痴身」と仰せられ、横川様は「予の如き願魯の者豈に敢えてせんや」と卑下せらるる。元祖は「一代の聖教をよくよく学すとも」と等と、我が身を地獄一定と卑（ひく）うもてば、その信機のくぼたまりへ御助けの信法の水は溜まるぞや。よつて「憍慢のいただきには智慧の法水停まり難し」とのたまひ、我が祖も鴛鴦が岩の上より、すでに水中へ飛び込まんとする如く、我が身はもろきいたずらものと、機を深信して弘願他力の、浄土門へ御歸入の体をしらす。昔は上に仏法ありて天使を始め、関白大臣にもありたが、今は兎角下なものにある。これは昔上にありた法が、段々と下へ流れ下りて、今では田舎の隅々まで、この尊い御法を聴聞する様になりた。水が自然と高い処より、卑みに下るの道理ぢや。また今日少々金でもあるとか、また官家仕官の身が高官に進んだとて、たかで人間ぢや。エライものぢやと氣を高うもつて、法を聞かずにいると、ガタガタベタ下がり三惡道ぢや。明日をも知れぬ命を抱えて百年二百年

も生き長らえらるる様に思うて居るは、浅ましきものぢや。「人は只あがりあがりて落場をしらぬなり。不断恐ろしく思ふべきなり」(『御一代聞書』)。また「とまるとも心高きにとまるとも谷の戸おもへもとの鶯」ぢや。

猫に名前を付け替える話

この前も猫好きな男が、村中で庄屋ほどエライものはないとて、猫に庄屋という名をつけると、近所の男云うには、庄屋より代官がエライ。代官と名付けよと云う。イカサマとて代官と名を付けた。ところが代官より大名がエライとて、大名と名を付けた。ところがまた大名よりは公方様がエライ。ソコで公方と名を付けた。ところが公方より天子サマがエライ。天子と名を付ける。ところがまた天子でも御天道さまには叶わぬ。天道と名付けた。天道さまも雲が出ると思れさつしやる。雲がエライから雲と付け、雲も風が吹くと散るから、風がエライと風と名づけ、風でも屏風たてると、エ入らぬから屏風と付け、屏風も鼠には叶わぬ、喰い破らるるからとて鼠と付け、鼠も猫には叶わぬ、ヤツパリ元の猫にしておきましょうと云う咄しがある。

おれは金持ちぢや。おれは高禄ぢや。おれは官が高いと、身を持ち上げて、臨終の一念には、一生造り重ねた罪が追いよせて、目をむいて地獄へ落ちねばならぬぞや。「きくならく奈落の底に入りぬれば利利も首陀もかはらざりけり」と、死ぬると賢愚も貴賤も、子供が狗子(ちんころ)さげる如く、釜の中へザンブリとはめるぞや。サアこんな押付け焼いて捨てる。晒頭(しやりこうべ)になんにも位はないほどに。ただ我が身は悪きいたずら者と、機を卑う持ちて本願を信ぜよとて、水をお書きなされたが、第一の流卑の徳ぢや。

水に湿物の徳ある事

第二に湿物の徳。水は地中から生えいずる五穀を始め、草木まで皆水の湿りをかりて育つ。その中別して米は田種(たのみ)とて、水が体になりて実のるで、干魃すると植え付けがならぬ。大旱(たいかん)に雲霓(うんげい)を見るが如くとて百姓の顔色がない。よつて水さえあれば春は苗代、夏は植え付け水草を取り、秋は実のり冬おさめ取る。今各々我等が胸には、結構な宿善の田地があるぞや。なれども雑行の薄(すすき)の根やら、雑修の笹の根がからみ、その上自力の石瓦が多い荒れ地ゆえ、疑いの狐が住まい所とする。

善知識の御教化の鋤鋤で、雑行雑修の笹や、すすきの根をほり返し、自力の石瓦をのけ狐を追いやり、後生大事の畦をつけ、聴聞の水を貯え一念帰命の植え付けをすまし、不斷光の日輪の御照らしで、信心の米を取るの暇がいる。今は一念帰命の植え付けするなり。往生一定御助け治定と、信心の実が入るのが一時ぢや。稲の穂も実が入るとうつむく。信心の実が入ると、同行も慶喜報恩の頭(つむり)が、うつむかずはならぬぞや。うつむかぬのは実の入らぬのぢや。

田の実の譬喩

よつて当流の弥陀をたのみまいらせ、タノミ申せとは、空腹なときに、ご飯喰いたいと思うにうそはない。またご飯ほどのみになるものはない。今地獄一定の腹が減つたれば、助けてやろうの本願を余念なく、ご飯の如くに思うことを、タノミまいらすとは仰せられたぞや。

全体和語でタノミと云うは、この米から出た言葉ぢや。よつて八朔をタノミの節句と云うは「八朔や踊りた足をかしこまり」と、江戸でも大名などが、八朔には公方さまへ御目見え、そのときに御老中が国主の方々、外様の面々、譜代の者ども、八朔の御祝儀申し上げますとの披露。京大坂でも歴々の町人は、別家より主人の方へ、八朔に礼にゆくは、御主人様をまことに米の如くに存じます、田の実に思いますと行くのぢや。また八朔をなぜタノミの節句と云うなれば、八月は田に実の入る節句と云うことぢや。

また田の実ほど結構なものはない。なぜに米の草を稲と云うぞと云えば、命の根と云うこと。よねとは世根と云うこと。「たのみなり餅になる草酒の草米が変じて何にでもなる」と。そこでタノミと云う縁より、田スケル、田スカル、田ノシム、宝という言葉が出る。田に水がしみこんであるは、押付け米が出来るとて喜ぶ故にタノミ、タノシム。田に米が出来ると金銀の回りがよい、そこで宝と云う。

よつて深くタノミ参らせとは、空腹なときに米ほどのみはない。今地獄一定と腹がへりたれば、助けにやおかぬ御六字の、誠を米の如く思え、余に心をふらぬことを、深くタノムとは御意なされた。ときにこの飯と云うものは、砂糖嘗めるように甘うもないが一日のうても暮らされぬ。この信心のご飯も、百円もろうた様にも、喜ぶものもない

が、一息一息に無常の腹が減ると思えば、片時も離されぬ。そしてご飯は喰うてみて、飛び立つ程に甘うはなけれども、儉約しても三度ずつのご飯は欠かされぬ。称えてみてさのみ嬉しゅうなければ、御恩思えば一日に、朝夕二度の御礼は欠かされぬ如く、その信心のご飯は、もとは南無阿弥陀仏の米。その南無阿弥陀仏の米は、御聴聞の水がなければ、取りえられぬぞや。そこで聴聞の水を貯えよとて、ここに池水の水を御遺し下された。

水に養物の徳ある事

三に養物の徳。さて水の徳を段々弁ずるに、今日人間は鼻の下を養うために、息をして働くのぢや。その養う食味の料理は、根本がのうては整わぬ。醤油も水で仕込む。酢も酒も水で仕込む。米をあらうも水。鍋釜へしかけるも水。箸にかけるほどの料理に、水の御陰蒙らぬものはない。とんと食物の親玉が水ぢや。

諸宗の体は念仏

今南無阿弥陀仏の水を離れて、八家九宗の御さりの料理は整わぬ。禪宗の座禅のご飯も、南無阿弥陀仏でしかける。真言宗の醤油も、南無阿弥陀仏の水。よつて天台大師は「弥陀を以て法門の主と為す」と仰せられ、一切の御さりの料理は、南無阿弥陀仏の水を離れては、出来ぬと云われるのぢや。「一切の香木摩利山に出で、一切の江河無熱地より出づ」と、一切の善法は弥陀海より出ず。いかさまそうぢや。弥陀の本願が一転して小乗となり、その小乗の五戒十善が、一転して神道の正直、儒道の五常五倫となりたものぢや。とんと神道の高天原の酒も、儒道の仁義礼智信の酢も、元は南無阿弥陀仏の水が体になりて出来たものぢや。よつて天台宗が一転して出たる法華宗でも、平生は念仏は申さぬけれども、法華の属累品を説きおわると、王宮に韋提希夫人の騒動がおこり浄土の観経を説きにゆかれる。それからまた歸りて、法華の二十二品藥王菩薩本地品を説かせらるるに、「我が滅度の後、後五百歳の時、若し女人有りて、藥王菩薩本地品を聞きて、説の如く修行せば、即ち安樂世界に往生す」と、うまいことが説いてある。成仏は仏在世の、八歳の童女一人にかぎる。のち五百歳の後の末の世の女人は、如説に修行して、極樂に参れと説いてある。ただ参れと説くばかりで、参るべき因が説いてない。いかがして参られますと云う機になれば、ぜひ法華をやめて、浄土の三部経へ来て、「三心を具する者必ず彼の国に生ず」、ついに南無阿弥陀仏の信心に、入らねばならぬ様に説いてある。よつて短念仏、長法華。念仏を広げたが法華、法華をちぢめたが念仏。法華宗でダブダブと、云わつしやるのが念仏を法華八軸と、長うひろげて唱えて御座るのぢや。「夕立や法華かけこむ阿弥陀堂」で、なんぼう日蓮宗が宗法で、平生念仏を称えずにいても、まさかのときは称えねばならぬ。かの善光寺如来が、江戸へ開帳にいかれた。行きしなかりには、甲斐の国を通りたもう。甲斐は法華が多い。かの如来の御輿を、村おくりを送らねばならぬ。その時は念仏のかけ声で送るのぢや。ある法華の在所に庄屋が機転者で、おれがそちの畑になに蒔いたといえ、みな御輿もちもち、「菜まいた菜まいた」。その次に在る所の同じ法華宗。今度は庄屋おれはこの酒器（たんぼ）に甘茶を入れる。このたんぼばなしに、タンポといえ、甘いタンポと云え。これらはかたことながらみなナマンタンポの念仏になりて送りたと云う咄しがある。スリヤ何宗でもつづまる処は念仏でなければならぬ故。法華宗のみなかみの智者大師は、平生に法華説誦、臨終には観経をよんで、念仏門に入りて往生なされた。その時に、「四十八願、莊嚴浄土、華池宝閣、往き易くして人無し」と云う、四句の御文まで作らせられた。そのことを元曉弥陀経疏に、「嗚呼教観を明らかにして、たれか智者にしかんや。臨終観経を挙げ、浄土を讃じて長く逝きぬ」とほめてあるぞや。その外真言でもつづまる所は念仏。大師の御歌に「空海がころのうちに咲く花は弥陀より外にしる人ぞなき」と詠まれ、大徳寺真珠庵の一休、達磨の讃に「さとりたりきやつが胸にはなにあるへんてつもなきあばら骨かな」と。「九年まで座禅すること無益なれまことの時は南無の一声」（一休の真筆廬山寺に有）と。さあ諸宗のさりの体は、南無阿弥陀仏ぢや。

故に御開山聖人も、「難行の小路まよひやすきによりて、易行の大道にをもむかんとなり」と仰せられて、末代衆生の御手本に吉水に入室なされた。なぜなれば聖道門の法は大道なれども、世くだり人つたなくして、造悪不善の末代今時の悪人女人は、とても自力修行の聖道門ではさとられぬ。しかれば機のかたから云えば小路ぢや。本願一実の大道は、五乗齊入の唯有浄土二門可通入路の捷徑（はやみち）である。『改邪鈔』には「男女善惡の凡夫をはたらかさぬ、本形にて、本願の不思議をもて、むまるべからざるものを、むまれさせたればこそ超世の本願ともなずけ、横超の直道ともきこゑはんべれ」と仰せられ、また『持名鈔』には「阿闍宝生の浄土もたゑにしてすぐれたり。密嚴華藏の宝

利もきよくしてめでたけれども、乱想の凡夫はかげをもささず、具縛のわれらはのぞみをたてり。しかるに阿弥陀如来の本願は、十悪も五逆も皆摂して、きはるるものはなく、すてらるるものもなし。安養の浄土は謗法も闡提もひとしく、むまれてもるるひとなく、のこるひともし。諸仏の浄土にきはれたる五障の女人は、かたじけなく聞名往生の益にあづかり、無間のほのほにまつはるべき。五逆の罪人はすでに、滅罪得生の証をあらはす。されば超世の悲願ともなづけ、不共の利生とも号す」と仰せられたれば、末代の我々やおのおのは、御開山聖人の御あとを慕い、偏に本願他力をたのむより外はない。

第三段 六角夢想之段

これは祖師三十一歳。四月五日の夜の七つ時の御夢。六角堂へ御参詣。この通りに観音様が白い御衣に、白い袈裟白い蓮華にのらせられ、「善信善信」と御呼びなされ「行者宿報設女犯 乃至 臨終引導生極楽」と、救世菩薩よりこの四句の文を、告げさせたまう御夢想の体。貴方が一人合点せずに、一切群生に聞かしむべしと、この右の方にチイソウなりて、聞いて御座るが御開山。

それからそろそろ御座を立たせられ、御堂縁の正面より東を御覧なされたれば、峨々たる岳山がありた。岳山とはわれわれが人に、まけまいの懦弱心を峯にたとえ、惜しい欲しいの貪欲の深さは谷におたとえ、あるいは可愛いと思えばメツタに可愛し、憎いと思えばヘラヘットウ二憎い。その出で入りすることは、さながら山の如く、そのうち叢林棘刺（そうりんこくし）のムシャクシャと、生い繁りた棘（いばら）枳（からたち）に喩えたは、遠くはその時の御門葉、近くは今日在座の我人。さすれば峨々たる岳山の、数千万億の有情とは、私がことごとく引き受けて聴聞せられよ。

御開山は三十一の年、我々衆生済度のため、夢に見たと御意なされたぞや。我々は夢にだも御開山を見ず。あなたの石を枕に雪を衾（しとね）の、御苦勞を一晚でも夢になりとも、見たことがあるかや。子や孫のことは毎晩毎晩見る。よほど打ちこまねば夢には見ぬものぢや。「うたたねに恋しき人をみてしより夢てふものはたのみそめてき」（小野小町）。若きときホレコムと夢にまでみる。御開山は三十一の御年。あんまり御同行を恋こがれ、夢にまで見たと仰せらるるが、この夢想の段ぢや。

夢に四種ある事

さて『善見論』には、夢に四種を明かさせられてある。一に無明の習氣の夢。西瓜盗んで逃げる後から追われ、大地が凍りて居て滑りこけて逃げられず、汗シツポリとなり、目覚めてみたれば馬鹿馬鹿しいと思う。夏冬一時の跡形もないことを見るは、煩惱の所為ぢや。二に四大遍増の夢。熱氣には火に入り、風氣には水に入るなどの夢を見る。皆病の所為ぢや。三に巡獵旧識の夢。見たこと聞いたことしたことを見る。四には善悪先相の夢。人間一生の浮き沈み、善悪ともに夢のしらせがあるものぢや。ことに仏菩薩が凡夫に告げたまうことは、夢でなくてはならぬ。

観音は普門品に「まさに長者居士、宰官婆羅門、婦女身を以て得度する者は、即ち長者居士、宰官婆羅門、婦女身を現じて説法を為すべし」の御約束あれば、善信房そなたは、肉食妻帯のなりで、弥陀の本願でタスカルと云う化導をせよとお告げ。ことにここに白の姿に白の衣、白の袈裟に白の御蓮華。白づくめは菩薩の黒人（くろうと）をやめて、在家の素人（しろうと）仲間へ入り、弥陀の本願を弘めようぢやないかと云うおしらせ。また『末法灯明記』には、末世には袈裟変じて白からんと仰せられ、玄人の出家も皆素人になると云うこと、その素人の白の法が弥陀の本願故、『大経』には「専求清白之法」と御説きあらせられ、自力疑心の垢のなき清浄な代物、店の代物でもこれは京向き、これは田舎向きと、人氣の見分けが商人の肝心。商いの上手下手はここにある。弘法伝教の御大徳は、人氣のすぐれた善い時節ゆえ、天台真言の四ヶ大乘の法も行われたが、御開山は仏法のお商いが上手ぢやで、末世末代の素人向きは、とても四ヶ大乘は人氣に合わぬ。浄土真宗の証道今盛んなり、弥陀の本願に及ぶものはないと、人氣見届け肉食妻帯。本師の弥陀と脇士（きょうし）の観音と御相談なされて、末代濁世に相應の、浄土真宗を開かせられた。

甚五郎の猫細工

左甚五郎、菊池藤五郎。二人とも名高い細工人。ある時兩人鼠を造られ、猫に目利きさせしに、藤五郎の鼠は一旦くわえたれども離す。なぜなれば細工は、上出来なれど、体が木であるからぢや。甚五郎の鼠は不調法な出来なれども、猫がくわえて縁の下で、頭からかじかじ喰う。なぜなれば体が鯉節。故に細工にはかまわぬ。

安心の体が自力の木故に、在家の素人が喰い付かぬ。今浄土真宗は細工は肉食妻帯。いかにも細工は下手なれども、本為凡夫といかなる衆生でも、名号聞いて信ずる安心の鼠が、六字の鯉節ゆえ、在家の素人の猫がニャンマンダブツと喰い付くぞや。

白蓮華の事

広大の白蓮華に端座してと、観音様の御姿の割合には、蓮華が大きな。これは一切の凡夫逆悪洩らさず、御助けとある。大きな弥陀の本願、南無阿弥陀仏の信心の御法ごと、蓮華に御たとえなされた。この信心を蓮華にたとえるには、五つの訳がある。一には汚泥不染の徳。「高原の陸地には蓮華生ぜず。汚泥の湿地能く蓮華を生ず」（論註）と仰せられ、「衆生貪瞋煩惱中 能生清淨願往生心」にたとえたまう。二には一茎二花の徳。他門は梅桜のごとく、同行一人の枝一本に、信心の花が沢山咲く。御当流は蓮華の如く、同行一人の枝一本に、信心の花一つ咲く。三には花菓同時の徳。信の花が一念發起するなり、往生一定の極樂参りの実を結ぶ。四には一花多菓の徳。往相廻向の信の花は、一つで、還相廻向の衆生利益の実は沢山。五には中虚外直の徳。蓮華の茎は外は直く内すき通る。信の同行は外に仁義五常の掟を守り、内は御助け一定とすき通る。また蓮はむさい泥の中より生じて、その泥にも染まらず風に振られながら、歪みもせず正直に花開く如く、煩惱悪業の泥から生え、愛欲の水の中、惜しや貪やの風にもあいながら、真実の信心は少しも、動乱破壊せられず、生きては皇国の良民となり、死しては大般涅槃の証りを開くが、念仏行者の身の幸せである。こういう訳ゆえに、広大の白蓮華を以て御示しなされた。

蓮華の譬喩

「蓮を為る故に花さく。花開いて蓮現ず。花落ちて蓮成ず」とて、法華宗では、妙法蓮華經の妙法をば、蓮華にたとえたれども、機をたとえぬ。今は信ずる機までを蓮華にたとえて、「是人中分陀利華」とあるぞや。ただ御たとえかと云えば、おつけこの通り蓮華を、足の下にふまえる様に、御さとの身になるのぢやぞやと、『安樂集』には、立てば即ち帝釈前に在り、座すれば即ち梵王後ろに在りと。極樂へ参ると煩惱瑠璃の大地さえ、すぐには踏ますまい。一足一足蓮華を生じ、その上を踏むようと、よつて右の足をさきへやれば、右から二ヨキリと蓮華が上がり、左の足を向こうへやれば左に上がる。竹田出雲の細工でも、仏の腕でかなわんぢや。その蓮華は誰が作れた。『観經』の第七華座觀に、蓮華のことを長々説いて「是本法藏比丘願力の所成」と説いてある。我々が足に踏む御蓮華まで、弥陀が御手ずから御こしらえ、銘々が踏んで来た草履、おれが直してさえはかぬのに、参りてくれたが嬉しいとて、足に踏む御蓮華まで、弥陀が直して踏まして下さるとは、何たる幸せごとぞと、喜び上げては、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

さてここに観音様が、御蓮華にのりて御座るは、第二十二の願に報い、この蓮華にのりて、迎えに出かけようとする。還相廻向を御示し、また左の御手に小さい、小蓮華を持つて御座るは、信をえた者はこの蓮華にのせて、つれて行こうとの往相廻向を示す。その蓮華にのるは、自力疑心の雑木の花の信ではゆかぬ。蓮華の如くなる、清淨真実の信心をえらるるが、何よりの肝要である。

三人同夢のこと

さてここに三人寝ていたまうは、我が祖は岡崎、元祖は吉水、殿下は月の輪の御屋敷にて、同じ夢をみたまうことを示す。ある時殿下元祖に対し、御尋ねには、「在家の申す念仏と、聖人の申させらるる念仏とは、いずれが勝れますぞ」と。その時のお返事に、「わが賢くて称うるにはあらず、御廻向の信徳より、称えさして下さる念仏なれば、更にその利益にかわるることなし」とありた。その時殿下の仰せに、「しかれば私の娘玉日の宮に、婿の僧一人をつかわされて、在家往生の先達となされたし」との、御所望なりし故、元祖の御配意にて、「善信房参らるべし」とのことでありた。それより殿下と御同車遊ばされて、関白の館へ至りたまひ、婚姻の儀式もすみ、翌日玉日の宮と、また御同車なされ

吉水へ入らせられたれば、元祖御覽遊ばされて、「子細なきよき坊守かな」との仰せでありた。そのとき元祖は真ん中に、南無阿弥陀仏と、楷書にて御筆を染めさせられ、下に源空御手判、左に行書にて南無阿弥陀仏、下に善信御手判、右に草書にて南無阿弥陀仏、下に玉日御手判の名号を遊ばされた。今京都一条通り榎木（さわらぎ）町西宗寺とて、西山派の浄土宗の宝物。これを肉食妻帯証拠の名号と云う。

肉食妻帯の事

サアこれが天台宗で云う、同事性の御慈悲ぢや。凡夫を導くはおれも凡夫ぢや。妻が可愛味（うま）い者は好きぢやと、随類応同して御勧めなされねばならぬ。源の頼光が鬼を退治に、丹波の大江山へ行かれたときに、「手前も兼ねて鬼神道を、学びとつて参りました」。「ソナナラ先ず人の肉を食い習え」との事で、血なまぐさい生肉を「サア喰え」と、前へつきすえられたが、「兼ねて望む人の肉サラハ賞翫仕る」と、がじがじと喰われたぞや。この凡夫の鬼に付き合うには、尽十方の弥陀も愚禿親鸞とやつれアラレもない肉食もなされたぞや。ここが智慧ぢや。

「赤はだに帯を常磐の雪のはだ」と、夫義朝の敵の清盛に、何の枕かわしたかろう。けれどもいやと云はば、豊若牛若乙若の三人を、芋指しにせられねばならぬゆえ、我が子が可愛さににくい髭面の清盛に随うたは、常磐御前ぢやぞや。無漏の浄土より御出ましの御開山。何と玉日の宮と、御祝言がなされたかろう。しかれどもこうなければ、末世の衆生に疑わせて、地獄へやらねばならぬ故、勿体ない御心に染まぬ、肉食妻帯までなされたぞや。

雲助が駕籠かくは賃銭が当て。三井の店の売り子は、別家させて貰うが当て。御開山の肉食妻帯は、かかるものも御助けと疑いはれさせ、信心を取らせるが当て。それを清僧に身を堅めて御座りては、在家では助かるまいと往生を疑う故、弥陀の御本願は末代濁世の、造悪不善の我等ごときの、凡夫のために起こしたまえる、無常の誓願なりと、御示しなさる程の御骨折りは、並大抵のことではないぞや。

六角堂の縁起

さて六角堂とあるに、この堂は四角でないかと云うに、これは柱殿、この奥に六角堂あり。本尊の観音は、聖徳太子七世の守り本尊。「日本皇子に送る。衡山沙弥德蓮」と書き、淡路島へ上がらせたまう。太子御首に話したまわなんだ。この観音様を六角堂に、御安置申した濫觴（らんちよう）を云えば、十六歳の御時、守屋退治の戦をなされ、御勝ち戦の記念にとて、四天王寺を建立せらるるに付き、山城の愛宕の郡は深山なれば、これにて伽藍の材木を切りたまうに、一人の童子顯れ、東に禿杉あり、紫雲たなびきたまえと案内せられた。これは明けの明星でありた。さてそこへ至りたまうに、六方へ根さす大木ありて、太子斧を以て切りたまうに、その音刀利天へ響く。かくて太子はくたびれて暫くまどろみたまうに、右の観音の御告げにより、六方の根さす方へ柱を立て、堂を建てて安置申す。故に今に六角堂は杉の天井なり。

時にこの六角は六道の衆生を済度の表示。観音は六道を救う。聖観音は地獄、千手観音は餓鬼、馬頭観音は畜生、十一面は修羅、准泥観音は人間、如意輪観音は天上。越中富山の反魂丹売りは、行かぬ所があるかは知らぬが、観音様は行かれぬ所はない。三月時分はそろそろ這わシャロウと思わろうが、それは違う。勿体ない虱をば千手観音とは、誰が云うたか知らぬ。しかし理詰めぢや。虱は兎角、人に付かねば渡世がならぬ。観音様は謗られようが嫌われようが、兎角人に取り付いて、御済度なされるから、喻えたか知らん。

その観音が人に取り付かれると云うは、『湖水鈔』の中に、江洲長尾村の普門山の観音様が住持了山への御告げに、「唯たのめ注連じが原のさしも草我れ世の中にあらんかぎりは」とありた。その観音様も、我が力で御済度かと云うに左様でない。「其の光柔軟にして普く一切を照らす」とて、弥陀の日光柔軟の光明をかりての御済度。丁度丁稚が提灯を、我が物顔に付けて歩いて居れども、紋も名書きも皆旦那の印の如くぢや。「早乙女や子のなく方へ植えて行く」「垂乳根やしめりを撫でて子とかはる」と、誠に親の慈悲のなしわざぢや。御和讃に「観音勢至はもろともに 慈光世界を照曜し 有縁を度してしばらくも 休息あることなかりけり」と、観音様は人氣の悪い、煩惱強盛の場所が好きではなけれども、悪いところほど、なお不憚に思召し、済度の御手を出させらるるは、皆大慈悲のなしわざぢや。

さてここに六角堂の鐘楼堂が見える。桓武天皇の御時、区画整然と京都の町々を、碁盤の様に拵えられたが、六角堂は丁度町の真ん中に当たる故、明日は少し北の方へ、引き寄せようとの評定でありたが、一夜の内に堂は北へ、鐘楼は南へ寄りたとある。余り不思議な鐘楼故、わざわざと書きたまう。

祇園精舎の四鐘

時にこの仏閣道場に、すべて鐘楼のあるは、もと天竺祇園精舎に、四つの鐘がある。一に戒律院の銅の鐘は重さ三十万斤。四天王が作らせられ、大目蓮が神通力でつく。外につく者がない。二に戒場院の鐘は重さ十万斤。かたち盃の如く、転輪王の所造。三に論師院の鐘はかたち鼓の如く、乾闥婆王の所造。四に修多羅院の鐘は、僅か米十石を入れる、過去拘楼孫仏の造りたまうとある。それが各々諸行無常と響く。よって聞く者は皆菩提心をおこすとある。今は人みな邪見にして夕暮れの鐘の音を聞くも、「皆人の暮るるばかりと鐘聞きて身の入相をしる人ぞなき」との歌の如くぢや。『因果経』に「今の身鐘聲を聞きて起きざる者、死して蟒蛇（うわばみ）の中に墮す。其の身長大なれども、諸小虫の為に食はる」とあれば、よくよく注意せねばならぬ。

灯籠橙々の絵解

これなる灯籠は唐金（からかね）。昔は皆金灯籠とみえる。南都大仏前の唐よりの伝来も、金灯籠ぢや。時にすべて仏前へ火を献するは、『御伝文』に「明らかに無漏の恵灯をにかけて」と有りて、法の徳を火にたとえたもの。火はよく闇（あん）を消す。南無阿弥陀仏の火はよく煩惱の闇（やみ）を照らしたまう。闇（くらがり）をわきへおいやり、あとへ火を灯すではない。闇はそのままにして、一念帰命の火を灯せば、直ちに御助け一定と明らかになる。「灯火の一夜のかげに百歳（ももとせ）のあやなきものとなりぬる」ぢや。

これにダイダイが見える。橙。蜜柑。九年母すべて橘の類なれども、その中橙々を橘と云う。聖徳太子の御時代に渡りて植えたまうを橘の京と云う。今禁庭に右近の橘として植えたまうは、日本の帝は御裳川の流れ清く、代々皇太神宮の御血脈、伝わせたまうことを祝したもの。今は真宗妻帯ありて、血脈相承故に、橙々法脈も伝わせたまうことを示す。橘の諸兄公、橘の姓を賜うとき、「橘の花さへ実さへ木葉さへ霜はおけども色ぞ常磐木」と詠んだ。総体の草木がみな冬の霜枯れになる。橙々は霜の節も、おおいをしてよけさえずれば、五年も八年もある目出度い木ぢや。軒の霜さえよければ、何でも御恩嬉しやの。黄なる色は人目にもたのしい。

五種の淨肉の事

さてここにしだれ柳がみえる。これも古歌に「青柳の糸ばかりこそなびきけれ木毎に春の風は吹けども」と、外の門人方は桎や柏の春風になびかぬ如く、元祖の難行すてよ、自力離れよとあるに、したがいたまう御開山は、柳のよく春風になびくが如く、元祖の傍らに捨難帰正の宗意を顕さんとて、命に随うて玉日の宮と、配偶ましますことを表示す。

時に他宗からは我が宗をば、生臭宗旨と笑えども、それは五十歩をもつて、百歩を笑うのぢや。二人酔うて戻るに、後からの人が先へゆく者を、これそなたは、千鳥足ぢやヒヨロヒヨロして居ると笑えども、ソウ云う男が片足溝へ入りて居る。

仏常道十八年の間は、仏弟子といえども、人の供養する肉は、皆召し上がったとある。それが『楞伽經』（成道十八年に当たる）を御説き遊ばされたとき、「大惠菩薩、世尊に問うて言く。外道なお遮して、肉食を許さず。何況や如来は、大悲を含蓄せり。しかも自他を許して肉を食せしむ。一切衆生、もとより展転の因縁を以て、常に六親の爲の故に、應に肉を食らうべからず。不淨の氣分にて生長する処故に、應に肉を食らうべからず。衆生氣を聞きて悉く怖畏を生ず。旃多羅の如し故に肉を食らうべからず。諸の呪術成らざる故に肉を食らうべからず」と、これに依つて仏肉食を制したまえども、または律の中には、五種の淨肉は苦しからずと許してある。一に鳥死。二に鳥残。三に先乾。四に為我不殺（我が為に殺すにあらず）。五に不期食（期せずして食）するは、大事なとある。釈迦の御胸は広い。もし食して菩提の妨げとなるならば喰うてはならぬ。菩提の妨げにならずば、五種の淨肉は喰うても大事な。喰う喰わぬによらず、ただ菩提心が大事ぢや。よつて『菩提心經』には「食しては菩提を妨げず。心よく菩提を妨ぐ」とありて、肴は喰いたいけれども喰うことはならぬ。喰わずに居てはその喰いたい妄念が、菩提を妨げるとある。また女房を持つても、菩提の妨げにならずばもて、よりにて仏在世には『大經』の列衆、善思議菩薩等の十六正士の菩薩は、女房もつて修行なされた。

よりにて元祖も「魚喰うもの往生せんには鵜ぞ往生せん。魚喰わぬもの往生せば猿ぞせんずる。喰うにもよらず喰わぬにもよらず、ただ念仏する者往生せんずる」と、また「妻を持ちて念仏申されずば、妻をすてて念仏申すべし。妻を捨てて念仏申されずば、持て念仏すべし。持つにもよらず持たざるにもよらず、念仏する者ぞ往生せんずるらん」と。

アナタ方の胸は一ツヂャ。また大原談義にも、永弁の問いを元祖の答えに、「酒肉を禁ずと雖も、唯は一旦の禁制なり。妄念止まざる者は、戒行具足と謂わず」と、何ポウ清僧で候とて、肩張りてきばりても、鰻の蒲焼きが鼻へ入り、女が目につけば戒行具足とは云わぬ。姿は賢善精進でも、心がくさりて居る。蒔絵の重箱に鳥の糞を入れた如くぢャ。欠けた重箱でも塩梅のよい、牡丹餅なれば喰われる。姿形は肉食妻帯の欠けた重箱でも、胸の中が他力信心の牡丹餅なれば極楽参りの腹はふくれるぞや。

してみればこちの御開山は、「ふらばふれよし傘の中の雨」で、唐傘があるゆえ雨は降りても大事ない。弥陀の本願があるゆえ、肴喰うても大事なとおつしやるのか。そうではない。末代濁世の弘法は、時方便を觀ずべし。末世は清僧の儘にては、とても衆生済度は出来ぬ。肉食しながら弥陀他力の本願でなくば、助からぬと云うことを見抜いて、御開きなされた。真俗二諦の浄土真宗ぢャ。

勢至の化身の事

さてまた「大師聖人スナハチ勢至ノ化身」等、この六角堂の夢想が、ひとえに真宗繁昌の奇瑞、念仏弘興の表示ぢャ。ナゼナレバ袈裟かけながら肉食妻帯するは、觀音の化身たる太子の御行状にならない、愚禿の身が他力の信心を勧むるは、勢至の化身の法然より相承。二菩薩の引導によりて、開いた浄土真宗ぢャ。

それほどまでに大切な二菩薩なるに、なぜに当流には御供養なされぬ。サレバ觀音は娑婆化身の太子の方で供養、勢至は娑婆化身の、法然聖人の方で御供養申す。ナゼマタ本地をまつりては、何ぞサワリがあるか。サレバすなど云つてもしたがる現世祈り。もしも觀音勢至を、弥陀の脇立ちにしたらば、真ん中の弥陀をさしおいて、脇立ちの觀音勢至に現世ばし祈り、後生の大事を踏みかぶろうかとて、取つてのけて下されたのぢャ。

御本山の阿弥陀堂や、御影堂の御門には敷居がない。あれは儉約かと云えば諸国の御門徒、御本山へ御礼をとげ、そこらあたりの大きなことをうかうか眺めて足元に気が付かぬ。そこで敷居を入れたれば、踏みかぶろうかとて、わざと敷居は入れて下されぬのぢャ。觀音勢至並べたれば現世ばし祈り、未来踏みかぶろうかとて、除けて下されたのぢャ。

しかれども『觀經』では、住立空中の弥陀には、二菩薩が付き添うて在すでないかと云うに、それば韋提も十九の要門。自分の觀機とすれば、三尊が向かわシャレども、弘願の実機とすれば、二菩薩には目が付かず、ただ弥陀一仏を拝み付けられた故、「無量寿仏接足作礼」と説いてある。

方便要門の行者

よつて弥陀も方便要門の行者に向かうときは、第三尊なれども弘願の機に向かわるときは、いつでも一仏一体ぢャ。たとえば鴻池の内儀でも、花見遊山のときは、大勢腰元をつれるけれども、年のゆかぬ、三ツ四ツの若息子が、タッタ一人庭へおいて、井戸の手摺りの上へのぼり、ハマリかけて居るをみたれば、やれ腰元よ弁当よとは云うてはいられぬ。タッタ一人飛んでゆきつかまえるぞや。

弥陀も定散二善の、要門の機に向かうときは、花見遊山にゆくごとく、觀音勢至の腰元つれたまえども、極楽のあとの第十八願の、弘願他力の正定聚のわれわれが、在家止住の井戸の手摺りの上に、タッタ今に地獄の井底へ、落ちかけるを見て、極楽の御座敷に居るにも居られず、タッタ御一人飛んで御座られたが、一尊一仏の御当流の如来さまぢャ。そこで「三惡の火坑臨々として入らんと欲す。若し足を挙げて以て済はずんば、迷業の牢繋何の時に免るを得ん」と仰せられてある。

觀音堂、勢至堂の事

「ワレ二菩薩の引導に順じて」等。世に觀音堂はありても勢至堂がない。觀音はこの娑婆へ出でて仏法の露払い。自分はよしとあとへ勢至が出でて、念仏を弘めたまう。丁度漢と楚と戦うの時、張良陳平（觀音）は表へ出て戦い、蕭柯（勢至）の如きは、内証の兵糧の運送する如くぢャ。そこで戦の時は觀音様は兵隊、まさかの時は表へ出でて働く。勢至は小荷駄奉行と云う、しまり方の奉行ぢャ。表へは出でたまわぬゆえ勢至堂はない。

宿屋にとまる喩

拙僧が一本やりの喩え、讃岐の金比羅へ参るに、大坂の淀屋橋多田屋新右衛門より舟に乗り、さて丸亀へ着く。朝

から男の宿引きが出て待ちて居る。「私は京屋で御座る」、「手前は和屋でお迎えに参りました」、「御泊まりにあずかりとう御座る」と、宿札を渡す。さて七つ時分金比羅へゆくと、旅宿の門口に女の宿引きが「御泊まり」と云えば亭主は門口へ出でて「御泊まりかたじけなし」と。客が店に尻おろし、腰掛け草鞋脱ぎ奥の間へ案内し、勝手は料理人コチコチコチと物切る音がする。亭主は客に挨拶するやら、機嫌取るやらえらいもてなしぢや。コレデ合点せられよ。

太子は御開山より六百年前の朝から、日本の丸亀へ聖徳太子と云う男となり、仏法の宿引き所が末代の七つ時分、大谷本願寺の金比羅の町には、浄土真宗の見世掃除して敬礼大慈の弥陀が、御開山となられて、御ひかえなされ、その真宗の門口の宿引きは六角堂の観音様が、玉日の宮と赤前垂れ。愚痴の凡夫の入りのよいよう、女人往生先達のここに顔。禅宗などは宗旨の店付きはよけれども、宿引きは達磨が目をもいて居る故、愛想がないから如説修行の客が少ない。我が浄土真宗は肉食妻帯。他宗から眺めたら、蓮如上人の御意の通り、穢らわしき宗旨と云うであろうが、宿引きが玉日の宮の女ゆえ、妻や子供に執着深い我々が食い付きよい。煩惱の風呂敷包みこちらへ渡せと受け込んで、後生大事の手を引いて、本願の宿へ案内して下さるゆえ、如何なる者も入りこむぞや。そこで弥陀の化身の御開山の御亭主様が、御泊め申しまじょうの勅命を、かたじけないと受けた所が信順ぢや。その信順の一念が聞き開く一念。そこで疑いの尻おろし、往生治定と腰掛けて、雑行の草鞋を脱ぎすてた所ぢやぞや。それより八万四千の光明の奥の間へ、摂取不捨と御案内ぢやぞや。ところで勢至化身の法然様は、一法句の御勝手の安心の料理人ぢやぞや。『選択集』十六章段を、一枚起請の包丁で、「唐土我が朝の智者達の観念の念にもあらず等」と、御臨終の夕べまで、御安心の御料理方。サアこれでよく合点せよ。

観音の宿引きは、六百年以前の朝からの太子の出迎え男。浄土真宗の門口の宿引きは玉日の宮。宿引きは表へ出る者ゆえ、世界中に観音堂は沢山ある。勢至は御勝手料理方。料理人は表へ出ぬものゆえに、勢至堂はない。時に元祖の料理人、安心の料理この通りつかまつりました。御開山は御亭主ぢや。泊まり人は御座の我々。ドウヂヤ後生の宿とらねばならぬ。日のちりちりの同行が、イカイこと見ゆるぞや。

人間も生まれた所が夜明けぢや。十が五ツ時、二十が四ツ時、三十が真昼ぢや。四十五は暮れ合い。五十すぎた衆は、モウ時世はズンブリ暮れたのぢやぞ。六十は初夜の太鼓がどんだんなるのぢや。ソレニグズグズ何しおるのぢや。宿引きは玉日の宮、御教化に手を引かれ、浄土真宗に泊まるまいかや。我が計らいの尻おろし、後生大事の腰をかけ、雑行の草鞋脱ぎ捨てて、御光明の御座敷へ通るまいかや。それから御聴聞の箸をとり、御安心の料理をたべるのぢや。世間の料理はたべように、小笠原流とか何流とかある。今は何のようもなく、何のわずらいもなく、世間の料理は口で喰う。今は聞其名号と、耳から喰うのぢや。世間の料理は腹が大きゅうなりたが喰うたのぢや。今はかかる者を御助けと、疑いの滅つたのが止まりて、往生一定と腹のふくれたのが喰うたのぢや。世間の料理は一度喰うともまた減る。今は一度たれば臨終まで減らぬ。その箸ぢや五劫永劫の御念の入りの料理ぢや。どこまでも座敷へ通り、御飯喰べたればその宿屋は出られぬ。一度光明の御座敷へ通りたれば、いかに地獄へ落ちんと思ふとも我計らいにては地獄へもおちずして、御光明の内で泊まらずならぬぞや。そこで亭主が「何も御かまい申しませぬ。よろしゅう御上がりなされませい」と挨拶すれば、「これは御馳走で御座ります」と礼云うぞや。今は御かまいがない所ぢやない。摂取不捨と構い通しにして下さるからは、「光明照らしてたへざれば 不断光仏と申すなり」と、夜昼常に御手の離れぬ御あつかい。この度の御礼は申さねばならぬぞや。

さて御同行は、御勧化の御座敷へ通り、御安心の箸取りたかや。コワイ顔つきをなされて居る衆は、浄土真宗の門口にまだ来ぬ野中の道中ぢや。現世祈りにかかりて居るワロハ、欲と愚痴との追いはぎにおうているのぢや。また折角浄土真宗の宿に泊まり、御勧化の御座敷で、御安心の膳部にすえられながら、それには及ばぬとて、昼の喰い残りの雑行の弁当喰うて居るワロモある。また御安心の膳部に、御聴聞の箸取りて、往生治定と飲み込もうとしても、参られようやら参られまいやらと、疑心自力のむかつきが来る同行もある。頂いてみればあら心得やすの安心や。あらゆきやすの浄土や。御料理加減はよい。南無とたのめば必ず阿弥陀仏の御助けと、味の付けてある名号の、御馳走を喰い込んで、往生は治定と満腹するのぢや。

そして世間の宿でも相客が大事。今は相客は「則我善親友」と仰せらるる。大聖釈迦如来様ぢやぞや。その御客と共にては、まだ機がわりまするか云えば、彼尊（あなた）の方から御心易く、「ソチモ極楽参りか、オレモ極楽へ参るよい連れぢや。連れになろう」と、心置きなく仰せられるぞや。「そちは初めてのことなれば、不案内であろう。オレがさきへ立ちて案内しよう」と、三千年の昔に、御涅槃に入らせられても、『大経』や『観経』は道待ち合わせて御座るのぢや。それで極楽の東門口では、今まで待ち侘びた凡夫が正客ぢやで、先へ入ると仰シャルぞや。

鬼仲間に入りし話

唐の亭伯夏のころ、燕市へ行くに昼は暑い故、月夜に行くに五里ばかり山道なれば、道連れの者ほしく思いしに、向こうへ一人ゆくを見たれば、呼び止めたるに、彼の者は留まるよく見れば鬼なり。人間と知らば一口に喰うならんと案じ、早速に「拙者は鬼の子なり、親死し人間に奉公する故、五体が人くさいが、これよりは専ら鬼の所行をなさ」と思う故、先生弟子として、通力を教えたまえ」とて弟子になりたれば、道にて亭伯に鬼が負われる故、「鬼の嫌いは何ぞ」と尋ねたれば、「唾（つばき）なり」と答えた。ついに未明に燕市に至りたれば、鬼は日輪に恥じて羊となり、彼の羊眠りし故、羊をばとうとう一貫文に売り、元の鬼に返らぬようにとて、唾までかけたとある。ナントかかる鬼の連れになるには、おれも鬼ちゃと云い、鬼仲間に入らねばならぬ。人間と知らば鬼は一口に喰うてしまうぞや。御開山も凡夫の鬼を連れにして、極楽へ御参りなされるには、おれも凡夫の鬼ちゃと、鬼仲間へ御入りなされねばならぬ。おれはさとの身ぢやと仰ると、疑いの口をあけて、喰うてしまうぞや。今亭伯はおれも、鬼ちゃと云うたれども、まんざらは人間の生肉は喰わなんだ。今御開山はおれも凡夫の鬼ちゃと、云つたばかりでは得心すまいとて、勿体ない肉食妻帯までなされてくださったぞや。今の鬼は背中に負うたか思いの外軽かりた。今は御当流の大勢の御門徒を、御開山は御一生涯勸化の背中に、鬼で居る機なれども、夜あけて朝日が出やしやると、恥ずかしくて仕方なしに羊になりました。この凡夫の鬼も、いつまでも凡夫の生の鬼では居る機なれども、宿善の夜があけて、撰取光明の日輪に恥じて、しようことなしに今は御同行御同朋の羊になりましたぞや。今の羊もただ羊で居るなれば、それがつるつと寝たゆえに、一貫文に売りつけたぞや。この御同行の羊もただ羊の鬼に返らぬように、唾までかけて置いた如く、この信心の決定の羊が、元の凡夫の鬼にかえらぬように、正定聚不退の唾まで、御かけ下されたぞや。因縁一つ云い出せば、唾までが喰えになりました。サアナント今の亭伯は、鬼の連れになるのには、鬼ちゃとヤツタは発明ぢや。今御開山は凡夫の鬼をつれて、御浄土参りはおれも凡夫の鬼ちゃとは、実に真宗末代の明師ぢや。

第四段 蓮位夢想之段

祖師聖人の本地

前段は聖人三十一歳の時の咄。今は八十八歳の御時の事。その間五十七歳の相違はあれど、御伝鈔御伝絵は、年序にかかわらず、法門安心を取り扱うに、勝手のよいように明かしたまう故に、右から云うべきことを左から云おうが、先に云うことを後から云おうが、つづまるところは信を取らそうためぢや。人を呼んで馳走をするに、腹が大きゅうなれば喰らえぬゆえに、三献目に美味を出す如く、前段に元祖は勢至の化身、太子並びに玉日の宮は観音の化身と知れたれども、今我が祖の本地が知れぬ故、今の段に蓮位夢想を以て、弥陀の化身なることを示された。

すりや御開山はオレハ弥陀の化身ぢやとて、チツトばかり鼻を高うなされて御座るか云うに、仏には仏と思う心なくただ無愛無疑にて、衆生済度の宜しきに随うて、顕れたまうが仏ぢや。そこが「智慧有るが故に生死に住せず、慈悲有るが故に涅槃に住せず」ぢや。もつとも御開山は御さとり仲間の女人をやめて、在家の素人となりて、「悲しいかな愚禿釈鷲、愛欲の広海に沈没して、名利の大山に迷惑して、真証の証に近づくを喜ばず、定聚の数に入るを樂ばず。恥ずべし痛むべし」と仰せられた。「つつめども隠れぬものは夏むしの身よりあまれる光なりけり」と、どこやらに弥陀の化身があらわれる。

九十九新左衛門の内に、奉公しておる三千助。表は草履つかんでも、どこやら飯沼勝五郎元春がしれる。よって胸の中は夜光の玉、いかほど包み隠されても、光りは自然と顕れる。表は愚禿の親鸞、いかほど包み隠されても、教礼大慈の阿弥陀仏。胸の中の他力の玉、光りは自然と顕わるる。そんなことは誰が云うた。色をも香をも知る人ぞしる、忝なくも聖徳太子と云う、物いう人が云うのぢやぞや。どこからも茶々の入れようはない。よって素人貌して御座りても、本地は弥陀ぢや故、興法の因内に萌し、利生の縁外に催す。内証は弥陀仏の血脈。また娑婆の表は、天津児屋根の命の御末孫。神と仏との血脈を伝えさせられた御開山。よって御教化の身も、神道仏道をかみませて御すすめぢや。故に『正信偈』の正の字は正直の正の字。神明は正直の心を御殿とす。六根清浄の外に正直なく、サア信の上から母親が、丸三年の煩いに、尿桶を取り母御の恩を思い、キタナイト思わぬ。私に取らせて下されかたじけないと思うのが、「目に不浄を見て、意に諸の不浄を見ず」ぢや。鼻にくさいと不浄を嗅いでも、心に不浄を嗅がぬのぢや。ヨイ

カ一旦は胸に悪いたくみを思い付いても、信の上からは恥じてせぬのが、意に不浄を思わぬのぢや。また信の上から親に三角な目をむかず、主人の物はかすめず、升目秤目を盗まず、御回向の信徳から、心正直になし下されその正直の心の中へ神明は御やどりぢやぞや。

「朝きりやよべばこちらに渡し守」。旅して知らぬ遠国の宿屋に泊まり、朝早う立ちた所が、すさまじい霧ぢや。河がありたれども一間先も見えぬ。向こうに渡し守が居るであろうと思い「オオイオオイ」と呼ぶに、足元のよし原の中に船頭が寝ていて、「ココジャ」、「オオソコカ」。大神宮や八幡様は、伊勢や山城の向こうに御座ると思うたが、弥陀たのむ一念帰命の足元に御座るぞや。まだ煩惱の霧が晴れぬで見えぬのぢや。

下妻蓮位の来歴

さてこれなるは祖師八十八歳の御姿。この大童子(おおわらわ)の乱れ髪なるは、まさしく御太子十六歳の御姿ぢや。これに寝ていらるるは下間の蓮位。この蓮位の系図は、清和天皇の後胤、多田満仲六代の孫、源三位頼政の総領、伊予守仲国の次男頼家。この頼家の子を頼茂。この頼茂後鳥羽院の折檻を蒙り、大いに禁庭を恨み、仁寿殿に火をかけ、西国へ出奔しけるが、その悪事八十三代土御門の院の御宇、建仁三年亥の年に顕れ、一家の分はみなからめとられ、刑罪におこなわれる。しかるに蓮位は板東常陸の下間の城主、兵庫の守宗重と云われしが、翌年建仁四年京都三条河原にて首刎ねられるを、聖人命乞いして弟子としたまう。この世で首の座になおる者が、未来御蓮台の座になると云うことで、名を蓮位と下された。よつて元は大名、今は御開山のお弟子。そこで昔大名の傲慢心がチヨコチヨコである。よつて夢想の告げをもつて、この傲慢心を退治なされたのぢや。

夢想到三義ある事

この夢想について約(つづ)めて三ツの御謂われがある。一つには祖師聖人の御本地を顕さんがため。二つには蓮位房の傲慢心を治せんがため。三つには蓮位房を手本に末代の衆生も慢心を起こさず、益々恭敬礼拝すべきを示させられた。すなわち建長八年辰二月九日の夜の夢に、かたじけなくもこの世にとりては御主人家たる、用明天皇の儲君聖徳太子が、九尺ばかりも飛び下がりにて、低頭平身とて御ツムリを畳につけ、藤原の正統有範の一子、御家来筋の我が御開山を、その本地をあがめて「敬礼大慈阿弥陀仏 為妙教流通来生者 五濁惡時惡世界中 決定即得無上覺也」と敬いたまう。この文の訓点は口伝鈔に「大慈阿弥陀仏を敬礼したてまつるなり。妙教流通のために来生せるものなり。五濁惡時惡世界中にして、決定して即ち無上覺を得しめたるなり」と云々。敬いたまうもことわりなるかは、娑婆でこそ御家来すじなれど、極楽から眺めると、御本地は敬礼大慈の阿弥陀仏。よつて観音垂迹の太子が、本地をあがめて座つたり立つたり。つむりをすり付け拝したまうを見て、我慢な蓮位房も、大盤石でつむりを打ちひしがれるが如く、ヤレ我が師匠様は正身の阿弥陀如来様に在したか。正身の阿弥陀様なれば、御足のうらをなめてなりとも、敬い奉らずばならぬのに、この蓮位が追っつけ焼いて捨てる、このサレコウベを下げず敬わなんだとは、ヤレヤレ怖れおうやと、そのこころをここに楓の下に、紅葉踏み分け鳴く鹿が書いて知らせてある。後鳥羽院の御歌に「時雨する龍田の山の紅葉鳥(鹿のこと) 紅葉の衣きてや鳴くらん」と、鹿も秋の頃は妻こいに、山々をかけめぐれども、雑木の落ち葉の下では鳴かぬ。かかる照り輝く紅葉の下で鳴く。今聖徳太子は、衆生済度の妻恋いに、諸宗の山々をめぐりたまえども、聖道門の雑行の雑木の下では、咨嗟讚嘆の声を上げたまわぬ。かかる浄土真宗の他力本願の、照り輝く紅葉の下では、六字名号の紅葉踏みわけてぢやない、六字聞きわけ歡喜踊躍の声を上げ、我が祖の徳を妻こいに、敬礼大慈と拝したまうと云うことを示す。何を云うも五濁惡時惡世界。濁惡邪見の惡衆生は、勧めても勧めても信心をとらぬ故、モウ今は浄土へ帰ろうか帰ろうかと思し召しても、ドウゾ一人なりとも信を取らせたいとて、モ一年一年と、今は八十八年までこの娑婆に、御逗留在したは、唯の御逗留ではない。勿体ない百宝の蓮台にあなうらを、結ばせられる御身が、あられもないこの娑婆の、雑木瓦礫の青土の上で、ゴンズワランジ召させられ、千辛万苦の御苦労とは、アラ怖れ多やと、御恩を思い出しては喜ばねばならぬ。

六角夢想の段には観音様が、高座にましまして、弥陀の化身の御開山を下におき、善信善信とよびすてにされ、御納得の有無は知らねども、押し付けに衆生済度の為なれば、われは玉日と顕れて居る。「善信房コナタと夫婦の契り結び、仮りには偕老同穴のよしみをなし、一切の衆生の疑いを晴らし、在家往生の手本をいたさん」と、勿体ない本師の弥陀に、肉食妻帯を勧めしも、是非なく衆生が可愛さあまりのこととは云うものの、六角堂の観音様が無理に御勧め申したばかりに、尊き弥陀を生臭坊主とまで下がりたまいたとは、思えば冥加なひと。昔の無礼を御挨拶な

されたのぢや。

弁慶、安達の関を通る

九郎判官義経が、頼朝と不和の時、奥州秀衡をたのみて落ちゆくに、東大寺大仏殿の勧進とて、山伏修行の姿にやつし、一統が打ち揃うて下られたが、加賀の富樫の一族の守る、安達の関を通る時、ツラガマエが当時鎌倉殿より草を分けて、御吟味ある義経によく似た、「イブカシイ待て」と声かけ引き捕らえければ、さすが才知の弁慶。即座に大音あげて勧進帳を読み上げたれば、富樫は勧進帳に用はない。義経に似た者を吟味せよとあれば、弁慶は彼の義経を引き倒し、大地へ投げつけ草鞋にて頭（こうべ）を踏み付け、「オノレがツラガマエが当時御尋ねの義経とやらに似て居るとて、所々の関所にて咎められ、邪魔をする憎いやつ。モウ連れぬ後へ戻れ」としてたたか打擲した。関守も誠の主人の義経公なれば、かくまでは振る舞わじと、不審晴れて通した。次の宿へ着き義経を上座へ直し、弁慶は九尺ばかり飛び下がり、「今日は計らず不慮の下郎が振る舞い。まっぴら御高免を乞い願ひ奉る。さりながら此くなければ、通られぬその場のしぎ。三代層恩の御主様へ、踏みつけねばならぬ味方の薄運、無礼の程は幾重にも御用捨」と。今も忝なくも本師の弥陀を、善信善信と呼び捨てにして、「行者の宿報たとひ女犯すとも、われ玉女の身となりて犯せられん。一生のあひだよく莊嚴して、終りに臨みて引導して極楽に生せん」と、「われは玉日となりておる。肉食妻帯して下されとはアラ勿体なや。フミ付けた仕方なれども怖れ多いとは知りつつも、かく振る舞わずば、末世の衆生が疑いの関が通られぬ。余儀ないしぎより不慮の計らい。まっぴら御免下され」と御詫びの体ぢや。

第五段 選択付属之段

これが元祖七十三歳、我が祖は三十三歳。頃は八十三代土御門院、元久三年四月十四日のこと。「かねて殿下の望みにて、『選択集』をしたためおく、我が眼鏡にかなうは、そなた一人法然が皆写してやる筈なれども、老眼ゆえそ義はかなわぬ」とて漸く「選択本願念仏集、南無阿弥陀仏、往生之業念仏為本、釈綽空」との文字を御書き下され、「残りはそのあなたが写されよ」と仰せられて、御渡しあらせられたれば、我が祖は退いて一字三礼して書写したまう。

この二人の僧は内にあるは正証房。外にあるは念仏房。

ときにここに一ツの不審がある。法然様御自分御制作の、『選択集』なれば、釈源空と置かせられるべき筈なるに、釈綽空と置きたまうは如何んと云うに、「さればこの『選択集』は、おれが師匠役に書いたものなれども、元を云わば、そなたは我が本師弥陀の再来。さすれば真宗の肝要、念仏の奥義を認むる『選択集』は、そなたの御書きなさるべき筈ぢやぞや」と、功を元へ譲りて釋綽空と御示しあらせられた。例えばお客が有りて内証は、料理人が気を張った包丁目でも、結構な料理で御座りますとの挨拶は、亭主に向かって云えばやはり亭主が料理して、御馳走したに当たる如くぢや。

さてこの物を伝授することはなほ大切なことで、「苟（いやしく）も其の人にあらざれば金を積むこと山の如しと雖も、此の道以て告ぐる無し」（『抱朴子』）と実にそうぢや。黄石公六略三略の巻を張良に伝えたも、芭蕉が其角や連二に、文台を伝えたも、見所がなくては伝えぬ。今見所とする所は何かと云えば、本師の弥陀が、綽空上人と顕れて御さる故に、失礼ながら師匠役に書きたれども、この『選択集』は実はそなたが、御書きなさる筈とて、功を我が祖へ譲りて釈綽空と御示しあらせられた。

柳の絵解

さてここに柳がみえる。「花落ちておのれ時めく青柳の枝よりみゆる千代の春風」。どの花も一度は、春風に逢うて開けども、まず早春よりはや春風に逢うて、芽を吹き出すが柳の徳。性空、隆寛も御付属にあえども、かかる外題内題まで、御自筆にての御付属は、よく御教化の風になびかせられた、柔和な我が祖の柳の徳にて在すと云う御知らせぢや。時に『選択集』ばかりの御付属でない。その上七十三歳の御寿像まで、「勝手に書き写され、出来あがりたれば持参いたされよ。法然が讃をしてまいらせん」と、一方ならぬ御執り成しでありた。

時にこの張り付けに雉の鳴く所を書いてある。「春の野にあさる雉の妻恋にあのがありが人を人にしられつ」と、雉も鳴かねば、人にありかを知られて捕らわれまいに、なまじいに鳴いた故にありかを知られ、ついに獵師の手に入れた。祖師も『選択集』の御付属があるまいなれば、他の御弟子の偏執も受けさせられまいに、御付属あらせられたまう故、自らの外の偏執を受けさせたまうと云うことを示す。しれば御開山は外に嫉まれ、偏執も受けたまうような御方かと云えば、実に行状正しい御方。これ偏に末代の我々を不憫に思ひ召す故ぢや。

ここがその年間七月二十九日。すでに『選択集』も書写あらせられて、御返済なされ、その上かねて叡山の御修学のときから、御傍さらずの侍従之介、入道証詮絵をよく致さるるにより、これに仰せ付けられて、御寿像も調えさせられ、御持参なされたれば、即ち聖人は机の上になおし「若我成仏十方衆生 乃至 衆生称念必得往生」と、十八願の銘文を御書きなざる体。机に向かわれるは法然聖人。机の前なるは御開山。縁側に居られるは正詮房。この稚児なるは後に勢観房となられる御方ぢや。この御方は三位道盛卿の御子ぢやとある（くわしくは第七段の下に弁ず）。

青葉の楓の喩

ここに青葉の楓がある。これは上に『選択集』付属の上に、また御寿像の讃まであそばしたところを顕す。これも古歌に「蔭ひたす水さへ色のみどりなるに庭の楓（もみじ）の同じ若葉に」と。絵には水は見えねども、ところが吉水なれば下に池水がなくばならぬ。下地池の水の緑なる上にまたまた若葉の楓のみどりが映り、ますます翠りが増すと云う歌のころ。御付属の翠りの上に、また御寿像まで写させられ、ますます他力の色をそえたまう。『選択集』は元祖の御腹を御開山へ、御譲りなされ、また御寿像はおれが替わりに、教化してくれいとの思ひ召しで、御姿を御付属なされ、この法然は最早七十三なれば、今に往生するに依つて、おれが腹も姿も皆こなたにゆずる。末永く我が名代に跡に残りて、弘法をたのむとのころぢや。世間には田も譲る畑も譲ると云えども、そんな所ではない。御心も御姿もみな御開山へ御入れ故に、我が祖の御教化が、直ちに元祖の御教化。祖師の御安心が、直ちに元祖の御安心。よって浄土真宗の名は、西鎮には伝わらず、我が龍谷へ伝わるは、内鑑冷然そうなければならぬこと。

大納言実方、奥州にて阿古屋の松を尋ねるになければ、「陸奥（みちのく）の阿古屋の松に木（こ）がくれて出でにし月の出でもやらぬか」と古歌にあるが、それは如何にと老人に問うたれば、それは三十三ヶ国ときの歌。六十六ヶ国になりしより、松は出羽の名所となりたと云うた。当時將軍の菩提所として威勢をふるいても、浄土真宗の名目の阿古屋の松の名所は、西鎮の奥州にはない。我が大谷の出羽の名所となる。

判官切腹の喩

かの塩谷判官の切腹。九寸五分を前におき、「力弥力弥、由良の介はマダか」と問えば、「まだ参上仕りませぬ」と云う。暫くためらいて「力弥力弥」と呼べば、「由良の助はまだ参上仕りませぬ」と云う。アアエーあわいで残念と、やがて短刀逆手にもち引き回わさんとする処へ、花道からバタバタとにじりよる。「由良の介か遅かりし。定めて子細聞いたであろう」。「この場に望み御最期のほどを、希わしう存じ奉ります」と、短刀スラリと抜いて引き回し、「由良の介この九寸五分は、そちへの形見に譲る」と云う一言に、それとは云わねど我が鬱憤を晴らせよと、云うにまさりし主人の一言。忠臣無二の由良の介「ハハア」と押し頂き、キッサキ守り血をなめ、無念の涙ハラハラハラ。次の間の一家中固唾を呑んで、つめ合うたれども、恨みの九寸五分下されたは、由良の介タッタ一人。

吉水の一家中三百八十余人の、御門人はあつたれども、『選択集』の九寸五分、そなたへ形見とまのあたり、下されたは我が祖師御一人。あの由良の助は、表は酒宴遊興に、懦弱にみせかけても心の内は大盤石。竹に積もりし雪をみても、敵を欺く力弥の異見。御開山は表は肉食妻帯の、愚かな禿とみせ掛けても、葦原の鷺を御覧なされても、念仏弘通の助縁となされ、己れやれこの度は疑いの首捕りて極楽へ連れ帰らんと、心の内は金剛堅固。ついに四十七人は師直の館へ忍び入り、敵の首取りた処が忠臣蔵の果太鼓。かかるものをも御助けと、聞其名号の一念に、疑いの首の落ちた所が、迷いの生死のはて太鼓ぢや。

さて四十七義士は、ついに芝の泉岳寺にて、主人の御供と腹切りて、末世までも名を残された。その時由良の介の辞世に「今はただこころもはるる身もはるる浮世の外にかかる雲なし」と詠んだ。今が丁度そうぢや。「今ははやこころもはるる身もはるる」とは、たのむ一念のとき往生一定なり。「浮世の外にかかる雲なし」とは、この上の称名は、御恩報謝と存じ喜び申し候なり。また力弥の辞世に「極楽へこころしずかに帰るべし阿弥陀とともに四十八人」と。

喜びも色々あれども、世に敵もつた身が、敵を討ちたほどの喜びはない。今は無明の疑いの敵を、たのむ一念のそのときに討ち滅ぼして、心も身も晴れて、往生一定と安堵が出来たれば、その上の称名は御恩報謝とヨロコビヨロコビで極楽へ、心しずかに往生させていただくは、皆御開山聖人の御鴻恩にたましますなり。

選択本願念仏集

『選択本願念仏集』、まず題は一部の総票。この題号に三重のえらびあり。唯の念仏ではない。本願の念仏。唯の本願ではない。選択の本願念仏。選は十九の雑行に選ぶ。択は二十の自力に択ぶ。よってこの念仏は単行無信の念仏ではない。雑行を捨て自力を捨て、御助けを聞き開く信の当体が念仏ぢや。よって蓮如上人は「当流には弥陀をたのむが念仏なり」と仰せらるる。兎角は同行は、口に南無阿弥陀仏と称えたが念仏。弥陀をたのむは信の一念で、念仏ではないと思うて居るが、梅と云えば土から外へ出た真木が梅なれば、土から内へ入りてある根も梅ぢや。口に願れた御恩の称名も、南無阿弥陀仏の梅なれば、口から内の信心の根も、南無阿弥陀仏の梅ぢやぞや。それはまたなぜにと云うに、雑行すてたのむ一念は南無の二字。このものを御助けに間違いないと、疑わぬは阿弥陀仏。それ見やっしやれ。御助けを疑わぬ信の当体が、南無阿弥陀仏ぢやぞや。そこで選択本願念仏と仰せられた。選択本願念仏と云うは、他の念仏のことでは無いとて、内題に「南無阿弥陀仏」と標し、その下に「往生之業念仏為本」と細釈せられた。この念仏と有るは、唯称えることぢやと云う宗派もあれども、これはただ称えてゆくではない。この六字を聞き分けて信をとれと、信の当体の念仏をさして、念仏為本と仰せられたと、御覧なされるが御開山ぢや。

信心を以て能入とす

それは何れに証拠あるやと云うに、されば『選択集』十六章の中、始めが捨聖帰浄門。第二章が浄土門中で捨雑帰正門。即ちその正行とは南無阿弥陀仏なり。まじりものないことぢや。次が本願章。その次が三輩章。三輩章には三輩の「一向専念無量寿仏」と余行とを対望し、廃助傍の三義を立てて「但此等三義殿最も知り難し。請ふ諸学者取捨心に在り、今若し善導に依れば初めを以て正と為すのみ」と、どのように量肩しうても、雑行ばかりは喰えぬ。捨ててしまえと云い切つて、それから三心章には「念仏の行者必ず三心を具するの文」とのたまひ、称えては行かれぬ信心を得て称えてくれと仰せられ、重ねて信心なしに行かれぬ「涅槃の城には信を以て能入と為す」と、ドツチみち信心でなければゆかれぬとの法然様の御心持ちぢや。そこを見ぬいて御開山、この念仏為本は、念仏の謂われを聞いて信を取れと云うこと、他力往生の正因ぢや。そこを御文章には「信心をもて本とせられ候」と仰せられた。

芭蕉が初めて江戸へ行った時、俳人仲間では、まだ芭蕉と云うことを知らず。ある時俳席へ出たれば、宗匠が諸国の来客に、まず席へ御通り下されと挨拶すれば、芭蕉異議なく席に進みしに、至りて男振りの悪い人故諸人が大いに笑うた。そのとき宗匠が戯れに「さし出でて馬鹿げに咲いた桜哉」と詠んだ。芭蕉がこれは清濁を直したら、句になりましようと言え、如何に改むべきやと尋ねた。されば「さし出でて葉影に咲いた桜哉」。当年は毎年より花の出方が多い故、出過ぎて葉の蔭まで花が見ゆると云うことに直された。一同驚いて「さてはあなたは、芭蕉先生では御座らぬか」と尋ねるに、「いかにもそれがしは芭蕉なり」と云われたれば、皆々にわかに敬うたとある。

今も元祖他の聖道門に対して、「念仏為本」と行々相望してのたまえば、信の当体の念仏ぢや。仏法の大海には、信心を以て能入となすとて、まず念仏のいわれを聞き開き、信心を取つてから申すものなれば、この念仏は聞き開く、信の当体の念仏でありて、信が本ぢやと御覧なされて、「信心為本」と御直しなされたは「敬礼大慈阿弥陀仏」と敬われたまう、御開山の芭蕉でなければならぬ。かかる御高德御発明の御開山故に、『選択集』を付属あらせられた。

葵の花の絵解

この所に葵の花が書いてある。葵は足衛（あしもる）の花と云う。またこの葵は『淮南子』に「聖人の徳に於ける猶し葵の日に与するがごとし」とありて、我が日本でも長徳八年八月、文章博士大江匡衡（まさひら）の詩に「仁猶草木に覃（およ）ぶ、日の下（もと）葵の傾くを識る」とある。また清少納言の『枕草子』の中にも「葵は取り分けて見ねども蔭にしたがふて傾く。なんぞ敢て草木のこころとおぼえず云々」と記され、また師光（もろみつ）卿の歌に「そのやみの御影の山の語葉草永き世かけてわれやたのまん」（『夫木集』）と。五月五日加茂の祭りに、堂上人の葵を冠にさしたまうは、葵の花は日の出より日の入りまで、日に従うて後にしむ。堂上人の御身の上、天子御一人に仕えて他へ心をふらぬ、忠節のまことを示されてのことである。今元祖大師の御教化の日に組して、外へ心を移

したまわぬ、御開山の御心の実（まこと）を、葵の徳に喩えたまう。葵は日光に随うて開くが、今御開山は元祖の御教化に能く随うて、信心の花あざやかに開きたまう。その訳は『歎異抄』に「親鸞においては念仏して弥陀に助けられまいらずべしと、よき人の仰を蒙りて、信ずる外に別の子細なきなり」と仰せられ、全く元祖法然様を、仰がせらるることを御述べなされた。

沛公と項羽の事

沛公、項羽の旗下について、国政を行わるる時、攀増（はんぞう）と云うものありて、かの沛公は龍眼紫色（ししよく）の相ありて、後王位に登るべきことを知りたれば、項羽に教えて沛公を召して、「汝は蜀へ使いくさせざるか」と問い、事よせて殺すべしと謀りたれば、翌日沛公を呼び出し、項羽自ら教えの如く問えば、沛公その時の答に、「この身は君に随うものなれば、君使いせよとのたまえば蜀に赴くべし。行くなとあればゆきまずまい。何れとも君の思し召し次第に随わん」とのたまえば、項羽はかりごとがはずれ、是非なく殺すこと出来ず、ハアそうかいなと頭かかれた。今念仏は仏になる因やら、地獄に落すべき業やら知らねども、元祖の御教化次第となられた。

葛、百合、撫子の絵解

さてこの所の籬（まがき）に、若葉の葛がある。これも古歌に「垣根なる若葉の葛も秋来ればおのかまにまに紅葉しぬらん」とありて、彼の三百八十余人の偏執の間垣に、かかる若葉の葛見たような、外の御弟子方も、他力の御恵みからは、宿善到来の秋になると、それぞれに皆信心歓喜の、紅葉したまうぞよと示したまう。

さてここにある姫百合は元祖。籬の内にある撫子の花は我が祖。元祖の姫百合は我が祖を撫子の如く寵愛あそばせども、何を云うにも三百八十余人の、多くの弟子の偏執の籬に隔てられ、今まで付属はなかりしが、しかれども今は堪忍の紐きせされ、この如く御呼びなされて、御付属は在すぞとのころぢや。これも古歌に「たぐひなき籬に忍ぶ姫百合のそひふしたる床夏の花」とある。この撫子を床夏とはなぜ云うかなれば、『大鐘書』に染殿の後、若くおわせしとき、御姿すぐれて麗しくおわしければ、撫子の女御と申した。それに憚りて撫子を床夏と云うたとある。すべて夏から秋へ向けて咲くゆえ、床夏の花と云う。今元祖は姫百合の如く、姫はすべて子を愛するもの。我が祖は撫子の如く、云う計りなき御寵愛の余り、御付属にあずかりたまうことを示す。そこでこの所をば『御伝文』に「黒谷の先徳（源空）在世のむかし矜哀の余り、あるときは恩許を蒙りて製作を見写し、或時は真筆を降して名字を書き賜う」と仰せられた。我が祖はただ撫子のごとく、御寵愛のみにて、さのみ御徳もすぐれさせられぬかと云うに、なかなか我が祖の徳は御弟子ながらも、竹に虎のすむ如くぢやとある。

竹に虎の絵解

この杉戸に描けるは竹に虎ぢや。日本などには虎は居らぬが、唐土では千里の藪に虎がすむ。今元祖は御学問の広いことは千里の藪、御開山は虎の如く、竹のころは虎が知る、虎のころは竹が知る。法然様のころは御開山が知る、我が祖のころは元祖が知る。両聖人智行兼備の、御徳のすぐれたことを御示しあらせられた。

なぜに元祖を竹に喩えたもうたかと云えば、竹は一尺隔身に節がある。四季ともに色かわらず、外なおく内すき通り君子の操を守る。今元祖は雑行をすてて正行に帰し、正行の中には雑修をはなれて専修に入り、専修の中で自力をすてて他力になれば、御教化が一尺一尺に他力の節を顕し、御一生涯相続の色が変わらぬ。外は清僧の御身にして、内は御助け一定と通らせられ、まことに聖人君子の操を備えたまうから、まさしく元祖は千里にはえ繁りたる竹の如く、その千里の藪によく住みならわせられる御開山は、さながら虎の勢いあるが如く、また虎は死して皮を残し、人は名を残す。八家九宗にはそれぞれ開山あれども、御開山とし敬われるは、我が祖御開山のことになる。宗旨も多けれども、御宗旨と云えば、このほうの浄土真宗のことになる。実に虎は皮をもてのこし、我が祖は真宗をもて残したまう表示である。

さてこの奥に水にかきつばたが咲いてある。かきつばたはカオヨ草と云い、また並蒂花（へいたいか）とも云う。蒂（へた）は一つで花は並んで咲く。仲睦まじき花ぢや。古歌に「むつまじく並びて咲けるかをよ草花をばなどか余処に見るかは」とある。今元祖と御開山との、御仲睦まじきことに喩えたもうたのである。また必ずの字の形に咲き出でて、替わらぬがカオヨ草ぢや。これは御寿像の讚に「彼仏今現在成仏 当知本誓重願不虛 衆生称念必得往生」とある。

必の字のこころを顯したものの。かきつばたでさえ約束を違えず、必ずと云う字の形に咲く。況んや弥陀の本願に、嘘はないとの御示しぢや。またかきつばたはせんぐりに、花に花をば咲きかえて、久しく盛りの見らるるものぢや。この時は代々相承の徳を喻えたものである。

この手水鉢（ちようずばち）も古歌に「手に結ぶ軒端に近き清水にも蓋とりて見よ有明の月」とありて、水は湛えて有りても蓋がありては、御助けの月は宿らぬぞよ。後生大事の清水にも、疑いの蓋があれば、御助けの月は宿らぬぞよ。疑蓋無雜を信とす。兎角疑いの蓋をとれよと、仰せらるる表示ぢや。よつて蓋のしてない、手水鉢を御描きなされた。サア疑いの蓋は取れたかや。

妻戸の燕絵解

さてこの妻戸に燕（雀）の書いたもある）の絵を描いてある。これは深き思し召しありてのことぢや。叡山の真証僧正、三百人余りの御門人を連れ立ちて、月輪殿下の館までつめさせられ、サア法然と一問答に及ばんとあるとき、我が祖を御名代につかわされた。世間でならば御舅殿下の所なれば、実に御一生のはれで、一大事の場合なるに、一言の返答もなく帰られた。そのときに法然様喜ばせられ、外の者なればなまじいに押し問答して、浄土の法門も定めて乱れたであろう。勿論宿善なくば、聞かれぬ浄土の大法をば、押し問答の末には我まけまじと憍慢の心を出す。憍慢の山の頂きには、他力の信水停まり難く、名聞の風の前には、菩提の行花散り易し。さすがに善信房なればこそ、一言の返答もなくして戻られたと、御喜びなされてその翌日興りの御書を御書き下された。その文は長けれど拝読致しますよう。

興りの御書全文

「昨日殿にて座主の御坊へ参会。法門仰せかけて誹謗し給ふ由承り候。不苦候（くるしからず）。餓鬼は水を火と見候。自力根性の他力を知らせ給はぬがあらはれに候。唯源空がいたむ処は、門徒と称する人々の中に不思議を源空が教え候と云へるが浅間しく候。常に申す様に、浄土宗の意（こころ）は、機は十方衆生、心は助けたまへと思ふばかり。行は一念も十念も決定往生なり。彼の仏願に順ずるが故にと相承する外に、全く別の法行も示（しめし）もなし。されば父母の愛執の中より生れたる、生れ付きの三毒五欲の機、乃至臨終に火車の現する時、始めて一念唱て無量劫の間の重罪をも、今生の十悪をも五逆をも一念の間に、能く滅して火車のながへをかへし、華台の来迎あり。機は三宝滅尽の時の族（やから）までも、只一念南無阿弥陀仏と申せば、極楽世界の七宝の台（うてな）に生れて、正定聚不退の位になりて、二度（ふたたび）輪廻の郷にかへらず。剩（あまつさ）へ生生世々の六親等の、惡道に墮して苦みふかきを済度するにて候。是れは何故ぞと申せば、他力の故にて候也。忝（かたじけな）くも書くに付ても、筆の立処もしらざる程、涙だにむせび候。予が門人にも聖光房、勢観房、禪勝房、善心房は、いつもあやまりせぬ人々にて候。向後（きようご）も座主杯（など）のいらせ給ふ処はにげてかへらせ給ふそうべく候穴賢穴賢。」

源空御判

善心房

今源空が申す法門は、仏の説き給ふ經の文に、説我得仏十方衆生等といふ仏の願。善導和尚の、若我成仏乃至、彼仏今現在等の、釈義のこころなれば、よも誰人なりとも誹謗はしたまはじ。此義さなしといはんは、外道天魔の類なるべし。更に所難の趣とりあぐべからず。又一念業成之事、平生臨終三宝滅尽之時の機にありと、決定せらるべく候。法華堂の座主の智行そろはせ給ふさへ、終に情を折り専修に成り給ふに、今の座主の御坊などの給ふは雀のさへずるに異なるべからず。予は一切經を二十六年をへて、五返まで見尽して、六宗の達者にあひて申極め今浄土宗を建立し候。更に私に始めて申し立るに非ず。異人には遠ざかるべきにて候。貴房形身と候間念仏証拠の為、予が影進之候。」

右の真筆は黒谷金戒光明寺にあると云うことぢや。毎年六月二十五日壁上に掛け、諸人に拝ましむると云う。

そこでこの杉戸に燕（雀の書きたのもある）を書いたは、古語に「燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らん」とありて、かの真証僧正をすずめ聖道の人師、我が念仏の法門を誹謗せらるること、あだかも燕のキツキツ、雀のチュウチュウさえずるに異なるべからず。「非常の言は常人の耳に入らず」との諺の如く、弥陀の他力本願の大道は、聖道門の見識を以て、知れることではないと表示す。それに他の弟子内をつかわせば、なまじいに問答せさせられ、かえつて念仏の大法門を誹謗させるであらうに、流石は善信房なればこそ、逃げ帰られたと、深く御讃嘆なされて、「向後も座主などのいらせたまふ処は、逃げて帰らせたまふべく候穴賢穴賢」と御したためあらせられた。

堪忍するは足弱のため

我が娘や近所隣の娘をあずかり、伊勢参りの道中に、向こうより酒酔いが喧嘩をしかけ、「こりやこの田舎男めなんぢや、大勢権妻共を連れくさつて、この天下の大道を我が物顔にあるきやがる。この大道はおのれ一人のものかやい」と、足弱に付け込んで悪口（あくこう）雑言すれば、「どうぞ御堪忍なされて、御通し下されませい」と云えば、「何ぢや了簡せいと云えば、人の首切つても事がすむかやい」と、胸くらとりて叩きつけた。拝む拝む「どうぞ御堪忍下され」と、謝り詫びて負けて相手にならぬ故に、つい通りてゆける。かの娘共は「何であのように謝るのぢや」と云えば、「これこれ私も若いときには、兵法の嗜みもある。三人や五人は投げ付ける位は、腕に覚えもあれども、なまじいに相手になれば、御前方に怪我ささねばならぬ故、わざと負けて通りました」。

「なんぢや仏法の大道を、罪有りながら助けるわの、弥陀の行が我が行に成るわの、あまつさえ女人が真実報土へ往生するわのと、この仏法の大道を我が儘に取り扱う。法然が邪法に血迷うたその門人なるか。サア明らかに返答せい」と我慢の棒で、御開山を叩きひしがんとせられたを、あなたは拝む拝む拝む。「私は愚禿の親鸞。何も知らぬ身の上で御座る」と、謝つてばかり御座られたぞや。「浄教西方の先達、真宗末代の明師」と、敬われたまう御開山。一一返答して取つて押さえることは御存じなれども、我々に疑いの疵付けまいとて、わざと負けて御座つたぞや。「その上善信房そなたは他力をつのり、なんぢや身には、三衣を着しながら肉食妻帯。それは何事ぢや」と、云いかけられたもうたれども、なまじいに御返答はあらせられなんだ。もしも貴方が肉食妻帯を止めて、清僧の姿で居て、煩惱即菩提、生死即涅槃と、御角立てて御出でなされては、在家のものは往生はなるまい。是非是非往生を疑わせてはすまぬ。それでは極楽参りの道連れにはならぬ。どうぞ堪忍して下されと、亭主が謝りたは、足弱の女房や娘ゆえぢや。愚禿愚禿と貴方に謝らせたは私ゆえぢやと、懺（あやま）りはてては、御恩の称名御相続が何より肝要。

第六段 信行両座之段

さてこれは元久二年八月二十日。信行両座御願いの体なり。真ん中なるは法然聖人。左なるは御開山聖人なり。時に御開山仰せらるる様は、「難行道を闊きて、易行道にうつり、聖道門を遁れて、浄土門へ入りしより以来、芳命を蒙むるにあらずよりんば、豈出離解脱の良因を蓄えんや。然るに同室の好を結んで、共に一師の誨をあおぐ輩、これ多しといえども、真実に報土往生の信心を成じたらんこと、自他同じく知りがたし」等と仰せられた。その時法然聖人、「この条もつともしかるべし」と、直ちに御受合いをなされ、すなわち「明日人々来臨のとき仰せられ出すべし」と、善は急げと云うの御返事でありた。右なる三人は聖信房、勢観房、念仏房なり。

これなるはその翌日集会の体。右側は行の座三百八十余人の御弟子。左は信の座。左の上座なるは法然聖人。御取筆なさるるが御開山。その次が聖覚法印。その次が白河の信空上人。上がり口なるは熊谷入道法力房。このタッタ五人。その間に畳一帖通りかけて、一師両断の御捌き。

唐の王勃のさげ

丁度唐の景帝と呂后と仲悪しく、確嫉の間となりたとき、王勃（ぼつ）と云う臣下が、「景帝の御味方なれば右の肩ぬげ、呂後の御味方なれば、左の肩をぬげ」と云うたれば、皆が聞いて左辺の肩をぬがず、皆が右の肩をぬぎ、太

子の味方になった。そのとき王勃「さては、我も御太子の味方とならん」と、右の肩をぬがれたとある。

大勢寄りたるときは、一人吟味はならぬ故に、今も一晷通りあけて、右は行、左は信と分けたまう。さてこの信行両座の、自力他力の調べは、元祖が発起なされそうなものぢや。それに御門人の御開山様の、御発起は如何なる訳。それば上の段に選択付属は、元祖の御腹を我が祖へ御付属なされ、七十三歳の御寿像は、すでに我が身代わりに教化してたまわれと、御姿まで御付属なされ、身も心も御開山へ御譲り故、信行両座の捌きも、御開山の発起したまうも、すでに念仏法門の身の上は、我が御開山へ御譲りなされたところ故ぢや。

時に聖信房、勢観房、念仏房の三人は、すでに信行両座の御相談の時、その場に居て、親しく聞きながら、翌日行の座に着き、またその後信不退でなくては、往生ならぬと心得ながら、我が信心と大師聖人の信心と、違うと諍論せられるとは、思えば思えばしづといつれないことを。この松ばかりは時雨にも、色変わらぬ如くぢやとて、松に時雨が書いてある。即ち古歌に「かずならぬ美濃の小山の夕時雨つれなく降らん甲斐もあらしな」とありて、松は幾度時雨に逢うても色が変わらぬ。毎度元祖の御教化の時雨に会えども、つれなく他力の色がつかぬ。この三人は松の如くつれない御方なることを示す。

ときにこの信不退、行不退を御別けなされたは、御付属の『選択本願念仏集』は、他力の念仏なれども、受ける機に自力と他力とある故に、廃助傍の三義を立てて「最も知り難し」と、元祖も從容に御勧めなされて、機嫌をみて御座りた。ところで御己証といえは「若し善導に依れば初めを以て正と為す」と、雑行自力をすてて、一心になれと仰せらるるが、元祖の腸（はらわた）ぢや。しかるに行不退の人は、念仏ばかりでは行けぬ。おれが勤めた善根功德を持ちそえる。雑行念仏こそ往生の正因と思うて居る。称える功を持ち添えるが自力。それではこの世で不退には至らぬ。臨終まで退転なく至誠心に励み称え、正念にして来迎を待ち、彼の土へ至りて、不退に至らんと云うが行不退。信不退は聞其名号の一念に、滅罪光摂の利益にあずかり、仏の方より往生は治定せしめ、即得往生住不退転の身の上と成れば、たとい忘れて口に称えずとも、「憶念の心は常にして 仏恩報ずる思ひあり」にて、常不退、常住不斷の念仏の行者なり。「勿論此に在りて信願持名すれば、娑婆界内の人に非ず」と、もう光明摂取の身の上なれば、まことに位行念の三不退はつい知れたことぢや。なぜ他の御弟子衆は、信不退へ付かせられぬか。おのがつとめた行で往生しようとは、さればそこを御開山は「これ恐らくは自力の迷心にかかはりて、金剛の真信に昏きがいたすところか」と、御嘆き遊ばされ、蓮師は「聖道門にてありし人々の、聖人へ参りて浄土の法門を聴聞したまふに、その理（ことわ）りうつくしく耳にとどまらざるによりて、その不同これあり等」と仰せられた。

三つ子の癖が八十迄

兎角に三つ子の癖が、八十になりてもなおらぬもの。ある禪僧女郎買いにゆくに、坊主と見せまいと思つて、紋付き羽織で出掛けた。「貴殿は御身分は、何で御座りますか」と尋ねたれば、「医者ぢや」と云うたが、さて茶をとるに、袖をしやくる癖があった。これは平生袖長の衣をシヤクル故ぢや。女郎が「貴殿は本道さんか、外科さんか」と尋ねたれば、僧の答えに「今普請中」だと云う。本道の普請が入りますか。七間四面にするのぢや。「拙者は医者であるから」と云うから、女郎が「外科か本道か」と尋ねるに、いつの間やら坊主の癖で、本堂は七間四面で化けが顯れた。

また加賀の宰相殿一旦は、古国府の勝興寺へ御入寺なされ、その後還俗せられて、加賀守になりました故、朝飯を齋（とき）と云い、夕飯を非時をもつてこいとのもうた。勝興寺の時の近習、殿へ朝飯を供えるに、「齋さし上げましょう」と云い、夕飯の時には、「非時さし上げましょう」と云う。殿も聞きなれて、別に御叱りもなかったが、脇より彼の近習に以後云わぬようにと異見し、また齋の非時のと云うことは、「武門では忌みまする」と、殿へも申し上げたれば、如何様とてその後彼の近習を御召しになり、「今後齋の非時の云えば、おれが寺内に置かぬ」と云われたとある。

今も聖道門のときの癖が出て、兎角におれが腕先きで勤めて参るのぢやと云うが行不退ぢや。しかるに元祖の会下にて調べらるるときは、相撲の地取り恥かいてもよいが、臨終の一念が四本柱の内の本勝負ぢや。その時おのが修したる勤めぶりや、称えぶりに目がかかるなれば、化土の土俵ぎわで倒れたので、真実報土の関へは抜けられぬ。

行不退の事

さてこの行不退と云うは、念仏も起行が大事。昼夜に日課を定めて称え、その上に二つどりなら、外に功德善根を

も持ちそえ、至誠心に努めば、臨終来迎にあずかり往生する。兎角こちらに不退転の、修行の手元さえ固まれば、彼の土に於て遂に不退転の菩薩となり、「常時起行果極菩提」、ついに仏になると云うが行不退ぢや。

名高い徳本行者の弟子の、是本が詠んだ歌に「阿弥陀仏の誓いのいかでたがふべきたのむ我等にまことありせば」と、これが自力の行不退のちやきちやきぢや。これに徳本行者は筆を入れて「阿弥陀仏の誓いのまことあらはれて南無阿弥陀仏と頼む身になる」とせられた。また我が宗の信不退と云うは「阿弥陀仏の誓いの誠たがねば南無阿弥陀仏とおこりこそすれ」ぢや。今までこげ付きの難行自力がすっかりと離れ、一心一向に弥陀をたのむも、みなあなたからの発願回向。その御回向の信心故、いつでも往生治定に退転はない。勿論口に忘れておりても、憶念の心は常にして、心の内の喜びも不退転。本より一念発起のとき、仏のかたより正定聚不退転の、身に召しなしたされたれば、身分の位も不退転。信も不退転。報謝の大作も不退転。位行念の三不退が、他力御回向の行者ぢや。

そこでこの安居院の聖覚様や白川の二階堂の信空様がたは、師の賜を得た美味い安心ぢやとて、直ちに信不退の御座へ付かされた。

熊谷の遅参

さて第三番目に遅く来たが、彼の阪東一の剛の者、篠党の旗頭武蔵国の住人、熊谷の次郎直実入道蓮生房ぢや。その日は阪東の一子、小治朗直家より手紙が参り、その返書に隙入りありて、折節祇園真葛ヶ原まで出掛けたが、吉水の山に一面の雲気が立つことこれはけしからんと、しばらくためらいとと眺め入り、去んぬる元暦元年二月七日、かの播州一ノ谷の矢合わせ、源平両家の戦いに、夜も東雲（しのめ）とおぼしき頃より、平家の陣中には赤雲たなびき、源氏の陣中には白雲がたなびき、直ちに片々鬚鬚（あいたい）と上へなり下へなり、豎に登り横に通り、前代未聞の雲立ちの容体こそ、奇怪なれと見居たるに、一陣の風吹き来たれば、さしものたなびきし平家の赤雲、源氏の白雲が取り巻きしが、四方に鉄砲矢さけびの音。さすがに気早き九朗判官義経は、鵜越（ひよりごえ）より逆おとし、平家の陣中へと詰めかけしかば、こは叶わじと建霊門院、安徳天皇を守護し奉り、八島をさして落ちられた。権中納言知盛はじめ、天皇御一人は落さじと、我も我もと落ちゆきたり。今この吉水の山の上に、怪しげなる雲気の立つは、ハテ心得ぬとしばらくためらい、世捨人の沙門の身として、戦はあるまいし、これぞ法論智慧くらべの、論議問答の戦とみえる。学問の戦なればとても叶わんが、往生の大事安心の合戦なれば、二番と遅れを取らんや。いざかけつけて極楽参りの先陣をしてくれんと、韋駄天のごとくにつけつけしが、案に違わず吉水の御庵室は、御座敷一杯、御弟子が詰めて御座る。この通りに熊谷は、下駄も杖もやりばなし、「善信の御房の御執筆何事か」と尋ねられたれば、善信上人「信不退行不退の座をわけらるるなり」と。熊谷は半分言葉を聞くや否や、「しからば法力もるべからず。信不退の座にまいるべし」と、ずつと通した。前側をつらつらと眺め、「その信不退の御座に、たれぞ先駆けをせられたるや」と尋ねたれば、御開山の御返事に、「はや一人着帳が御座る」と云えば、熊谷は赤面し、「それはどなたぢや」。聖覚房に信空房の兩人と聞くもあえず、「アア口惜しや去ぬる元暦元年正月二十日、一子小治朗直家となり、また二月七日の暁、一ノ谷の矢合わせには、一家平山の武者処季重と、一二の駆けを争いしが、名利の戦の先陣はすれども、出離生死の一大事、極楽参りの先陣は、第三番へ遅れたことの残念や」と、大音上げて歎かれた。所が「ここに三百八十余人の門徒群居すといへども、更に一言を述ぶる人なし」と、どちらにしようとうろろ眼でござる。「これ恐らく自力の迷心に拘わりて、金剛の真信に昏きがいたすところか」と、兎角に下地聖道門のとき、功德善根を積まねば、仏には成れぬと云う癖が、浄土門へ来ても止まぬのぢやと御歎きぢや。

昔古物を好む話

昔古物を好く金持があたりた。これは井出の玉川の蛙の日干し、これは長良の橋の杭のくなくずと云う様なものを、五十両百両出して買い、その後貧乏して乞食となるに、茶入れの袋にする様な、古代の切れを縫い合わせて肩にかけ、利休の手焼きの楽茶碗をもて、人の門へ立ち「何ぞ下され」と云うたれば、主人は寛永通宝の一文銭をやした。彼の乞食は「とてものことなれば、古銭をくだされ」と云うた。昔の癖は乞食になっても、古物を好んだと云う咄。

兎角聖道門の下地の見識「諸悪莫作修善奉行」と、功德善根でなければ仏にはならぬと、思い込んだ癖が止まぬ。浄土門へ入っても、魔悪修善の定散二心の止まぬが行不退ぢや。

さて大師は暫く見合わせて御座りても、三百八十余人の御弟子、何の沙汰もない。「人皆無音の間執筆上人自名を

のせたまふ」と、四人目に御開山が、釋綽空と御付けなされた。「やや暫くありて大師聖人仰せられて云く。源空も信不退の座につらなり侍るべし」と、法然聖人も信の座に、名を付けたまいたれば、「このとき門葉あるひは屈敬の氣をあらはし、あるひは鬱悔のいろをふくめり」と、やれやれ仕舞てのけたと残念がられた時に熊谷は信不退五人の中、前は聖覺様や信空様、後ろは綽空様法然様。その間にこの熊谷を挟んで下され、わき道へ逃がさぬように、連れて行つて下さるとは、こんな仕合わせは御座りませぬと、男泣きに泣かれたとある。

それに似た咄がある。同行二人互いに大きな歌を読もうと云つて一人が、「極樂へ一足とびに参るなり閻魔そのけあたまけられな」と、詠めば、また一人が「先は弥陀あとは開山中はわれひき立てられてまいる極樂」と詠んだ。商人（あきんど）は帳面のよごれるを喜べども、閻魔様は歎きたまう。元祖は信の座の帳付け淋しきを歎きたまう。

月を指す指の喩

この信不退行不退は、御安心の大切な水際なれば大切な所ぢや。然るに他の因縁や喩えには目をさまし、御安心と云えば眠る者がある。主人が簀着て帰りたいれば、家の飼う犬がほえる。姿に目がついて、主人と云う体に目が付かぬからぢや。「修多羅月を指す指の如し」と云うて、あそこに御月さまが御座ると教えるに、小児は指の先ばかりを見て月を見ず。不法義なものは因縁たとえの指ばかり見て、御安心の月を見ぬ困りたものぢや。御安心の月さえ見れば、因縁喩えの指見るに及ばぬ。「文に執して義を知らざれば、三世諸仏の仇（あだ）なり」とある。近來流行た二合半や三合同行。ムカエとあるで向かわにやならぬ、申せとあるで申さねばならぬ。御文面の通りにせねばならぬと云う。大いなる誤りである。

紀州の不具足同行の話

紀州蘇川（そがわ）に不具足女中同行が有りた。「弥陀成仏のこのかたは」と云うのは、私のようなかたわものも、御助けと御有り難いと云つた。また「そもそも男子も女人も」と云う、男子をば仮名で読んで、菜虫までも御助けなされると喜ばれた。「解脱の光輪きはもなし」、御花束（けそく）かぶる鼠まで御助けと喜ばれ、また「光明てらしてほがらかに」を、光明てらしてほがらかしと読み、雑行自力もみな如来さまの、御光明の御力でホカラカシて下さると云うた。また泉州尼崎御坊の門徒、長右衛門の祖母は、不廻向と云うは信の上からは、御喜びのふえることと存じますと。これらは御文面は間違うても、その身一人に引き受けて喜べば、御正意に叶うぞや。これらの如き信を得た上での御文面の間違いは、往生の障りにならぬが、彼の行不退は浄土門中に入りながら、雑行も正行も分からず、正行中に入りながら、雑修専修が分からぬ。専修中に帰しながら、自力他力が分からぬゆえに、元祖の御己証に叶わぬ。信不退は雑行を捨て雑修を離れ、自力を止め、弥陀他力の御廻向ゆえ、信も不退、行も不退。往生も不退ぢや。

憶念称名の事

さて信不退のものは行に叶えども、行不退のものは、信不退には叶わぬぞや。そこで祖師は「眞実信心必具名号」と仰せられた。なぜまた信不退の者は、行不退に叶うかと云えば、口に忘れて称えず居ても、「憶念の心は常にして仏恩報ずる思いあり」ぢや。

業平の歌に「うつらへば秋なき時や咲かざらん花こそしらめ根さへ枯れめや」とある。菊は秋が過ぎると、花は散りてしまえども、根さえ枯れずば、また翌年秋を迎えたればまた咲く。花は散りても散らぬ道理と云う歌のこころぢや。口に忘れていても、信心の根さえ枯れずば、また御法縁の秋を迎えたれば、称名の花は咲く。よつて他力の行者は、称える時は行で相續する。称えぬときは信で相續する。いつでも相續ゆえ、『御一代聞書』に「念称是一といふことを、知らずとまうしさふらふとき、仰せに思ひ内にあれば色外に顯わるるなり。されば信を怠る体は、すなはち南無阿弥陀仏なりと心得れば、口も心もひとつなり」とある。また行不退の衆がナマンダブナマンダブナマンダブと、常住念仏して御座りても、口にばかり相續して心は御留守ぢや。そこで「称名憶念すれども所願に満たず」とある。

常念仏の御方は、丁度酒屋の六尺桶の飲み口のつめをぬぎ、口あてて居るようなもの。いかに酒好きぢやとて、口の中へたぶたと入るばかりで、往生治定と腹へしゅみ込まぬ。そして後には頭痛八百。あの大坂の一心寺などには、常念仏の坊主が死ぬることが知れたれば、三日以前から念仏申さずに死にたいと云うた。信の同行はあいだあいだに申せども、それが常念仏の行者ぢや。酒好きならは朝四つ時分には、霜けしぢやとて一杯。七つ時分には一日の算用酒。寝しなには寢酒の上機嫌。『御文章』には、称えつくめにせよと云うことではない、「たふとくおもひたてまつ

らんこころのをこらん時は、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と時をいはずとところをもきらず念仏申すべし」(五帖四通)と、朝には瞋恚(しんい)の霜けし、夕方には貪欲の棚おろし、夜の寝しなは寢酒の称名、引っかけ引っかけては、やれ嬉しや南無阿弥陀仏。そしてあいさにでも、人の家へゆく度ごとに酒が出ると、アソコノ家は酒の絶えぬ家ぢやと云う。あいさに申しても他力の行者は、常念仏の行者ぢや。

面(おもて)に墨の付いたは鏡で糺さねばならぬ。心の邪正は聖教をもて正さねばならぬ。法然様の御弟子、三百八十余人の方々さえ、往生の肝腑、自宗の骨目たる、『選択集』の御已証に叶わぬ。況んや末代の我々、いちおう聴聞しては、必ず必ず取り違えがある程に、昔の御門人の方が、われわれへの御手本ぢや。ある家の娘が疱瘡を病んだとき、門前をミツチャの人が通りたれば、これ呼び込みコレへと病床へ案内し、娘に向かうてこりやその様に搔くと、この様なミツチャになるぞよと教えた。今御同行も三百八十余人の、ミツ茶の人を手本として、それに習わぬ様にならねばならぬ。

熊谷の下駄笠の譬喩

さてここに熊谷が下駄をぬぎすて、杖笠を縁の上へ投げやられたは、一つはこの日蓮生法力房は、遅く参られしが禅坊の門内に入りて見れば、ただごとならぬ大勢故、何事の起こりしかに、大いに驚いて慌ただしく走りより、笠木履をも脱ぎ捨てて、思わず縁側に飛び上がりし、危急切迫の有様を示し、また一は下駄は雑行を捨て、笠は疑いを離れ、杖は自力を捨てると云うことを示す。

なぜに笠を疑いに喩えるぞなれば、笠きると頭の上が暗うなる。疑いの笠をかぶると、御助けの法体の空がくろうなる。またなぜに杖を自力に喩えるぞなれば、この善根で往生、この念仏を称える功德で、往生しようと持ちかためる。故に自力を杖に喩えた。また下駄を雑行に喩えるは、煩惱のしるい道を歩くゆえに、後生大事の足の汚れぬ用意に、雑行の下駄履くのぢや。

この熊谷も信不退の御座へなるときは、雑行の下駄はいらぬ故に、脱ぎ捨てた。銘々も本願の御座敷へ助けたまへと通るは、もう雑行の下駄はいらぬぞや。昼の敷いてある御座敷へ、下駄踏んで通るあんぽんたんはない。弥陀の本願の御座敷へ通るには、雑行の下駄ぬぎすて、疑いの笠をとらねばならぬ。そして御座敷の真ん中には、御光明の炬燵まであけて、下されてある故、往生治定と足のぼして、御報酬の枕して休ませて下さるのぢや。そのものに向かうて笠きぬか、下駄履かぬかと云うものはない。それに御宗旨の同行の内へ、御札すめにくるのは、炬燵にあたりている者に、下駄は履かぬかと云うようなものぢや。もう信心の上からは、欲しや惜しやの煩惱は起こるとも、ソレハ本願の御座敷で、壁の外の煩惱の雨風を聞いて居るのぢや。こころようはなくても、往生の障りにはならぬぞや。サアサア後生大事の屋根をふき、摂取の雨戸を閉め、光明の炬燵に往生治定とゆつくりと、煩惱の雨風の音を聞くばかりぢや。

鷺の絵解

ここに壁の張り付けに鷺がある。古歌に「または世に羽音ならぶる鳥はあらじうへ見ぬ鷺の雪の通い路」と、これは元祖の御弟子方の中にも、まだ聖道門の見識を捨てず、傲慢の盛んなることを示す。表では愚痴にかえれの、浄土門に帰しながら、内心は聖道門の釈迦何人ぞ、我何人ぞの見識。おのが智慧のくちばし、学問の翼をたよりに、人をおとしめるは、所謂諸鳥と取りひしぐ、鷺に御喩えなされた。

またここに雑木がある。これは諸々の雑行を修したまうに喩えたまう。『後千載集』に「おなじ野にわけて時雨は染ねども草も木の葉もてりかはりつつ」と、今は三月の末なれば、みどりの青葉ばかりなれども、この後御化導の、秋の時雨にあえば、御助け一定の十八願の紅葉になるもあり。いつまでも杉や柏のごとく、自力の青木で暮らすも有ろうし、末のほどこそ思い知らるることを示したまいたるなり。

松に藤、三義ある事

さて松に藤は信不退の徳を示す。これに三義あり。一に宿善深厚の徳。『続千載集』に「二葉より契りおきてや藤浪の木高き松にかかりそめけむ」と、松が二葉のとき、ソバに藤も実生えをする。ソコデ松がおれが生長して、千丈の空へ登るときは、ソナタモ見すてまい、つれて登ろうと、約束したものであらうと云う歌のこころぢや。十八願の

松は法蔵菩薩の二葉の時より、衆生の藤もおれが正覺とりたれば、こなたも御さとの虚空へ、つれ登ろうとの御約束があった故ぢや。

二に機に依りて法を成ずるの徳。清輔の歌集に「藤浪の咲きかからずばいかにして常盤の松の春をしらまじ」と、いかに常盤の松なればとて、ただ立ちのびたばかりでは所詮がない。藤がからみ付いて花が咲いたでこそ、青々とした松も色付いて見事なれ。弥陀の本願の所詮は悪人女人のゆがんだ藤が、かかるものも御たすけとからみ付き、聞其名号の枝に、信心歓喜の花が咲き、諸仏方もやれ見事やおほめなさるでこそ、本願の松の御徳があらわるる。

三に法に依りて機を成ずるの徳。『続千載集』に「いく春も花の盛りの松が枝に久しくかかれ宿の藤浪」と、藤も大地を這いまわると、人間が鎌や斧で刈りたおし子供が折り取る。松の枝の御蔭で、千丈の空へ登ればこそ、とられる氣遣いはない。今悪人女人の藤も、迷いの大地を這い歩かば、地獄の極卒が斧や鎌で、刈り取りて連れてゆく。また悪魔外道の為に折らるる。第十八願の松へ、かかる者も御助けと這い掛りたゆへに、十信十住十行十回向十地等覺の大空まで登り、信心の花咲かせ、何の氣づかいもなく喜ぶぞや。また古人の発句に「さがるほどその名も高き藤の花」とありて、今弥陀の本願に向かうときは、我が機は悪きいたずらもの、地獄ならでは行き方のない身ぞと見かぎり果てて、サテかかる機までも助けたまうは、弥陀如来ばかりなりと、我が身をへりくだるほど、いよいよ弥陀の大願強力が知れる。これが大悲にすぎる本願の正機たるを示す。

御寺の過去帳

サアこの中にも信不退の帳面に付いた衆は何程あるか。死ねば御寺の過去帳へ付く御方は多いであろう。「あづき弓果つべき身とはおもはねどなき人の数にこそいれ」と、サアサア死んで御寺の過去帳へ入れて貰うても、信不退の帳には入らぬと、未来は閻魔の大帳へ入り、地獄へ行かねばならぬぞや。そしてその胴骸（どうがら）の白骨は、大谷へ収めらるるが、極楽へ参りて御開山を喜ばす白骨は何ほどあろうぞ。大方御開山を泣かせます。地獄のぬけがらの骨が多いであろう。アソコノ亭主が死んで跡がつまらぬと云うが、ツマラヌ跡はどうなりともして、つまる様にも出来るが、信心なくば行き先がつまらぬぞや。それを不憫と思し召して、六百年の昔に、この信行両座の御吟味をあらせられた。

第七段 信心諍論之段

法然聖人の御捌

右座の三人は聖信房堪空、勢観房源智、念仏房念阿。左の前なるは我が祖。背後に居らるる六人は、住蓮、安樂、成覺、隆寛、聖空、善恵で、その諍論の所由は、上の信不退行不退の段と同じく三百余人の御弟子は、仏の方よりたまわる信心のいわれを知らず、一度にこりず二度三度まで、下地の聖道門の癪が出たのぢや。すべて聖道門では一法において、生滅の智見をおこせば小乗の信。無生滅の智見をなせば、通教の信。無量の智見をなせば別教の信。無作の智見をなせば円教の信。法は一苦集滅道なれども、その智見の浅深によりて、信心に浅いと深いとがある。依つて御師匠法然聖人は、御師匠だけの信心。また弟子は弟子だけの信心と、思うて御座るゆえぢや。「こころえていながらする雪の道」。上の段で、信不退でなければならぬと合点しながら、その信心が銘々の智慧だけでおこす信心にして、他力御廻向と云うことをしらず、宿善のないのはどうもならぬものぢや。

そこで御柔和な御開山なれども、御一生にタツタ一度、この時には腕肘張りたてて、「どうありても一つで御座る」。「イヤイヤそれでは御師匠の顔が立ちませぬ」。「イヤ立ちます。もし違つてありたれば立ちませぬ。一つで有りてこそ御師匠の顔が立ちます」。「ソレハ善信御房あんまりで御座る。黙らつしゃれ信不退のとい一番手柄したとて、ウソハ云わさぬ」。「云わさぬとはどうぢや。ソコモト方の味方は大勢。腕ずくなれば負けますが、この問答には負けませぬ。御師匠様が拙僧と、学問が一つぢや智慧が一つぢやと云えば、太平楽云うと思し召そうが、信心は一つでのうて何としよう」。そこを『御伝文』に「然れば聖人の御信心も他力より給はせたまふ。善信が信心も他力也。かるがゆえにひとしくして、かはるところなしと申すなりと申し侍し処に」と有りて、中々御開山も黙つては居られぬ。双方が鵠の目鷹の目になりて、競り合つて御座る。ところへ法然様も聞きかねて、その諍論の場へ御出でなされて御

捌きぢや。

これが末の世でも同行が本堂で、安心の間違い咄をして居るを聞かば、尋ねにきたら聞かそうぢやない。直ちに住持の方から本堂へ行つて、云うて聞かせよとの御手本ぢや。

もの一字で御相伴

さて正面に在す御老体が、念仏の大導師法然聖人。そのときの御捌きに、「源空が信心も、善信房の信心も唯一なり」と仰せられた。アノ「も」の字が有り難い。アノ「も」の字の一字で我々も御相伴させて下されて、同じ極樂へ参るのぢや。源空が信心も善信房の信心も、末代の同行が信心も、老母の信心もおさんが信心も、八兵衛の信心も門徒の信心も、唯一つなりと仰せらるる。サアこれを喜ばねばならぬ。町内で年寄りが、組頭五人組の仲間へ入りてさえ、袴のすれることを忘れて喜ぶに、今は信心の仲間へ入れて貰い、極樂参会の正客にしようとするぞや。

ときにこの「も」の字にも種々に用いらるる、悔やみに行つて是非もないことと云えば、なげきの「も」になる。花をみてさても見事なと云えば、ほめる「も」になる。御文章に「一度も仏をたのむところこそまことの法にかなふみちなれ」と云うも、ほめる「も」ぢや。また誰も彼もと云うときは、兼ねるの「も」。今もそれぢや。源空が信心も同行の信心も一つなり。兼ねの字ぢやなぜに一つぢや。出所が一つ故。

小判は大名が持つても江戸金で六十目。町人が持つても六十目。百姓が持つても六十目。第十八願の天下の金庫より出た、信心の小判なれば、法然様の大名でも、御開山の町人でも、今日の我等の百姓でも、御助け一定の六十目ぢや。三業の贗小判なれば、一人や二人は騙ししようが、六十目の値はない。「信心のかはると申は、自力の信にとりての事也。智慧各別なるゆへに信又各別也」とあれば、他力の信は十八願から出た正金ぢや。御金を持ったものはどこやらが違ふ。信心を得た人はどこやらが暖かそうな。

世間で大違のかずかず

さあどうぢや御同行の安心と、御開山の御安心と一つかや。世間で大いに違ふたことを御月さんと鼈(すつぽん)、下駄と焼き味噌と云うが、親子の違いを云えば、清盛と重盛。将棋で云えば飛車と角。虫で云はば蜂はおおむいてブウブウと穴へ入る、蟻はウツむいてスボスボと穴へ入る。「丸盆に豆腐をいれてゆくちんば丸く四角し長し短し」。種々違ふたことあれども、全体人間で云うときは、天子さまと乞食ほど違ふたことはない。あなたは雲の上人。こなたは菰(こも)の上人。少しの違いようなれども大違いぢや。

乳の譬喩合法

しかしながら子供の時、呑む乳ばかりは一つ味ぢや。天子様の呑みたまう乳ぢやとて、別段砂糖も甘露も入れてある訳でなし、乞食の子の呑む乳ぢやとて、塩も入らねば唐辛子の味もせぬ。これは天子様の子も乞食の子も、母の慈悲に二つのないゆえぢや。

ときにこの乳を呑み始めたは、いつぢや覚えた人はない。まず母が産み落として、七日ばかり苦い五香を吞ませ、胎内の毒を下し、その上乳合わせとて、荒乳を三つ四つになる近所の子供に吞ませ、ソシテ生まれた子を懷に抱き、左の手で縦に口をあけ、右の手で乳房を持ち、ちゅつとしぼり込む所が一念婦命ぢや。そののちはこの子が乳の味を知りて、小さい口に乳房をくわえ、グウグウと呑むぞや。今も浄土真宗に生まれ出た我々、まず初めには御宿善の御香を吞ませ、雑行自力の胎毒を下し、光明の懷へ抱き不捨と抱え、後生大事の口をあけ、発願廻向の乳房より、南無阿弥陀仏の乳を往生治定と、しぼり入れてくださるところが、一念婦命ぢやぞや。その後は後生大事の口あきとて、報謝の舌に極樂参りの乳房をくわえ、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏の乳をグウグウと呑むぢや。凡夫の赤子にはイッカロの智慧ぢやぞや。

サアそれなれば産まれ落ちて、七日目の何時に初めて、乳呑み始めたと云う覚えがあるか。一念発起の時節、イッ南無阿弥陀仏の乳を呑み始めたかは凡夫は知らぬ。阿弥陀如来はよくしろしめして助けたまうべし。南無阿弥陀仏の乳は、弥陀本願の懷にありながら、衆生の家督ぢやぞやとある。行巻に発願廻向を御釈しなされて、「如来すでに発願して衆生の行を廻施したまふの心なり」とあるぞや。

そして乳は右と左と形は二つなれども、出る乳汁は一つなる如く、弥陀本願の懷にある、光明寿命の乳房の形は二つなれども、御廻向の乳汁は一つぢや。そして乳は夏でも冬でも、寒暑同味の徳をそなたよい呑み加減。乳は齒の

ない子供が呑む。南無阿弥陀仏の乳は歯のない翁も称え易い。

六字名号は三音の事

南（舌）無（唇）阿（喉）弥（唇）陀（舌）仏（舌唇）と云うは、唇舌喉の三音なれば、牙齒音（がしおん）とて歯で云わねばならぬ。カキケケコの行の六ヶ敷音を省き下され、今は歯がのうても唇と舌と喉とで称えらるる様に、御氣を付けて下されたぞや。

ソシテ乳の中には母の食べた飯も汁も平も鱈（なます）の焼き物も、皆こもりてあるぞや。南無阿弥陀仏の乳の中には、万善万行皆こもるぞや。ソシテ母の食べたまう食物の中には、辛いものがありても苦いものがありても、そのままの味では出ぬ。何を食べてもみな同じ甘味の乳となる如く、辛い御修行も苦い御勤めも、みな一味の甘い南無阿弥陀仏になして下されたぞや。ソシテ小児が機嫌の悪いときも、直ちに引き抱えて乳房を含めると、鼻をクスクス云わして呑むぞや。今我等が欲や惜やと泣くときも、大悲の親様が名号の乳房を含めて下さると、煩惱の鼻をクスクスいわして、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と称えるぞや。ソシテ夜の寝しなのそえ乳にも、乳房くわえて寝入るぞや。同行衆は夜の寝しなに南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と、御称名をそえ乳にして眠らっしゃるかや。「阿弥陀仏と十声となへてまどろまんがきねふりになりもこそせめ」と元祖も御詠みなされたぞや。

サアサア今は天子様の召し上がる乳も、乞食の呑む乳も親の慈悲にかわりがない故一つ味ぢや。今も弥陀の親様の御慈悲が一つゆえ、御廻向の信心の乳も一つ。それを「源空が信心も善信房が信心も替わるべからず只一つなり」と仰せられた。あとで法然様ソロソロ御意なされる「信心のかはりあふておはしまさん人々は、わがまいらん浄土へはよも参りたまはじ。よくよくこころゑらるべきことなり」。信心がかわらばこの世ばかりの師弟。未来は同じ浄土へは、参られぬぞと御歎きなされたぞや。

ここに松のあるは元祖の信と、聖信房、勢観房、念仏房の信とは別なりと云う御譬えぢや。慈童法親王の歌に「染めかぬる時雨はよそにすくれども連なき松にのこる木がらし」とありて、外の木は秋が来れば紅葉する。松ばかりはいかに時雨に逢うとも、紅葉せずつれなきもの。この三人並びに以下の人々は、元祖御教化の時雨に逢いながら、信心決定の紅葉したまわぬは、松の如くつれなき、御方なるぞよと示す。そして松は時雨が降り通した跡では、サアサアと木枯らしが残る。元祖の御教化のときは黙つて居れども、木枯らしの残る如く、あとでは貴方の信と我々の信と違うなどと、サアサアのたまうとは思えば思えばツレナイ衆ぢやと示す。

雑木と櫨の喩

さてこの雑木の間に櫨（うつぎ）の照葉がある（漆の木の類）。楓よりは紅葉するものぢや。逍遙院の家集に「松がゑの木の間をいつかもみぢばはただひとしほに深き色かな」とありて、櫨は別して秋の諸木の中では格別に赤うなる。三百八十余人の雑木の中にも、我が祖は信行両座と云い、なおまた信心諍論したまい、いよいよ他力信心の色深く、格別に照りかがやきたまうは、櫨の葉の照るが如くであると示す。また少々薄き照り葉あるは、三百八十余人の中にも、聖覚房、信空房、熊谷などは、他力信心の紅葉ましまして、信不退の座につきたまうことを顕す。後捨遺集に出てある義光公の歌に「もみぢ葉の薄きもききもあのづからこころの内にわけてこそ見ん」と詠まれてある。秋紅葉を好み見る人は、櫨の照り葉と雑木の照り葉とは、心の内にわけて見る。信不退の三人の衆も照り輝く信なれども、我が祖の櫨の照り葉とは大違いぢや。そこは誰が知る。元祖法然様こそは、よく見分けさせられたぞや。

萩の喩に三徳

さてこの信心諍論のありたは、『正統伝』によれば建永元年の八月十六日のこととあれば、我が祖三十四歳の秋にして萩の咲く頃ぢや。故にここに萩が書いてある。これは元祖と我が祖と信心一致の旨を示す。この萩に喩えるに付いて三徳ある。

一に信機の徳を示す。「身をもなほおもひは捨て秋萩の花も古枝にかへる木なれば」と、萩は古い枝とて折りすてられず、秋をむかえたれば花が咲く。凡夫の古枝も助からぬと折りすてて、地獄一定の柴にしてはならぬ。宿善の秋を迎えたれば、信心領解の花が咲く。

二に信法の徳を示す。風雅集に安嘉門院の歌に「さこそわれ萩の下枝の秋ならめもとの心を人のとへがし」とあり

て、このときは萩の枝を法に喩えたもの。萩の花が咲きとうても一人咲くことは出来ぬ。皆古枝を借りて咲く。我等が信心は弥陀の本願の枝をかりて咲かねばならぬ。よつて花は去年宿借りて咲かせて貰うた枝の恩を知り、今年も去年の古枝に咲く。それに万物の霊長たる人間として、如来広大の恩を知らずば、萩の花にも劣りてあるぞとの御示し。三に信心一致の旨を示す。続選吟二巻の中の政為卿の歌に「咲きしより色をひとつに眺めけり水の古江（ふるえ）も花の真萩と」ありて、池の水は素（もと）より翠（みどり）なれども、帰しに咲きたる萩の花が、余り紫に咲いたゆえ、池に映る水までが一樣の紫になった。我が祖の池の水へ元祖の萩の紫がうつらせられる。元祖の信心の萩が紫なれば、我が祖の池水も他力信心の一味の紫になった。

妻戸の雀、屏風の山水

さてこの妻戸にある雀の絵は、古歌に「秋の田の刈り穂のあとの村すずめとめある身はさわがしきかな」とある如く、右三人並びに以下の人々は、往生を願ひ求める願心より、秋穂をひらう雀のごとく信心がかわるとて、喧しく囀りたまう有様ぢや。

次に聖人背後の屏風の山水は、古歌に「高根なる山はあちこちかはれども流れはおなじ谷川の水」とある如く、元祖と我が祖との学問は、山の高下ある如く替わらせらるゝとも、水は我が身は悪しきいたずらものと、おなじ信機の谷川に、一致にして下らせたまうことを示す。

勢観房の来歴

さてこの三人の中、勢観房源智は、元祖のことに御寵愛ゆえ、世間から法然様に隠し妻ありて、落とし子ぢやと云うた位。そのいわれはかねて元祖へ平家の一門御帰依ありて、内大臣重盛はじめ、薩摩の守忠度（ただのり）なども皆御帰依申したが、忠度が西国へ落ちる前晩、歌の師範俊成卿の館へ行き、『千載集』を御選みと承るが、かねて読み置きし「さざ浪や志賀の都はあれにしをむかしながらの山さくら哉」の一首、何とぞ御入れ下されと望まれたれば、俊成卿は勅勘の身なれば、読み人知らずとして入れ置きましよう、御受け合いなされたれば、忠度は大いに喜び、それより夜分人目を忍び、元祖へ御暇乞いをなされ、戦場にて討ち死にするとも、往生に間違ひは御座らぬかと尋ね上げたれば、そのとき元祖は「阿弥陀仏と打ちこむかたなそのままに敵も味方も西へこそゆけ」と、御形見を下され、ついに御別れ申し奉りたとある。

また越前の三位道盛、かねて元祖へ御帰依ありて、平家左遷の時分、自分の館へ上人を御招待申して、夫婦御教化にあずかられた。この勢観房は道盛卿の胤にて、北の方小宰相の局が、平家没落の後、元祖をたのみて、吉水の御庵室にかくまわれ産みおとし、北方（きたのかた）の遺言にて元祖の膝の上にて育てたまうと承る。ゆえに『選択集』付属の砌、吉水庵室の縁側に、兒子一人みえるはこの勢観房の幼少のとき、御傍に近く御養育にあずかられたる姿であると古来云い伝えた。

ときにこの三位道盛卿は、かねて参内の折から、上西門院の官女、小宰相の局を見初めた。この小宰相の局と云うは、刑部（ぎょうぶ）則方の娘にして、禁中第一の美女の聞こえ有りければ、道盛卿は「我が恋は細谷川の丸木ばしふみかへされてぬる袖かな」と云う文を遣わしたるに、小宰相の局この文を落としければ、傍らより門院の御前に出したものがある。門院、これは道盛の恋路を受け合わぬ、局に遣わしたる恨みの歌。余り恋路につらくするも女のだならぬ。自ら返歌をいたしつかわさんと、門院は「我が恋は細谷川の丸木ばし文かえしては落さざらめや」と詠みて遣わされ、御仲立ちありて道盛の妻となしたまう。しかるに道盛は三十にて生田の森にて、近江の木村源三成綱のために討たれ相果てられた。時に局は二十二歳。もろともに相果てて迷途の連れとは思えども、胎内に忘れかたみの一子を宿した故、今相果てて母子もろとも、闇より闇に迷うも本意ならずと、それより吉水へ参り、世を忍ぶ身をおこち、御かくまいにあずかり、元祖の庵室にて十月満たして出産。かかる御恩ふかき大恩蒙りし勢観房なれども、宿善なくて元祖の信と、我が信とは替わると仰せらるる。御傍で多年御養育に値うてさえ、自力の垢は取り難い。今我等遙かに年月をへながら、信心一致の旨を領解すること、ひとえに御開山聖人の、御教化の普きが致すところと仰ぎ奉らねばならぬ。

第八段 入西觀察之段

入西房の志願

これなるは祖師七十歳の御姿。右なるは入西房。左なるはその座に有り合うた蓮位房なり。かねてこの所は入西房に御影御許しの体ぢや。一体師は水の如く弟子は魚の如しと云えば、遠慮には及ばぬ故、入西房心願あれば、何なりとも申されよと仰せらるる。「世の中にかくしおきたる身の咎をしるや仏のころはづかし」と云う歌の如く、御開山様には入西房の心を、とくに見抜かれて知りて御座つたに、入西房は聖人の真影を写し奉らんとする志を、少しも他人に話さねば知らぬことと思つて居たに、聖人の御觀察ありて、あら恥ずかしやと恥入りたる顔の紅葉の色を、この濃き紅葉を以て知らせてある。「日をへつつふかくなりゆく紅葉葉の色にも秋のほどぞしりぬる」との歌の如く、御同行も御法義の秋の日に照らされたれば、自ずと赤くなりゆくぞや。

さて入西房かねがねの志たる真影図絵の事は、御開山様の御觀察によりて、京都七条辺に居住する、定禪法橋と云う画家に、写さしむべしと云う仰せでありた故、「入西房鑑察の旨を随喜して、すなはちかの法橋を召請す」とありて、定禪法橋を召したるに「定禪左右なくまいりぬ」と、早朝に参られたることを知らさんとて、ここに朝顔の花と犬とを書いてある。これは一応の説明なれば、なお深きことは後にて詳しく弁ずべし。

蒲（がま）の穂の絵解譬喩

さて定禪法橋は真影を写さんとて、尊顔に向かい奉りたるに、昨夜見たる夢に「善光寺の本願の御坊是なり」とありた。聖僧の姿と少しも変わらぬを見て驚き敬うを、この蒲の穂の高く秀で風になびいて、人目によく見分けらるるに御喩えなされた。「咲きまじる千草はわかで白妙の尾花ばかりぞ月に見えける」と、外の色の花は昼は見ることもなれども、夜は見分けにくい。他流の祖師方は上代の昼はよくその徳も見え分かり、諸人の帰依もありたれども、末代の夜分は光がない。我が祖は「善光寺の本願の御坊これなり」と云う位なれば、さながら尾花の如く、御徳もすぐれて立ちのびさせられ、その上より衆生済度の為に、肉食妻帯の在家示同の宗風になびかせられた。諸人の見分けも易くあり、御帰依申すべきは御開山ぢや。

天台では直ちに法に付いて、空仮中の三諦を觀するを附法觀と云い、また事々物々眼前のことによそへ觀するを托事觀と云う。今一一草木によそえて安心を示したは、天台の托事觀に同じことぢや。

書写の性空上人は馬方の馬を洗うに、アシアシと云うたと聞きて、阿字阿字と教ゆると聞き、その馬は誰の馬ぞと尋ねたまえば、符生殿の馬なりと云うたれば、そては阿字本不生か、目出度き御縁におうたと喜びたまうたとある。

また蓮如上人御病中の時に、空善がヨク囀る鶯を差し上げたるに、法をききけと催促すと御喜びなされ、空善に御文を下されたとある。

さてまた蒲を書いたについて、も一つ訳がある。古歌に「信濃なるほや野の蒲の穂に出でて引けばひかれん君ひかばひけ」とある如く、蒲の穂は枝もしなやかに、どちらへでも引けば引かるる柔和なもの。今入西房が写し取りたければ写しとれて、敢えてそむきたまわぬ、御心の柔和なことを、蒲にたとえ、君引かばひけと写しとらば取れ、常陸の国へ引けば引かれて行こうぞよと、入西房が心にそむきたまわぬことを示す。

朝顔、菊の絵解

さて間垣に朝顔の花のあるは、慈鎮和尚の歌に「くれゆけば本の垣根にかへるらんだ一時の朝顔の花」とある如く、今御開山もはや御年も七十歳。朝顔の一朝ごとに新たなるがごとく、いつ何時浄土の間垣に、帰らせらるることの知れさせられぬ。御齡のはかないことを御喩えなされ、入西房が御影を急がせられたも、もつともなことなりと顯す。

また菊を書いてあるは、古歌に「露霜の色を重ねてゆく春の残る形見にさける白菊」とある如く、菊は花の隠逸なるものにして、春の自分は梅ぢや桜ぢや桃ぢやと云うて、それぞれ花も咲きにおいもあれども、一年中の名残に露霜をうけて咲くは菊ばかりぢや。今聖人御在世の春の時分には、桜ぢや桃ぢやと云うて、種々の花が咲き乱れたる如く、御教化の香氣もましましたが、ハヤこの通り御絵に残りましたます名残は菊の如く、実に御教化の匂いもなつかしく、おわしますことを示す。

また菊には白と赤と紫と黄の四色と、そのうえに葉はすべて青色合して五色ある。これは真宗の一流が、後に諸派

となり繁榮の表示ぢや。

ときにこの入西の望みにより、御氣をつかせられ、彼には夢にまかせみくしばかりを写させられ、末代の形見には木像を刻まばやとて、翌年七十一歳にて御彫刻あらせられたが、御本山の御真影様ぢや。その御添え書きに「身のかはりを渡すものなり。妨げをなすべき人なし。努々（ゆめゆめ）わづらひ有るべからず。後の為にこの文をつかはし候なり。あなかしこあなかしこ。寛元元年十二月二十一日弥女へ 釈親鸞」と、この譲り書は今高田に有る。さて御開山御往生の後は、三十三間堂の南の門前を東へ半里ばかり、延仁寺に御送葬なされた。今に御火葬場の御旧跡がある。正骨二十五粒のうち、九粒は大谷十六粒は御弟子方へ御分骨なされ、御胴骨を砕きて漆にまぜて、この御木像に御塗り申したが、一天無二の御真影。今に御本山に御安置申してある。

善光寺の由来

さて「善光寺の本願の御房これなり」とある。善光寺のことを申さば、「信濃路や仏の御国よきひかり月ほがらかに照らす蕎麦畑（はた）」とありて、サットその大略（あらまし）を弁ぜば、東天竺毘奈耶城の月蓋長者が娘、如是姫は十三歳の時疫病を悩み、町内一同も同じ病氣に罹りた。月蓋長者は大層の金を費やして、名医耆婆（ぎば）を招待したれども、業病のことなれば如何とも致し方がない。就いては町内一統と申し合わせ釈尊を招待し仏力を乞わんとした。しかるに月蓋長者を始め、町内一統のもの仏を嫌い、かつて釈尊が七日の間托鉢せられたれども、仏に一粒の供養を差し上げず、仏や仏の弟子が町中に入ることを停止せられた。釈尊はそう云うものほど御不憫に思し召させられ、方便を以て月蓋長者夫婦を、祇園精舎へ召し寄せたまひ、善哉善哉と讃めたまひた。その時に月蓋長者は姫の難病の由を少し云いかけると、釈迦如来は大いに不憫に思し召され、「そなたの娘如是姫は疫病の趣なれば、おれが見舞いに行く」と仰せられたれば、「左様なれば御迎いの人夫を差し上げん」と云いしに、その儀に及ばずとて夫婦の者と共々に、少しの間に長者の家へ到りたまひ、如是姫の容体を見たまい、默然としてさしうつむき、「サテサテ大病おれが手にても叶わぬ。西方の弥陀を念ぜよ」と、十七日の間町中名号を称えたるに、十七日の念仏終わるとその夜、月蓋長者の門の上に、虚空中に弥陀観音勢至の三尊顕れ、釈迦如来は阿難、目連を召し連れて御見舞いなされ、弥陀釈迦二仏の光明、長者の家内を照らしたまうに、不思議や姫の難病即座に癒えたれば、釈迦如来の御指図に任せ、閻浮檀金三貫六百目を取りよせ、二仏の光明に照らせば、金は忽ち融けて三尊の仏が出来上がりたもうた故、弥陀の真仏は御浄土へ、釈迦は精舎へ御帰りなされた。月蓋長者次の生は貧者に生まれねば、思う存分仏を供養すること出来ぬとの心願で、貧者を望まれたれば、ついに日本では信濃の本多善光と云う貧者に生まれた。この善光大和の橘の京へ上り、浪速の池にかねて守屋が沈めて置いた、閻浮檀金の御仏を救い上げ、重ねて信濃の国へ御供申し、仏間もなければ白の上に御安置申した。その後善輔と云うもの死して地獄に赴きたるに、御済度のため善輔に随いたまひた。善輔済度のみならず、皇極天皇をも御済度申したれば、その恩を報ずるため、善光寺には禁裏様の御住職本願尼と申し今に相続して御座る。我が日本は上は御天子を始め、西方弥陀の御恵みを蒙り、仏法守護を報仏恩としたまうに、下主下郎の身でありながら、青表紙の十二巻ものぞけば、子細らしく仏法を粗略にするは、勿体ない次第である。その善光寺の如来の化身たる、御開山の御教えをまのあたり聴聞するが我々の身の上。たとえ信濃へ参りても、七重の御戸帳深く閉ざして、御姿は拝まれぬ。たとえお姿を拝んでも、目に拝んだばかりでは往生は成らぬ。その如来のお誓いの名号を聞いて信を取らずば参られぬ。故に『御一代聞書』に、「他流には名号よりは絵像、絵像よりは木像ということあり。当流には木像よりは絵像、絵像よりは名号といふなり」とありて、その名号を聞く一念が心に念仏を拝んだのぢや。故に御和讃には「子の母をおもふがごとくにて 衆生仏を憶すれば 現前当来とをからず 如来を拝見うたかはず」と仰せらるる。御助けが聞こえた一念が真仏を拝んだのぢや。ただ拝んで居るばかりぢやない、追っつけ自身も参りて、帰命無量寿如来様になるのぞや。

甲州と信州の善光寺

ちなみに弁ず善光寺は、信州の丹波島のある川西、柳原の庄にある。この川は信濃川と云うて瀬が百四里ある。昔越後の長尾謙信と、甲斐の武田信玄の合戦場。そのとき邪魔になるとて、甲斐の信玄がこの善光寺を焼き払うて、如来は甲斐へ引き取りた。そのち甲州に善光寺を立てて、今に御朱印五百石付けた大伽藍がある。さて川中島の戦おさまりて、また信州に善光寺が出来た。その後徳川の世となり、五代目の常憲院さまの御時、甲斐の善光寺からこちらが真の善光寺ぢやと訟事（くじこと）と成りた。これに依りて上野（こうづけ）より本光上人、目付は水野長門守、

織田監物。信州の善光寺へ下りたまひ、甲州の如来を取りよせ、堂内を木綿の白幕をはり、夜中のころ一山本願院をはじめ出席立ち会いたまい、まず甲州の如来を取り出すに掛け目三貫六百目。まことに閻浮檀金の一光三尊ぢや。それから信州善光寺の如来を取り出さんとて、七重の御戸帳を四重まで、本願院の院家があけるにはねつけられたれば、上野の本光上人將軍の仰せなれば、敬い敬いて五重まで御開きなされたれども、如来の大光明強く在せば、なかなか不徳の我等拜んではいかなる罰を蒙らんかも知れず、かく不思議あれば、本仏と分身との訟事は相分かりて御座ると、その由將軍へ言上し、今に信州が正真となり、諸人が尊信する正身の如来さまぢや、しかれば信州善光寺の如来様が、月蓋長者の伝来に相違ない。

ときにそのように御分身あるというはいかんと思えども、現に大和法隆寺南無仏の舍利も、ときどきには増えて二粒にもなる。その増えさせられたときに分けたのが、天王寺や橘寺の舍利ぢや。善光寺の本尊は一体なれども、衆生済度のためには何体にも御分身なさる。よつて伊勢の高田にも御開山へ、汝が済度の手を取らんため、身を分かつて与うべしとて、御感得あらせられた御分身がある。鉄拐仙人でさえ我が口より我が体を吹き出すに、況や本師法皇の阿弥陀様。体を分けてこの世に出現なさるるが、十九二十の行者を来迎なさるるのぢや。正真の弥陀は極楽浄土に御座る。然るに十八願の行者は、その化仏の弥陀に助けらるるのぢやない。真実報土の真仏の光明摂取ぢや。御開山は御身分どころぢやない。さては正真の阿弥陀如来様ぢや。この阿弥陀如来の真説に従い、雑行雑修に悩んで居た自力の心をやめたは、彼尊（あなた）の御心を貰うたのぢや。

頭に天地ある譬喩

ミクシばかりを描かせられたは、一体首から上は尊い。また肩から下は卑（ひく）い。故に着物で隠す。首から上は貴い故隠さぬ。ソシテ「人はこれ一箇の小天地」と云うて、いかさまこの間に（顔をさす）天地森羅万象が皆こもる。天窓（あたま）の円（まる）きは天。両眼は日月。鼻の高いは山。口は穴（うつろ）。その穴口の鼻と口よりフウフウ出る息は風。また風邪引きの時咳は雷。身を震うは地震。のぼせてクワツとするのは干魃。汗の出るときは洪水。ソシテ耳の穴二つ、鼻の穴二つ、口の穴一つぢや。この口の穴は一つで仕合わせ。一つでさえ困るのに二つもあれば迷惑する。この七穴より出ずる涙、鼻汁、涎などは雨や河の水ぢや。齒は石。髪は木。産毛は草。皮は大地としてみれば、天地のことが皆収まる。『俱舍論』に「離中知合中知」と云うことがありて、眼と耳とは離れてでなければ、見たり聞いたりすることが出来ず、鼻と舌とは物に接せねば、嗅ぐことも味わうことも出来ぬ。ソシテ目は一役。鼻は二役（かぐと息の手伝い）。口は三役（息と食としゃべるとあり）、あるだけで役人も四人（喉・舌・齒・唇）ある。体中でイチチの隙（ひま）は臍ぢや。口には一番沢山の人夫を遣うて一番忙しいが、多くの者が口に遣われて難儀する。

鼻と口の争論

そこで鼻が腹を立てて「口は多く物を喰らい、目は毎夜寝ると閉じて楽をさして貰うに、おればかりはそのほう達が寝ても、すすうと挨拶をして居るに、おれにはなにも喰わせも吞ませもせぬ。義理知らずめ」と怒れば、口が答えには「鼻殿は何か喰いたいと思うても喰うことは出来ぬ、その代わり鰻屋の店先で匂いをかいで、鼻をヒクヒクさせて居よ」と。口と鼻の言い合いを、目玉が聞きて目をむき出し、「かれこれと下の方でやかましく云うな。この目玉様が明いていやこそ香も嗅げば、言うことも出来るが、おれが眠ると鼻も口も仕事はない。おれが眠りてさえそうぢやに、もしや白目むき出して死んだら、手前達は役あがりぢや。我を大切に致せ」と云う所へ、耳が耳をそばだてて、「三人とも黙りて居よ。この耳の役目は聞くばかりぢやが、この耳を讃めて解脱の耳と云わつしやる。おれに御教化を沢山聞かせよ。未来浄土へ手引きする、御役柄はこの耳ぢやぞや。首尾よく浄土へ手引きすれば、口には百味の飯食（おんじき）を喰わすぞよ。鼻には清浄の香を嗅がすぞよ。目には七宝の樹を見するぞよ。そのほう達が喰うの喰わぬのと、小言ばかり云うておれに腹立つことや、欲のことばかり聞かせて、名号の御謂われを聞かさぬと、おとなしくして居る魂が、未来の行き場がつまらぬ」と云うた。耳の理解が尤もぢや。

よりて首より上は貴い故、御首の御影を書かせられた。

石を枕

この入西房唯円は、常陸久慈郡大門村枕石寺の第二代ぢや。御開山を軒の下に石を枕に、寝させ申した親父の倅が

この入西房ぢや。時に法如上人の御詠歌に「大谷の流れに口をそそくのは石を枕のかげにこそあれ」と遊ばされた。また御開山様が日野左衛門の門前に、石を枕に雪を褥（しとね）として、御休みなされた時の歌に「雪を褥石を枕にかりねしてあくるをまつぞ久しかりける」と遊ばされた。御門徒が信心をとらぬことを思えば、娑婆の雪どころか、八寒地獄の水に膚（はだえ）をつけて、寝ると仰せらるることぢや。「あくるを待つぞ久しかりける」とは、我々が宿善の夜の明けるを、待ち兼ねるぞよと仰せらるることぢや。ときに日野左衛門某（なにがし）と云うは、ただの百姓ぢやない。もとは近江国の住人日野左衛門大椽（ただじょう）頼秀とて、いつかどの武士の果てでありた。されど仏法に志はなく、貴方を軒の下でとめおつた者なれども、「要害を内から破る栗のいが」。宿善到来しては、自ずと信心開発し、到心に懺悔をせられた。御同行は軒の下どころか、金仏壇の内へ如来様をはじめ、御和讃御文章まで御請待しながら、イッカ御廻向申込みとは怖れ多いことである。御開山は四十一歳十二月三日。始めて一度雪の上に寝たでない。信のない同行をみれば、八寒地獄の紅蓮大紅蓮の水の上に、臥したまいたことは幾たびとも知れぬ。

さて入西房は上人四十一歳の御ときから、七十歳の御年まで三十年間御給仕退屈もせず。また御影を願ひ御開山滅後にも、直々に仕える如く、御給仕がしたいと願われたが手本となり、それより御在世の同行御弟子方へも御免となり、今日御末寺へも御免となる。

松に鶴の絵解

またこの杉戸にある松に鶴は、娑婆の御化益こそは八十九十なれども、御本地は極楽の阿弥陀如来。万年の松に千年の鶴の如くぢやと云うところぢや。素性法師の歌に「万代（よろずよ）と松にぞ君をいはひつる千歳のかげにすまんとぞおもふ」と、何れも長命は目出度いものぢや。時に選沢付属の所の杉戸には燕を描き、信心諍論の段の杉戸には雀を描いてあるは、前にも弁ずる通り、叡山法師の難問や、信心異同の諍論の如きは、燕のキツキツ雀のチュウチュウの如く、また御開山様は大鶴の如く、同日の論ではないと示された。その筈ぢや本地を尋ねて見れば、善光寺の本願の御坊ぢやもの。その本願の御坊と云うは、まさしく極楽の教主、帰命無量寿如来さまぢや。ときに康楽寺の御絵には、松の枝に鶴の巢籠もりを書いてある。これは深い思し召しのあること、雛鶴は御当流の門徒ぢや。今でこそ御報謝の口の黄色な雛鶴なれども、追っつけ極楽へ巢立ちして無量寿の大鶴になる。「百歳（ももとせ）といのる心のはかなさよ弥陀の御国は無量寿なりけり」と、無量寿にさせて貰うことを忘れて、現世祈りするとはまことに浅ましい心中ぢや。然るにこの無量寿になるは、往生してからかと云えば、「善知識の言葉の下に帰命の一念発得しぬれば、そのときをもて娑婆のおはり臨終とおもふべし」と、弥陀をたのむ一念の時もう迷いの命がきれて、心は無量寿に手をかけて居るのぢや。それで信心を戴いたものは、十八願の松ヶ枝に摂取不捨の巢籠もりになりて居るのぢや。世間の鶴は弓鉄砲の気づかいも有れども、第十八願の松が枝は地獄の弓や鉄砲の氣遣いはない。タツタ今に巢立ちをして、目出度く安養極楽の、七宝の宝地へ往生させて戴くとは、さても嬉しや南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。

江州犬八幡の起り

この犬は定禅法橋ぢや。古歌に「主しらぬ忌部（きべ）の里に来てみればこたへぬ先に犬ぞとがむる」とある如く、定禅は初めて御開山の御前へ参り、まだ尊顔をみつけぬ故にとがむる体ぢや。

またこの犬は入西房に喩えてある。犬ほどよくなさを受けて恩を忘れぬものはない。夏の頃縁先で主人が足を投げ出して眠りておれば、主人の足を犬が舐める。何の為ぢやと云うと、畜生ながらも養のうて貰う御礼の心ぢや。「知るや人かりそめにだに狩人の薄きなさにひかれぬるとは」とある。近州（ごうしゅう）八幡の近辺の山中に、犬八幡と云うがあるが、その訳は狩人がありて、その狩人が狩りに草臥れて、道の傍に仮寝をしたるに、犬が頻りに吠えて袖を引きなどするゆえに、狂介病（きちがいびょう）にても起こりたるならんと思い、その犬を切り殺したるに、不思議やその犬の首、梢にわだかまりて居りた蛇（うわばみ）に喰ひ付きたれば、蛇はついに殺された。それを見た狩人は、飼犬の能く恩をわきまえるを感じし、その後祠を立て犬八幡と云うたとある。

入西房も能く聖人の大恩を知りて、御給仕の上に御真影まで御願ひあらせられた。このところを頭わさんとして犬を

御書きなされた。犬すらこの如く恩を知るもの。今日の銘々も御開山の御恩を知らねばならぬ。「中々に雲より上はいざしらず見ゆるばかりも高き山哉」。御開山御一生涯の御苦勞は、雲の下ばかりなれども、八寒地獄にては中々雪を褥、石を枕くらしいの御苦勞ではない。その御苦勞も畢竟するに我等が為なれば、恩を知りて恩を報せねばならぬ。

源空金色御絵の事

さてこの御影を御残しなされたは、仮初めのことではない。「神を祭る在すが如く」は外典の誠め。『華嚴經』では「真仏木像の中に入来す」とあれば、紙に書いた画像とは云えど仮初めのものではない。御開山の御魂が宿らせられてある。むかし元祖法然聖人、吉水にて御化導の折から、月輪殿兼実公御入り成されたるに、元祖聖人は御湯に入りたまひ、浴室を出でさせられ浴衣のなりで、足のばし御休息あらせられ居たるに、御頭（つむり）の湯気金色の光明となりたるを拝見した。そのことを「源空光明はなたしめ 門徒につねにみせしめき 禅定博陸まのあたり 拝見せしめたまひけり」とある。正詮房と云う御弟子、かねてより絵を能くせしが、その時兼実公と諸共に拝見して、尊さに落涙して居りたが、殿下御狩衣の片袖を取り出したまいて、これに唯今の御姿を写しくれよと、内々の御頼みでありたゆえ、正詮は仰せを畏まりて写し奉るに、殿下は元祖と半日ばかりも御咄しなされて居た。元祖上人正詮房をお召しなされ、先刻我が像を写されたであろうと仰せられたれば、殿下は御断りの御挨拶をなされた。それより法然聖人は御写し絵を御覧なされて仰せに、貴人の傍にて法然がかく足を投げ出す筈なし。絵を書くには心得事ぢやとあれば、正詮房は畏まりて再び書き改めましょうかと申し上げしに、イヤ足を引いてやろうと、みて居る間に御足を引きたまい、浴衣の上を墨染めに色を変えて、御袈裟を書きたもうた。この御影嵯峨二尊院の宝物となりてあると云う。

兆殿司看病の絵

また兆殿司（ちようでんす）の看病の絵と云うは、兆殿司の母親が病氣の時、鎌倉將軍泰時公が、兆殿司を御招待なされた故、君命背くべからず兆殿司は、襖に自分の像を書き残して鎌倉へ下り、その身は泰時の御前にありながら、絵像が故郷にありて毎夜母を介抱したとある。しかるに今の兆殿司は夜ばかりの看病なれども、御開山は我々を昼夜御介抱なされるぞや。「天に口無し人を以て言わしむ」とて、御勸化はおれがするのぢやない、直ちに御開山様がおれが口を借りて、御勸化遊ばすのぢや。教行信証の御本典を初め、正信偈御和讃、その他数多（あまた）の御聖教は、書を以て昼夜お互いを御介抱くださるのぢや。看病人は枕の上がるを待つばかり。サア疑いの枕が上がりたかや。

御開山様は末世の衆生に、疑いの枕を上げさせたいばかりに、あらゆる御苦勞遊ばされた。「菊咲きて今日までの苦勞わすれけり」。春夏秋の永い間苦勞して作つたれば、見事な秋菊が咲きて、今日までの苦勞は忘れてしもうた。御開山も各々方の信心の、花の咲いたを御覧なされたら、さぞや御喜びなさるであろう。

親鸞聖人 四幅御絵伝指図 下巻

但馬 福成寺大仙師 述

第一段 北国流罪之段

他力浄土門の繁盛

この一段に於て両聖人御流罪に、おあいなされた大略（あらまし）を聴聞に及ぶ。

その起こりは上巻六段にある通り「凡そ源空聖人在生のいにしへ、他力往生の旨をひろめ給ひしに、世あまねくこれにこぞり、人ことごとくこれに帰しき。紫禁青宮の政を重んずる砌にも、先黄金樹林の尊にこころをかけ、三槐九棘の道を正しくする家にも、直に四十八願の月をもてあそぶ」等と仰せられて、法然聖人御年四十三歳安元元年春のころ、他力浄土宗を御建てなされてより、この仏願他力の法門に帰依して、往生成仏をのぞまれた。紫禁とは天子様のおわします宮裏のこと。青宮とは青色（せいしき）は東方の色なり。故に皇太子のおわします宮を東宮とも青宮とも云うとある。三槐とは太政大臣、左大臣、右大臣の三公のこと。九棘とは九卿のこと。ともに禁庭を補佐なされる、御歴々の堂上方である。そこで万機の政をとりたまう。上（かみ）天子太子を初め、文武百官に到るまで、極楽浄土の七宝樹林の、花ざかりの楽しみに、心をかたむけ法然聖人の御化導に帰して、この世の花や月は、嵐には散り充れば欠けもするが、四十八願の御慈悲の月は、ながめあかぬと我も我もと、本願他力の御謂われを聴聞なされることぢや。

月の十一徳と本願

ちなみに云う『照蒙記』に、『涅槃経』にある月の十一徳を、本願になぞらえて、「一に月はよく夜暗（やいん）をやぶる。仏願よく無明の闇をのぞく。二に月はよく道と非道とをみせしむ。仏願よく衆生をして邪正の路をしらしむ。三に月はよく道の陰易邪正をみせしむ。仏願よく生死涅槃をしらしむ。四に月はよく鬱蒸（うつじょう）をのぞきて清涼ならしむ。仏願よく三毒の鬱蒸をのぞき、菩提の清涼をえせしむ。五に月はよく螢火（けいか）の雄心をやぶる。仏願よく外道邪魔の高慢を破す。六に月はよく盜賊のおもいをやめしむ。仏願よく煩惱の賊をとどむ。七に月はよく惡獸をおさるる心をのぞかしむ。仏願よく五蓋の心をのぞく。八に月はよく優鉢羅華を開敷（かいふ）せしむ。仏願よく衆生の宿善をひらかしむ。九に月はよく蓮華を合（がつ）せしむ。仏願よく五欲のおこるをふさぐ。十に月はよく行人の道にすすむ心をおこさしむ。仏願よく涅槃の道におもむく行をおこさしむ。十一に月はよく衆生にみせて、宴樂を生ぜしむる。仏願よく行者の解脱の樂を生ぜしむ」とある。

総じて上の好むところ、下これに習うが人情で、田舎辺鄙の民百姓に至るまで、ことごとく空聖人に帰依し、弥陀を崇めざるを瑕瑾（きず）とし、数珠を持たざるを恥辱となす。富貴の人といえども、念仏称えざればおとしめ、たとい下賤のものでも、念仏称うるものをもてなす。かくのごとき人氣ゆえ、他力往生の宗旨は益々盛んになる。これに引き替えて他の諸宗諸山は、益々衰微する様になる。ここの所を「聖道門の諸教は、行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道今盛んなり」と仰せられる。これ聖道門の法は妙（たえ）なれども、時が末代濁世なれば、自力修行の難行は、時機相応せぬから衰え、浄土門は他力易行であるから益々盛んになると云うことには氣がつかず、ただ一概に我が法に偏執して、南都の興福寺東大寺、北嶺の延暦寺三井寺などから、色々と悪しきさまに奏聞し、「浄土宗興行によりて、聖道門廃退す。これ空師の所為なりとて、ただちに罪科せらるべきよし。南北の碩才憤りまうしけり」と仰せられて、ことのほかそねみ嫉んでおる折から、住蓮安樂のこともあり、ついに罪もなき両聖人は、四国と北国へ御流罪となられたがこの一段ぢや。これ偏えに末代の衆生が可愛さに、御身にかえられて、この他力浄土門を、御弘通なしくだされた。その御苦勞の大略（あらまし）を聴聞に及びましょう。

五条の内裏

これなるは五条の内裏とて、人皇八十二代後鳥羽院の内裏の体にして、大内裏は治定元年丁酉四月二十八日に回祿いたし、その節邦綱卿の別業が五条通にありた。それを大内裏御普請中、飯内裏とせられたがこの体相。この御門は禁裏の東、御築地の北の端の陽明門。この前に念仏停止の札がある筈なれども、覚如様飯にも末代まで念仏停止の札をのこすのは残念と、思召されて略なされた。

非番当番の事

この御門脇の番屋に、座りて居られる僧侶は、そのときの寺社奉行、二位の尊長と云う人ぢやという。この御方はなかなかの悪僧で、法然聖人浄土宗開闢なされしを妬み、いかにもして念仏停止をせんものと、自ら番人となりかつ僧分でありながら、その様に甲冑をかざり付けてある。然るに住蓮を初め四人は死罪。両聖人その他多くの人流罪となりたまひし後、南都春日にては鹿があれ、叡山にては猿が暴れ回る。これを誰いうことなく罪咎もない、両聖人を遠流に所した、神仏の御咎めぢやとの風聞がする。そこで彼やこれやを思い合ひし、遂に我が身の後生の一大事に気が付いて見れば、先は真つ暗闇なんとも、かとも安心立命が出来ぬ。そこで悪に強きは善にも強いので、ころりと回心懺悔して、法然聖人御勅免にて、津の国勝尾寺へ御着なさるるを待ちかねて、御弟子となり名を是信房と給わり、目出度く専修念仏の行者となられたとある。これ先には念仏門の仇となりし邪見人でも、一度回心懺悔とあやまり果て、御慈悲にすれば、必ず御洩らしのないのが弥陀他力の御本願。これが即ち悪人往生の手鏡ぢやとある。

また康楽寺の伝には、南都と叡山とより出でらるるに、非番当番がありて、五位法師の一人ぢやとある。この方が正しいと思う。なぜなればいかに念仏門を停止したいとて、寺社奉行まで務める者が、そう軽々と番人にまで出られる筈がない。また甲冑のかざりてあるは、同席の武士周防判官元国の、装束と見てよい故に、これは南都あたりに、今に寺中の僧官の外に衆徒の衆とて、頭は丸うて俗事を捌く役人が御座る。ソシテ扶持を貰い、妻帯しておる。云わば坊主の役人ぢや。宮門跡の坊官ともまた違うて、それよりは身分の卑しい役人ぢや。法然、善信念仏弘通お咎めに付き、禁庭に私の御沙汰もあらうかと、出張いたされた体。

念仏停止の事

またそのそばに座したる俗役は念仏停止に付き、非常を禁ぜしむる体。すなわち周防判官元国。これなるは伊賀の判官末貞、元国と同役にして、かの停止の札の前にて、高声念仏せし、住蓮、安楽、善緯、正願の四人をとらえる体ぢや。実は住蓮安楽はじめ四、五人づれにて、東山小松谷へ法然聖人を見舞いに参らんと、ここまで来たりしに、念仏停止の札を見て、思わずも「輪王の位高けれども、七宝久しくとどまらず。天上は楽しみおけれども、五衰はやく現じける。六方恒沙の諸仏の証誡したまう念仏をば、表向き申されぬとは、日月も地に落ちたか」と、涙を流し、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と、高声に称えければ、ヤレたわけ者からめとれと、打ち向かう体相ぢや。

これは往來の通路を交じりゆく人。驚いて草履をぬぎて片手に持ち、足をはやめて逃げる体。素襖（すおう）をきて居る常の人であるまいといえども、信長の時代よりは素襖の袖をとり、袴としたれども、全体今の袴に袖を付けたがスオウぢや。さればこれも同行にして、今法然様を内々に、小松谷へ見舞いに行きた人ぢや。

さてこのともに走り居られるは、住蓮房にて最早老僧ゆえ、早速に捕らえられて、近衛の牢に入れられたが、外の三人も死なば一処という約束ゆえ、住蓮が牢へ這入りたを見すてる筈はなしとて、名乗り出でともに入牢した。

親経卿の奏聞

これは六角前の中納言親経（ちかつね）卿、参内の体なり。この親経卿は大職冠十九代の孫、俊経卿の御子にて、後鳥羽院、土御門院二代の帝に仕えたまい、ことに家門累代の正統にして、朝廷無双の忠臣、才芸和漢に涉り勤勞四方に重く、内外の両典を鑑み古今の蹤跡（じゅうせき）を訪ろうて博覧強記の御方。ことに我が祖聖人とは、御入魂（じっこん）の御間柄である。すでに法然聖人は老体ゆえに齢もなく、格別なことも仕出すまいが、善信房は三十五生きておきてはいかなることを、仕出すやはかられず、死罪しかるべしと、すでに死罪と定まった評判を聞くに忍びず、御ナダメの為に御参内の体ぢや。善信房はこの節は、岡崎の庵室に慎みまかりあられた。そこで親経卿の奏聞には、住蓮安楽は制札の前で高声念仏、その上以て鈴虫松虫のこともあれば、死罪とありても是非なき次第なるが、善信にありてはいささかも、禁制に背きはせぬに、同じ死罪とはむごいなされかた、およそ政は公平ならずば、天下

は治め難いものなりと、事こまやかに御なだめたまうゆえに、遂に両聖人は流罪と定まりた。

両聖人御流罪決定

その宣旨にいわく、

太政官府土佐国司流人藤井元彦

右流人元彦ヲ土佐国幡多明浄ノ岩屋ニ之ヲ遣ワス。国宜ク承知シテ例ニ依テコレヲオコナヘ。路次ノ国マタヨロシク食済具馬三匹ヲ給ヘシ。符到奉行

建永二年二月二十八日 右大史 中原朝臣（あそん）判

右少弁藤原朝臣

右宣旨の使者として、左衛門の府生（ふしょう）清原の武次（たけつぐ）におおせつけられた。依つて建永二年三月十八日（建永二年十月二十五日改元して承元元年とす。故に或いは承元元年と云うも同年なり）、法然聖人は土佐国幡多に、御開山は罪名藤原善信、配所は越後国国府に御流罪と定まり、御開山の身につつがなく、満九十歳の長命を御保ちあらせられ、関東北国は申しに及ばず、諸国の人民御化導を蒙り、末代今日に至るまで、弥陀他力本願の御謂われが聴聞出来るのは、偏に親経卿の仁心に出ずとて、覚如様は別段に御絵相を以て、末代の同行まで知らしめたまう。くわしくは下に弁ず。

この柳桜は、春の時候の体を顕わしたるものなり。素性法師の歌に「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ花の錦なりける」のこころ。

この門内の御絵相は、親経卿八座の評定衆。すでに両聖人は流罪と定まり、あと四人は死罪の由を、佐々木三郎吉実（よしざね）に云い渡す体なり。佐々木三郎はその節の牢掛の役人。ゆえに弓箭を帯びて居る体なり。ときに住蓮、安樂などが、死罪とは、御政道にも御無理のように思えども、このことわりいかんと云うに、もと出る杭は打たれるの習い、その初め法然聖人五十四歳の御時、大原問答でしたたか御勝ちなされ、諸宗一統は丸負け。その上顕真、公胤、本性、静厳は皆同じく帰依し、醍醐の後乗房、高野の明遍はあまつさえ弟子となり、国中が法然さまより外に出家と云うは一人もないように云いたてた。その上に後白河の法皇をはじめ、上西門院の宮、関白兼実公をはじめとして、堂上一統数を知らず、武家にありては、小松の内大臣重盛公をはじめ、越前の三位道盛、備中守師盛（とももり）、薩摩守忠度（ただのり）、源氏にありては平山の武者処末重をはじめ、園田精熊（せいもう）、宇津宮弥三郎頼綱、熊谷の次郎直実。「いにしへの鎧にかはる紙子さへ風のいる矢も通らざりけり」。その他三歳の童子も、八十の翁も数珠をかけぬものは、人間仲間でないように云いなし、京中が吉水参りをし、なおその上に門人の中には、元祖の御意も知らず、聖道門は行じ難く、難行自力はいかにも外道の様に誹謗し、神明を軽蔑して自負せるが、そもそも事の起りぢや。元祖は聖道の法門は尊けれども、時機劣えては我が身に契わず、時機相応の法門は、念仏ぢやとの御勧めぢやのに、弟子衆がかように取りあやまりたる故、承元元年より三年前、叡山の大講堂の鐘を鳴らし、専修念仏停止の由、奏聞いたしたいとの内談。その一山の評定を顕真より外奏。そこで元祖七ヶ条の起請文、八十余人の連判にて、信空上人法蓮の執筆にて、叡山へ御つかわし、七十九番目に釋の綽空と御開山も御判をなされた。云わばあやまり証文ぢや。今嵯峨の二尊院にこの証文がある。必ず念仏を高ぶりませぬ、また他宗を誹りませぬと、元祖聖人も暫く念仏弘通を、御休みなされて御座りた。然るに寸善尺魔、東山鹿ヶ谷にて住蓮、安樂は六字札贄をつとめて、説法をいたす折から後鳥羽院の上皇、熊野参詣の留守に、御寵愛の鈴虫松虫の二人の後、内々に参詣して発心して王宮をしのび出て、紀州の粉河寺へおち遁世せられたを、上皇はもつてのほか御逆鱗なれば、そこへつけこみ、叡山南都より奏聞して、これみな法然が所為きつと念仏御停止下されとありた故、念仏は御禁制と定まり、四人は死罪両聖人その他は流罪と成りた。

仁寿殿、くれ竹の絵解

サテこれは朝廷仁寿殿なり。紫宸殿は天下の政事を執らるる所、またこの仁寿殿は天下の訴訟を評定の御殿。仁心でコトブキ長くおさめる御殿ゆえに、仁寿と名づくるなり。

この竹は異国より渡る故、くれ竹と云う女竹のことぢや。歌に「なよ竹の折るべくもなくなびくこそ世にふる道のころなりけり」とあり、別して女竹はしなやかなるものにて、今仁心をもつてしなやかに、天下の政を執り行いたまうことをしらす為ぢや。もつとも竹は内すき通り外直く、一尺ハダみに節あり。四季色変わらず、君子の徳をそなえたるもの故、これを植えるは全く御政事に私なきことを示す。

ここに橘が見える故に、これは右近の橘であるというものあれども、そうでないこれは御川の水とて、加茂川が今も丑虎の隅より流れ込み、御築地のそとの溝へ流れ出る。その御溝の水が御庭前へ流るる体なり。

八座の評定衆

この六人の公卿は六衛符とて、右近左近右兵衛左兵衛右衛門左衛門なりと云うものあれど、六衛符の装束でない。みな束帯の公卿ぢや。これは八座の評衆とて、その節八人して天下の訴訟ごとを、御さばきなされた御方がある。なんで八人なれば、五畿内の外に東海、東山、北陸、山陽、山陰、南海、西海の七道をそえると八になる。その八箇所を八人して御捌きなさるるで、八座の評衆と云う。今は六人より見えぬがこれに一人、ここに二人座が譲り合わせて、あけてあるから見れば八座の衆ぢや。この親経卿も八座の御一人である。百人一首に中納言家持というがあるが、あの人なども八座の評衆ぢや。「かささぎの渡せるはしにおくしもの白きを見れば夜ぞふけにける」とあるは、夜のふけてゆくまで評定することを詠んだものぢや。

住蓮房の死罪

ちなみに云うこの住蓮房は、もと伊勢次良左衛門清原の信国と云い、安楽房は後白川の北面の土、阿倍の判官盛久と云い、みな歴々の侍なれども、元祖の御教化に帰依し、御弟子となられた。住蓮房の母は八十一。安楽房の母は七十二。毎日毎日近衛の牢屋へ助命願ひに出られたなれども、願いかなわず遂に、住蓮は建永二年二月九日近衛の牢を引き出され、江州馬淵にて、佐々木三郎吉実が実験にて殺されけるが、「このころの隠し念仏が顕れて、弥陀の浄土へ捕（から）め取らるる」と歎び、打たれたる首より念仏を高声に称えける。

また安楽は六条河原にて、首打ちに定まりたが、その時官使にしばらくの暇を乞い、日没の礼讃を唱えければ、紫雲空（くう）に満ち異香薫じたるに、見る人奇瑞の思いをなしたるが、やがて念仏数返の後首を打ち取りたるに、打たれたる首より「極楽に参らん事のうれしさに身をば仏に任せぬるかな」と詠じ、数珠をつまぐること三返。不思議や口の中より、一つの青蓮華が出たと云う。また善紳、正願も同日に打たれる。

源信僧都は寛仁元年丁巳六月十日後往生なされたが、西行の『選集鈔』に、この事を詳しく書き述べてある。その大略を云えば、楞嚴院の僧都御往生なされた。ころは六月なれども、一室の内紛々と靈香薫し、一七日の中に胸より、青蓮華が三本まではえた。その節の政務処、宇治殿より御取りよせ、禁中へ上覽し堂上一同は、信仰拝見なされた。また一本は宇治平等院にて、念仏弘通を誇る者に、披露せられたれば、さすがの誹謗者も、この不思議をみて口を閉じた。これは一時の方便なるが、今も安楽房が青蓮を生ぜしは、謗法の人の目をおどろかし信に入れる為の方便ならん。ときに住蓮ら四人も、念仏停止の札の前で申されたは、上をおそれぬと云うもの、称えずに居ればよいにと云うに、たとい首はねられるはおろか、身は八つぎきにさかれるとも、称えずには居られぬとて、抑信のあまり我を忘れて高声に称えられた。これが不惜身命。法の為には命をもすてる人ぢや。

堅田源右衛門

例せば江州堅田の源右衛門親子が、生首切つて三井寺から、返すまいと云う、御真影を取り返した事がありたが、「弓は袋鉄砲にては湯をわかす天下泰平天下泰平」と云う、今では公辺の政事もとどき、箸一本もころんだこともないが、昔は荒いこと、文明第三二月十六日、大谷の御本廟は叡山より焼きはらい、蓮師は北国へ御下向。そのとき一天無二の御真影様は、他宗の三井寺円満院御門跡のはからいとして、大津近松の別所へ、御あずけなされてありたが、その

後追々世も治まり、蓮如上人山科に於て、海老奈五郎左衛門の寄付によりて本願寺の御堂が出来た。そのとき御真影様を、三井寺へ御迎に行きたれば、どうでも三井寺が欲の皮ぢや。御真影が御座ると賽銭が落ちるで、返しもない。そこで段々理づめしたれば、シマイには生首二つ持つてこいと難題。そのときこの堅田の源右衛門と云う獵師、子息の源兵衛に、マズかくかくの次第ぢや。どうすると尋ねたれば、源兵衛「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も 骨を砕きても謝すべしで御座ります。それは私が首を間に合わせて下され。生きて恥さらそうより、この世では御真影様の身代わりとなり、死して結構なる楽果をうけたい」と、覚悟をきめて遂に首を落とす。源右衛門は我が子の首を引つ提げ、外に同行四五人づれ、彼の三井寺にゆき、「サア御申し越しの生首残る一つは、我が白髪首を」と云いたれば、いかなる三井寺の僧達も、外の難題とは違い、ヨモヤと思いに、その堅固なる志しに感じ入り、「最早切るには及ばぬ戻そう」と、生首を見て御真影は御帰りなされた。ナント昔は生首が入用とあれば、命も惜しまず捨てた。今は少しの隙さえ惜しんで参らぬ。恥ずかしい心底ではあるまいか。それも信がないからぢや。その信心とは「聞其名号信心歓喜」とあれば、その歓喜の上より称名は自然と顯わるる。

法然聖人の御出立

これは小松谷の御堂。今は大仏馬町の東にある。これはその後に移したものの。昔は大仏の東馬町の南に有りて、今火燃（ひともし）と云う所の字とする。内大臣重盛公、四十八体の弥陀を刻み、昼夜四十八灯をともしたまう故に、ヒトモシと名づく。重盛の後、忠道公おもらいなされ御子息兼実公に伝えたまう。兼実公これを元祖聖人に、寄進せられたものなり。後に「千歳ふる小松が原を住家（すみか）にて無量寿仏の迎ひをぞまつ」と、元祖が御詠を杉戸に書きたまいた。

ときにいよいよ両聖人、御流罪と定まり、法然聖人は、土佐の国幡多、明浄が岩屋へ御流罪と一決したは、建永二年二月二十八日のことなり。宣旨は佐右衛門府生清原の武次。使いとして御云い渡しありて、三月十六日まで在京なれども、吉水はもはや退院あり、小松谷の御庵室で御逼塞の体。番人が付き実に凄凉布（さびしき）ありさまぢやとある。

御開山の御暇乞

何分七百年の昔の事なれば、音信通路も至つて不便。それに四国と北国とに、遙かにへだつて御別れの事なれば、御師匠法然聖人に、御暇乞にあがらせられた。その時御開山の御歌に、「会者定離ありとはかねてしりしかと昨日今日とはおもはざりしを」と、人間は不定の境界ゆえ、いづれ一度は御別れ申さにやならぬと云うことは、兼ねて覚悟はしていても、これがこの世の御別れと思ひますれば、御名残惜しうぞんじますと、申し上ぐれば、法然聖人の御返歌に、「わかれゆく道ははるかにへだつとも心は同じ花の台（うてな）ぞ」と、そなたは北国我は四国と、道は遙かにへだつともおつつけ花ふる浄土で対面するであらうぞと仰せらるる。まだそれどころではない。七百年余も生まれおくれた各々や我々も、他力の信心得たものは、同じ安養浄土の果報を得させて頂くのぢや。

また法然聖人に常々御教化を蒙りたる、数多の門徒同行、もはや聖人様は七十有余の御老体。ことに配所は遠い四国と聞けば、とてもとても今生の御拝顔は出来まい。御暇乞いを申し上げんにも、御流罪と定まりてからは、官の番人厳しくして寄りつかれず。いかがしたらよからうとあちらに寄り、こちらに集まって相談するも、何の所詮もなく皆々悲しんでおる由を、法然様御聞きなされ、「恋しくは南無阿弥仏を称ふべし我も六字の中にこそすめ」と御詠みなされ、念仏称える度ごとに、源空に対面した思ひをなせとの御勧めぢや。

しかれば今日の各々方も、法然様や御開山様に御暇乞いの心になり、浅からぬ御勸化のほどを、我が身我が身に引き受けて、益々御高恩の程を喜ばねばならぬ。御開山は「大師聖人もし流刑に処せられたまはずば、我又配所におもむかんや。もしわれ配所におもむかずば、何によつてか辺鄙の群類を化せん。是なを師教の恩致なり」と、かかることがあるまいならば、田舎辺鄙まで念仏は弘通せまいと、御喜びあらせられた。

西山善恵房の言上

またその節法然聖人の御弟子、西山善恵房証空申し上げられるようは、このたび住蓮、安樂、善綽、正願はいよいよ死罪。聖人はかく流罪の宣旨。暫く念仏を停止せられたまえば、聖人へ御帰依の衆もあれば、御上へ申しなだめ、御流罪御免許もあるべきようと、取りはからいも御座ろうと申し上げると、聖人はもつての外御機嫌そんじ、御畳を

叩かせられ、「七十に余る、この法然流罪に逢うが恐ろしいとて、明日をもしれぬ不定の命、なにしに念仏がやめられうか。念仏称えたが咎とありて罪せらるるとも一日はさておき、半時も止められうか。田舎辺鄙へ流されては、田夫野人を教化の手がかり。異見がましきことは、決して御無用。たとい何国（いづく）へ流さるるとも、上には梵天帝釈あり、下には堅牢地神まします。我が弘むる念仏御意に叶いなば、何れの神仏がすてたまわんや。天竺の僧伽羅は、后にあだ名を取つて、獅子国へ流されたまえども、観音あらわれてすくいたまう。唐の一行阿闍梨は、楊貴妃に浮き名を取りて、果羅国へ流されたまう。九曜星あらわれて道を照らすあり。かかる不浄のあだ名を蒙るとも、仏天これを哀れみたまう。今源空が勧むる念仏は、三世諸仏の証誠の念仏。いづくへ長さるるとも、よもや見捨てはあるまいぞよ」とて、「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と称えたまう。

白河信空上人の言上

そのとき白河の信空上人、その座にありて進み出でて、申し上げられるようは、「サツパリ御念仏を停まりたまえと云うに非ず。楞嚴院の恵信は、念仏帶依の高僧なれども、天台をたてたまいて念仏したまい、覺範上人も真言秘密にありながら念仏したまう。東大寺の行基、六波羅寺の空也、禪林寺の永観みな本宗をたてて、念仏したまうあいだ。何とぞ聖人も浄土宗を別に立てられず、ヤツパリ元天台宗に帰りなされて、内証で念仏したまうか、または東大寺、興福寺にたより、表は三論、法相をたてて、内証にて念仏したまうなれば、かかる難題は御座りますまい」と、まだ言いおわらぬに、もつてのほか御氣色あしく、「そなたは何事を云わるるぞや。天台は四土をたてて、凡夫の参るは、凡聖同居の浄土であるといやしめ、真宗報土へは別教では地上の菩薩、円教では住上の菩薩の処居と自負す。また賢首は法性土、變化土、自受用土、他受用土と立て、弥陀の浄土は變化土にして、真実の浄土ではない、商売家の出店の如く、よりて凡夫が参られるとおとしめ、また恵信はその信は顛倒したまわねども、弥陀の浄土は報土と、御判釈あらせらるれども、なお天台の本宗をすてやらず、念仏共運びと勧めたまう。今法然が如き一宗建立して、弥陀をタノミ念仏するものは、真実報土に往生すると、端を改めて勧むるでこそ、弥陀の正意も顕れるにてこそあれ、法然が命に替えて立つる浄土宗を、流罪に逢うがいやぢやとて、元天台宗に帰れの、南都の法相三論に随えのとは、聞くもけがらわし。たとえ法然が一宗を立てたが咎とあつて、身は八つ裂きにさかるとも、今更こころはたじろがぬ。たとえこの法然が身はどうなろうとも、末世の衆生が往生には替えられぬ」とて南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。

十二日講信者の話

「大海に生ずる魚余水を飲まず、深く般若を信ずる者は、余法に於て所行有らず」。鷹は死んでも穂はつまぬ。まさかの時にうろたえぬのが決定信ぢや。平生は喜び顔していても、子か孫がハシカ瘡瘡と云うと、術ないときの神だのみ。御宗旨の御嫌いぢやけれども、折角近所から云うてくださるのに、願かけぬのも悪いと、その人へ義理を立て、御開山へ背中向けるぞや。藏の壁の厚い薄いは火事の時に知れる。信心の壁の薄い証拠は、まさか病気のときに、現世祈りの火が入る。

大阪十二日講中に信者があつたが、その一人娘が病氣した時、一家に日蓮宗の信者がありて、かの娘が労疫を察し、百日法華になることを勧め、日蓮宗の和尚もきて頻りに勧める。この御題目を称えと、この病氣なおれた上に、長命のお守りと説きたてたが、かの娘「サレバお寺の墓には、みな老人の墓ばかりで御座りましよう。さすれば連れない故、私は厭で御座ります」と云えば、和尚ヌカラヌ顔にて、「若いのもある」と云うたが、若いのもあれば、延命長寿のお守りが、あてにならぬことぢやとて、遂に化けの皮が顕れた。

小松谷の事

この小松谷の御堂は、今は大仏の馬町の東に当たり、綺麗な山門あり。大寺にして浄土宗鎮西派の御寺にて、しかも九条様の御位牌所ぢや。元祖の御時代は、前にも云う通りかの馬町の南門にヒトモシと云う土地に建ててありたとある。今はここへ引き移したものだ。小松谷と云うは、もと小松の内大臣重盛公の別業を、寺に取り立て念仏の道場といたされたところ。二十五人の女中を二十五の菩薩に仕立て、来迎の相などをして諸人を集め、念仏を興行せられたことは、古い伝記にはある。

小松谷出立の模様

時に康楽寺の伝には、三月十八日に御出京とあり、知恩院の絵伝には十六日と云う。これは十六日に小松谷を御出立なされ、今の伏見街道一ノ橋の西に、法性寺の小御堂と云うがある。これは九条家の中興、貞信公の御建立なり。その後回祿して、九条家の道長公の、御建立あらせられた、東福寺の仏殿の内に安置した、即ちかの大きな弥陀が、元の法性寺へ御入りなされ、十七日は御逗留にて、十八日に法性寺を御立てなされた。依つて絵詞伝の十六日後出京は小松谷のこと、康楽寺の伝に十八日とあるは、法性寺を御出立のことを、取りて云うたものぢや。時になぜまた法性寺へ十六日に入らせられて、十八日まで御逗留ぢやと云うに、かの小松谷は表向き禁裏よりのお咎め閉門なれば、番人が厳しく、表向き余人の出入りはならぬ。元のお弟子衆が、こそこそ裏門から出入りぢや。そこで関白兼実公が、この洛外の法性寺へ、十六七両日御立ち寄りを願わせられたのぢや。その時御帰依の人々北山からは、顕真僧正を初め、竹ヶ谷の静厳法師、大原の本性上人、嵯峨の念仏房、或いは醍醐の寛雅、仁和寺の慶作阿闍梨。みな御暇乞いにかの法性寺まで、お見舞いお見送りなされたとある。

されば今この体は、十六日小松谷の御堂を出立の模様なり。これは追立ての官人。一人は周防の判官元国。一人は領送使の役人左衛門の府生清原武次。「ヤア太上官府土佐の国の流人藤井元彦。時刻移れば上への恐れ。早く立ち退かれよ。早く立ち去られよ」と、大音声で呼ばわるを聞くお弟子達。咎もない聖人に無実の難を申しかけ、その上に呵責の声。憎さも憎しと申したれば、そのときに聖人「末世の衆生が臨終に、獄卒に追い立てられる、呵責の代わりと思えば嬉しい」とのたまう。

聖人はかかる墨の衣に墨の袈裟なれども、実は咎人四人（めしうど）ゆえに、藤井元彦と云う俗名なれば、梨子打の衣帽子に水色の水干、白い布の指貫なれども、それでは丁度禰宜みるような、御俗体に書き残すは恐れ多いとて、寛如様がかかる殊勝なお姿に、書き残して下された。しかしほんまは衣帽子狩衣の御姿ぢや。

またその輿は立派にみゆれども、ほんまは唯の張り輿ぢや。「かかるあさましき張り輿に、御載らせらるることの勿体ない」と、御弟子衆が申し上げたれば、「その時末の世の衆生が、のる火の車の代わりと思えば、嬉しい」とおよろこびなされた。

白鈍色を着けたる僧は、御師匠のお輿をかき、讃岐までお供の僧達。また墨衣の僧達が縁側に泣いて居られるは、小松堂の住僧とて御堂御預かりの僧。みなみなこのように御愁嘆の体。

御分かれの法話

さてその日法性寺の小御堂へお立ち寄り、関白兼実公には御門前まで御出迎い、法然聖人百日も御剃りなされぬ、御頭りは真白髪。その上へ梨子打ちの衣帽子に水色の水干、禰宜見る様な御姿で御輿よりお出ましなされたれば、みな衆が一同にワット声を上げ泣かれたとある。その時法然聖人法性寺の、御座敷へ通らせられ仰せに、法然は毎々の言葉に、「十善の法然、々々は鳥帽子もきざる男なりと申せしが、今は鳥帽子をきることの嬉しいや、聖道の人々は智慧を磨きて成仏する。浄土門の人は愚智にかえりて仏となる。かかる衣帽子の姿こそ、弥陀の本願の機に叶うなれ」とお喜び、その時月輪殿下は二日の内、半時も御傍を離れず、御教化を聴聞なされた。もつとも御年五十六歳にして、日頃はお虚弱の御性分なれば、聖人の御前より「私儀年は半百をすぎ、老いの白髪となりまし、実は今日ありて明日なき身。聖人も七十五歳なれば、たとえ御赦免ありて、重ねて御帰洛あるとも、拝顔はとても叶わぬ。私儀は往生の先達を仕る。思えば年程恥ずかしいものはない。法を聞くには生きながらえるにしくはなけれども、また生きながらえてかく悲しいお別れにあい奉るとは」と、ただ大声を挙げてお泣きされたとある。

さて十六日十七日は昼夜ともに、関白を初めその外内帰依の顕信僧正、公卿僧正などにいろいろの法門の御話しなどもあり、さて十八日早朝はハヤ御出興と云うおりから、関白殿下には法性寺の門前まで、お見送りあそばして、お輿の轅（かじ）に取り付き、余りにお名残惜しく思し召し、「何とぞ今生のお暇乞いに今一句の、御教化を」と所望せられた。そのとき「罪は十悪も五逆も生まると知りて、蚊の足をもおるべからず。行は一念も十念も生まると聞きて、一生称名すべし」との御法語あらせられた。

そのとき領送使とて、土佐の国まで送り届けらるる役人が、左衛門府生清原の武次。「ヤアヤア時移れば上への恐れ、早く早く」と追い立てつれば、関白も尽きせぬ御別れを遊ばしたが、貴賤男女は街（ちまた）にあふれ、念仏停止の

時節なれば、大きな声では申しねども、唯口の中にて南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と申せば、聖人様は張り興の物見から、お顔を出せられ、御言葉はなくとも御心の中にて、諸人への御暇乞い。町に溢れた貴賤男女は、いつもの聖人様ぞと思いの外、百日も御髪を剃りなされず、また御頭には梨子打ち衣帽子に、水色の水干を見るより、ワット泣きさけび、さてさて御殊勝な聖人様も、アノあさましい御姿はと、御別れを惜しまぬものはなかりたとある。

それより五人送り十人送り、後には数百人の御門徒の面々、次第次第に御見送りされたが、御興は法性寺より、大宮通り鳥羽をさして御下り、鳥羽の南の門とは、今の淀のことぢや。淀より川舟十一艘に、お上よりお許しの御弟子十人、その外に付き添いの御弟子、清原の武次の家来、以上六十二人の御供があったとある。時に淀川を神崎さしてお下りなさるに、右川舟十一艘がお下り故、川の両堤には数千人の同行が、モウここまでここまでと一足送り二足送り。次第次第に送りしが、御座舟が段々向こうへ行かせらるると、御舟の中の念仏が遠ざかりて低う聞こえ、御舟が見えぬようになるに、またお名残惜しう思い、二丁三丁御見えなされる処まで御見送り。お傍へ近寄り小首かたむけて承ると、次第次第に御舟の念仏が高う聞こえる。それを移したが彼の浄土宗のクリアゲ念仏ぢや。

サテここに四つの不思議あり。彼の十六日の晩に小松谷の御庵室へ十六人の盗賊が這入りて法然聖人の御教化を聞き、改悔懺悔して御弟子となりた。

二に神崎で五人の傾城（けいせい）が一句の御教化にあずかりて、その夜川へ入水して、目出度く往生を遂げた。そのときの御教化に「みめはよくとも炎王は愛でたまわんや。形は尋常なりとも獄卒の杖は免るべからず。色は白くとも猛火の為めにはくろむべし。声は妙なれども、呼喚地獄には叫ぶべし。髪は長くとも命は短らん」と仰せられた。

三つに阿波の国、万歳山郭見の浦の鬼神が、御済度に預かりたこと。

四つに落ち着かせられたが讃岐の国塩飽（しあく）の庄。高橋時遠入道西忍が、我が家へ月輪入ると夢の告げを蒙りた。月輪とは元祖聖人のことぢや。なぜなれば元祖聖人は、勢至菩薩の化現ぢやと云うことは、かねて聞いて居るが、『須弥四域経』によると、世界が暗（やみ）になりた故、観音、勢至の二菩薩が日月と現れたまいたとあれば、月輪は勢至菩薩なれば、即ち月輪の入りと見たは、勢至の御入りにして、元祖聖人が勢至の化現と云うことは、いよいよ明らかである。

サテ元祖聖人は、ついに讃岐へ渡り、丸亀の西紫雲山光明寺を開きなされ、「南無の舟阿弥陀のかいで掘る清水末の代（よ）までもぶつぶつとわけ」との御詠もこの時である。

桜と松の絵解

またこの桜は「咲く時は花の数にもあらねどもちるにはもれぬ山桜かな」とあるが如く、元祖の御教化の花は一旦盛んなれども、ついに南都北嶺の偏執の風につらせられ、アア御流罪に値いたまうぞやと、云うところを込めて書かれてある。

また松は中納言行平が「立ちわかれ因幡の山の峰に生（お）ふるまつとしきかは今かへりこん」と、三年の勤番すみ京へ帰られるとき、長く別れを惜しむものがあったが、そのように待つなれば、タツタ今にまたぞろ帰りこんと詠まれたが、今もこの法然をそのように待つならば、たった今に帰りこんと、云うところを顕して描かれてある。

親鸞聖人の御出立

サテこれは岡崎の御庵室とて、東山南禅寺の北、真如堂の南に当たりて、その節九条の御別荘があったが、今は岡崎の御坊とて、東本願寺の御掛所となりてある。御境内に少納言井戸とて、御開山在世に掘らせられた井戸がある。時に承元元年三月十六日。この岡崎の御庵室より御出立の体。

月輪兼実公様を初め、その外御一門の衆中、並びに玉日の宮様、まことに五ヶ年の御流罪、ことに二百里を隔てて越後の国府。ホトノウ御帰洛の宣旨も有ろうとは思し召せども、まずは今生のお別れと皆御愁歎。別して関白兼実公には五十六歳。半百の齢をすぎさせられ、再会の期もまたかたかるべしと、サメザメとお泣きなされたが、もし善信御帰洛なき内に往生せば、多くの衆生を導きて、跡より目出度く御往生の程を待ちたてまつり、共に浄土の再会を期し奉らんと、遂にお別れあらせられて、かかる興にお乗りなされた。

粟田口を東へさし、逢阪の関をこえ、大津打出の浜より舟に召されたとある。

これなる騎馬の二人は、一人は追つ立ての官人小槻（おつき）の行連（ゆきつら）。今一人は領送使右衛門の府生源秋兼なり。大上の官府越後の国の流人、藤井善信早く立たれよと、追つ立てる役なり。

またこの騎馬に次ぐさむらい二人は月輪さまよりのお附き人、朝倉主膳、伊賀の守貞尚（さだたか）。

また輿の前後には三十六人あり。かれこれ四十人ばかりの道勢にて、越後まで送らせられたとある。それを絵伝には略せられた。

これは蓮位坊。この通り背中にお聖教を負い、泣く泣くお供の体。

これは太夫房寛明。我が祖の弟子となり西仏と名づけられた。今輿を守護の体。そのとき聖人もし叡山の衆徒、念仏弘通に怨（あだ）を結び、待ち伏せのことであらんと、よく心を配り用心せよとて、「惜しからぬ露の命をながらへてあはれさしもにあはんとぞおもふ」と詠ぜられ、善信更に命を惜しむにあらず、衆生済度せねばならぬ身なれば、我が命が総門徒の命なるぞよと仰せられた。

巨多大明神の靈告

ときにその日は風もなく海上十八里、戌亥の隅の海津と云う浦へ御着きなされて御一宿。御附きの衆に仰せ付けらるる様は、「善信これより心の儘に、道々田舎辺鄙の者を教化して、配所へ勝手に下りたき程に、御銘々に付き添い送られては、賤男賤女に近づきにくい。何とぞこれより帰らるべし」と御断りなされ、これより御自身にも御聖教の負い櫃を負わせられ、蓮位房、西仏房を召し連れたまい、七里の間荒血山の難所にかからせられ、越前の今庄、府中福井、金津、細呂木、加賀の小松、金沢、越中砺波郡を越え富山をすぎ、三日市、振外（ふりと）、浪青味（なみあおみ）、それから越後の親知らず子知らず、比丘尼コロバシ、猿スベリ、駒かえりの難所をすぎたもうた。御旧跡巡った衆は知つての如く、波の引いた間に走り通り、波の打ちかける間は岩の狭間に隠れ、また引いた間を考えて通る。親でも子でも見殺し、手を引かれぬゆえに、親知らず子知らずと云う。それから鬼ブセより九里の間を居多ヶ浜と云う。この浜に居多大明神と云うて天神の社がある。その明神の社まで御着きなされたが、三月二十九日の晩、夜の五つすぎのこと。京御出立より十四日目に御着きなされた。

なにが浜辺にころりと御一服なされた。明宮（あきみや）のことなればお茶一つ召し上がられることも叶わぬ。その夜は拝殿に一夜お休みなされたが、御夕飯もお洗足（すすぎ）もなく、ただ「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と、お称名諸共に休みたまいしが、次第に夜も更けゆくに随い、早や東明（しのめ）と覺しき頃、国分津の代官萩原の民部の少輔俊景（としかげ）、早馬にて駆け来たり、今朝（ちよう）七つ時のころ、居多大明神の御告げに、「今夕（せき）我が前に一夜を明かさせたまう聖人は、末世相應の要法を勧めたまう善知識なるぞ。早く汝がかたへ御招待申し入れ、未来の引導に預かれ」と、さては京よりかねて御沙汰のありし、当国府への流人藤井の善信、即ち聖人のことにてやあらんと、御迎いに参られた処が、翌日は四月一日この日の旭を拝みたまうに、アラ不思議や聖人の御礼の中に、南無阿弥陀仏の六字が顕せられたを、サテハ我が弘通の念仏の法門、北国にも弘まる御しろしならんと御喜びなされて、日輪の中に、南無阿弥陀仏と六字の名号を御書きなされたが、今に居多明神の神主に残りてある。

国分寺の御住居

それより右の代官俊景が館へ御入りなされ、かかる在家の内におきますも、恐れ多いとて、所に国分寺とて天台の寺が、昔の北山で学友でありた人が御座らせられたを幸いに、国分寺の境内に竹の内と云うところに、僅かな御庵室をしつらいおきませしが、何を云うにも他宗の天台に御座られては、御教化に遠慮があるゆえに、その後国分寺を四丁離れて、大場村と云う処に周囲（ぐるり）を三方池で、中に小丸山とて小さい山がある、その上に御庵室をしつらい、お住まいをなされたとある。ほんの田舎のことなれば、松の柱に竹の床、荒々しき蓆を敷き、召しも習わせられぬ縋（つづら）蒲団に、お召しのものとは木綿どてらに布のお衣。朝夕の御膳とてもお口にあわぬ黍（きび）の羹（あつもの）、芋の葉の羹、ソシテ五ヶ年があいだ勅勘のお身の上なれば、お頭（つむり）とては剃りたまわず、御髪は両方へたれさせられ、皮と骨とに痩せ衰えさせられし有様。今に愚禿の御影とて、信州康楽寺に御残しなされてある。

心の御旧跡巡りが肝要

拙僧も小丸山へ参詣し、「これやこのむかしはこれと思はれて落とす涙に小丸山かな」「野に出るとあたまのうへに

とぶ雀こいつも春のとびあかりもの」と詠じた。よう仮初めにも出て遊ぶ事を、好きな衆があるものぢやが、ありがたい心はなくとも、御旧跡は半分でも巡らつしやれ。有り難くなりませう。

まず京から六十里越前吉崎へ参詣。それから配所まで百里ばかり。この間が難所ぢや。親知らず子知らず。その親知らず子知らずより、信心のないのが聖人の御恩知らずぢや。こいつが第一の難所。その難所が八難所の一つぢや。御一代聞書に「一つ信をとらぬに依りて悪きなり。善知識の悪きと、仰せられ候は、信のなきをわろきと仰せられ候。信の無きはわろくはなきかと仰せられ候」とある。そんなれば御旧跡さえまわれれば信心がとれるか。ただ御姿の御旧跡巡りた分では往生はならぬ。御心の御旧跡巡らざれば往生は叶わぬ。御心の御旧跡とは、この蓮位房の背中に負われたる、御聖教の中にある『往生論註』や『選択集』、それからその他我が祖の正信偈や御和讃ぢや。御姿の御旧跡拝んだよりは、御心の御旧跡が肝心ぢや。耳で聞其名号の一念が、御心の御旧跡を拝んだのぢや。そこでこの一念帰命の御旧跡拝むと、御開山ばかりぢやない、正信偈の「龍樹菩薩造論説」と云う処では天親菩薩の御旧跡、御信心さえ了解すれば、七高僧の御旧跡も、釈迦如来の御旧跡も、五劫永劫の法蔵菩薩の因位の御苦勞の御旧跡も皆拝むのぢや。

のぞき眼鏡の喩

のぞき眼鏡は見ている内に、サアサアここが江戸ぢや江戸ぢや。江戸は八百八丁。大名小路、旗本屋敷、両国橋から浅草の観音。台が替われれば肥前長崎、阿蘭陀屋敷。日本国中皆見えるが如くぢや。

サテこの浜手に師弟三人御歩行の体。総じて居多の浜と云えども、居多の浜は国分寺より遙か南に当たる。これは功德地浜とて、柿崎より黒井の間をすべて犀の浜と云う。その内米山寺川と、黒井の間を功德地浜と云う。

御流罪中にこのように気儘に、御歩行なさる筈がないと云うに、これにいわれありて、両聖人五年の流罪のはずが、四年目に御赦免になりて、法然聖人は承元四年八月二日、和泉の判官阿倍の近元を勅使として、京の外迄帰らるべしとの御勅免。ゆえに津の国勝尾寺まで御返りなされた。御開山も承元四年に、流罪を御ゆるしなれども帰京は御免なく、越後の国中は勝手に御徘徊なされる様に、御ゆるしが有りたゆえに、このように承元四年のころより翌年の秋までに向けて、北越後へ御越しなされ、処々御教化あそばされた。（この年改元ありて建暦元年と云う）。

ことに順徳院様などは、北条高時などの乱にあわせられ、後鳥羽院は讃岐の国、順徳院様は佐渡島へ、御左遷の御身となせられた。波風が荒いを云い立てにして、三年の間越後に御逗留あそばしたが、幸い鳥屋野（とやの）と云う所で、御開山の御教化に御あいなされ、「善信房はおれが流罪とせしが、それにこの国へ朕もサスライの身と成り、今善信房の教化にあずかることの嬉しや」とて、御一人の皇子彦成親王と申し奉りしを、御開山の御弟子となされ、真念上人と申し奉り、后と共に佐渡島へ渡らせられ、彼の真念上人が御開基なされたが勝興寺ぢや。それを蓮如上人の御時代に、かかる天孫の寺をば、佐渡島に置くは恐れ多いとて、越中へ御引き取りなされたが、古（ふる）国府の勝興寺殿（でん）。今に加賀の守殿の御近親にて、御宗門本寺の御連枝、加能越三ヶ国の触頭（そくとう）、越中の勝興寺殿ぢや。

永代橋の落ちた話

これなる三人前なるは蓮位房、中なるが御開山、後なるが西仏房。先へ蓮位房が渡らるるは、この橋は往還の橋とて、雪のころなどは橋の上へ雪を踏み固め、泥一面になりてあるに、滑るか滑らぬかと試みて歩く。わるうすると滑り込む。そこで一足一足踏み試みて歩く故に、試みの橋とも云う。また往還と云うは、往はゆき還はかえると書いて、往きかかりても滑りかかりては、後へ戻り戻りする故に、往還の橋とも云う。

依つて蓮位房が云うにはこれが名高い試みの橋。まず私が試みに御先へ渡りましょう。聖人には恐れながら後より渡らせたまえと、さきへ渡られる体相。その時聖人につこりと笑いたまい、「今この試みの橋よりも危ないは、今日我等が命の橋なるぞ。何どき踏みかぶろうも知れぬ。危うきは不定の命の橋なるぞ」と、御教化なされたとある。

小三十年程前になるが、江戸の永代橋の落ちたことがある。即ち深川の八幡の御造営ありたが、丁度八月十五日。江戸のことなれば、ドンドコドンドコ渡る。向こうの渡り口が五六間ほどもストンと落ちた。そこへ行きかけて入るも入るも八百三十八人死んだ。本庄の二百石取る旗本の子息が、両刀抜いて人を五六人切った。すると人殺しと云うより後へ戻り助かりた。かの子息はその頓知の働きによりて、三百石御加増なし下された。そのとき向こうの土手へ渡り付いた人は、どの位に嬉しかろう。

今も五信心の土手へ往生一定と渡りつき、無量生死の命拾いしたらば、どの様に嬉しかろう。かようになればもう何時、命の橋は落ちてても大事なないぞや。

居多の浜の御通行

サテこの居多の浜は、昔からの伝に雪中に居多の浜を御通りなされ、鷺の飛(た)つを御覧なされて、「声なくばいかにそれともしられまじ雪ふりかかる蘆原(あしはら)の鷺」と御詠みなされ、五濁乱漫の雪の中、御称名の声のあるので、他力信心の同行と云うことが分かるぞと、御喜びなされたところ。それは国府御逗留中、あるとき南辺へ御教化に、雪中居多の浜を御通りなされた時のことと見える。なぜなれば今この御絵相に、白う見えるのは雪ではない。これは塩汲桶などもあり、塩釜の侘びしい体もありて、塩浜が白う見えるのぢや。第一その証拠には人家の屋根、草木等に雪は見えぬ。また第二証拠にはこの御絵相に、秋の模様をあらわして、木梢が紅葉の体に書いてあるゆえ、これは正しくかの承元四年の秋より、翌年の八九月に向け、北越後蒲原(かんばら)郡鳥屋野新島等処々、御教化に御下りなされ、すでに京都より建暦元年(承元五年に当たる)十一月流罪免許の勅使が、御下りと御聞きなされたゆえ、北越後より秋八九月に、御配所の国府へ御帰りの体相ぢや。

よりてこれは前にも云う如く、柿崎より黒井までの四里の間を犀の浜と云う。その内米山寺川と黒井の間に、功德地の浜と云うがある。故にこれは功德地の浜にせねばならぬ。拙僧も先年御旧跡を巡回したで、まのあたり吟味致しおいた。

扇屋夫婦御教化

この功德地の浜を南へつきぬけた所を柿崎と云う。ここに扇屋と云う商人あり。これに宿をかりたまうに、慳貧(けんどん)邪見のものなれば、なかなか宿をかさず、軒の下に休ませたまえば、この家の主不思議の霊夢を感じ、ついに内に請じ奉り、御教誡を蒙りしに、生死無常のことわり、夢幻泡沫のすがたを抱えながら、流転の業因はなせどもあかず、出離の正道は教ゆれどもものうく、菩提は手の上にとありとは聞けども、求むる心なく、三途は足の下にありと思えども、恐るる心なく、いたずらに光陰を送り過ごして、むなしく三悪の火坑に陥らんこと、悲しみの中の悲しみにあらずや。幸いに今すすむるところの弥陀の本願こそ、悪人女人までもたやすく帰命の一念に、助かる御法なれば、とくもはやくもこの法に於て、信行をつとむべきよし、ねんごろに御化導なされしかば、夫婦もろともに廻心懺悔して、無二の信者となりたとある。

翌朝御出立なされ、二町ほどへだたりて、おうけのこまたと云う川を渡りたまうころ、夫婦のもの御後を慕い、御形見に名号を願われた。これを世に川越の名号という。その時聖人一首の狂歌を口ずさみたまいて、「柿崎にしぶしぶ宿をかりければ主じの心じゅくしなりけり」と詠ませられたれば、主じも流石は出来た人、「かけ通る法師に宿をかしなければかきくれたりや九字の名号」と返歌をした。今柿崎の宿井の上と云う所に、扇屋山浄福寺と云うて、御旧跡となりてある。

サテそれより聖人国府へ御帰りなされ、その年(承元五年に当たる)改暦ありて建暦と云うた。その建暦元年十一月十七日、岡崎の中納言範光卿が京を出立なされ、十二月二日に、国府へ御着なされた。越後などに住まいして居るものは、生きた御公卿様を見たことはないに初めて拝み、かかる堂上の御迎いに御出である聖人様を、粗末に思うたことも勿体ないと、いよいよ御敬い申されたところ。

よって何分上京と思し召しても雪深ければ、段々御弟子御門徒が強いて御留めたてまつり、翌二月上旬に北陸道はまだ雪ふかければ、信濃路を越え、善光寺へも御参詣ありて、東海道をお上りの思し召し故、上野(こうずけ)の国へ御越しなされ、碓氷峠を越えハネ石と云う難所を通り、四辻と云う処で京都より下られた、智明房と云う元祖の御弟子になわせられ、元祖は権中納言藤原光親(みつちか)卿をもて、津の国勝尾寺より京へ勅免、これに依つて去年(建暦元年)十一月二十日に、御帰洛しましたが、翌年正月一日より御不例。遂に二十五日に御往生と御聞きなされ、今は上りても詮なしとて、それより引き返して金津と云う所で、一七日御中陰を御勤めなされ、それより京へは御登りなくして常陸へ越え、稲田に御逗留なされた、とあるが御本山の伝記ぢや。すなわち反古裏書に「建暦元年十一月十七日、同じくめしかえされたまひ、法然聖人は落陽東山大谷に居したまふ。道俗貴賤をゑらばず、あまねく念仏をすすめます。翌年壬申のとし正月二十五日、御入滅。鸞聖人は師匠同時に勅免ありしかども、北地雪ふかく兎角

して、使者停滞のうへ、法然聖人御入滅のよきこゑければ、今は上洛ありても甲斐なし。しかし師教を辺鄙のともがらにおしへつたへんこそ、師孝たるべきと越後の国より、常陸の国へこゑ稲田の郷といへるところに暫く居をしめたまふと云々」。

御上洛に付いて異説

トキに高田の正明伝、並びに仏光寺の伝には、建暦第二の申の年秋八月に御上京なされて、禁庭に御参内。それより四十一歳にして、江州の湖水北荒木と云う処に、安藤駿河守宗陸光（むねおかみつ）とて、即ち今日野家の御一門の大名がありたが、月寿丸、花寿丸と云う七つになる若殿と五つになる次男とを疱瘡にて同日に死なせ、ついに家督を舎弟に相続させたまい、出家して御開山の御弟子となられた。これを源海上人と云う。

この安藤駿河守入道、即ち源海上人の寄付により、京の東山科に一字を建立し、聖人へ献ぜられた。聖人は大いに喜ばれ、実に正法を興立すること嬉しやとて、寺号を興正寺と下された。トキニ源海上人「なにとぞこの寺に、聖人の永住在す様」と申し上げたれども、また念仏繁昌せば、南都北嶺の妬みもいかがと思し召すおりから、常陸の小島の郡司武弘、並びに鹿島の大宮司悪五郎為久、出家して性信房と云う、この二人が東より御迎いに登りたを、これ幸いとまた常陸の国へ御下りがけに、伊勢に御参詣なされたとある。

仏光寺の縁起

その後興正寺第七世了源上人のとき、九十五代後醍醐天皇お悩みあらせられ、諸寺諸山へ御祈祷を仰せ付けられたとき、興正寺よりも祈祷の札を上げるように御宣旨があった。その時興正寺の本尊は六角堂御通いのとき、御感得の如来ぢやとある。その本尊が天子の御居間、ナケシの上に顕れさせられ、光明赫奕（かくやく）と光りを放ち、天皇様を照らしたまえば、忽ち御悩み御平癒あらせられ、これによりて興正寺を改めて、名を仏光寺と下された。即ち今の仏光寺の阿弥陀如来の御本尊ぢや。その後本願寺蓮師の御代に、仏光寺歴代に教毫上人、深く蓮如上人に御帰依ありて、本願寺へ御座らせられて、蓮如上人の御弟子とならせられた。そこで蓮の字を下されて、教毫上人は蓮毫上人と、法名を御貰いなされたとある。

そのとき仏光寺の寺中四十二坊ありしを、三十六坊は右蓮毫上人へついで、本願寺へ参られたとある。京の端、東の坊のと云うは、みなその四十二坊の内ぢや。仏光寺の境内の東にありたゆえ東の坊。端にあるゆえ端の坊。また四十二坊の内、大和に十六ヶ寺遷したを、十六道場と云う、みな大寺ぢや。その四十二坊の内、六坊あとへのこり教毫上人の御嫡子、六歳になられるをあとに御止め、御養育申したが今の仏光寺御門跡様。故に今に寺中に六坊ありと。よつて御伝鈔には「かしこに化をほどこさんがために、なをしばらく在国したまひけり」と、三十九の御歳から六十二の御歳までのことを、よもやしばらくとは仰せられぬはず。これはその当季雪が深いで越後に御座らせられたれども、しかしして後には御上京ぢやと云うことは、その中に籠もりてある。

また禁庭より岡崎の中納言範光卿をもて勅免。この時聖人、「右の如く禿の字を書いて奏聞したまうに、陛下叡感をくだし侍臣をほきに褒美す」とありて、かの勅使へ御請け書が愚禿善信と御卑下なされて書いて上げさせられた。なぜなれば五年の勅勘の御身なれば、御頭はぼうぼうとはえのび、実に禿（かむろ）の如くなる御姿ゆえ、愚禿と御書きなされ、その後は愚禿愚禿と卑下謙退して仰せられたは、所謂「我身はわるきいたづらもの」と云う、御安心の信機に付いて御名乗りなされた。しかし他宗から云うとチト不審がある。大論に然五波羅密ありとも、御六の智慧波羅密なくば、鎧甲を着ても太刀を持たねば、敵は打たれぬ如くぢや。それを愚禿の智慧なしで、どうして煩惱の敵が討たれる。それば弥陀の大智光より、御廻向の信心の智慧で、のこる所もなく煩惱の敵を退治するのぢや。

第二段 稲田隠遁の段

これが常陸の国稲田の御庵室の体。これなる色衣の御すがたが御開山。次の間の二人の僧は蓮位房西仏房。外はみな諸参詣の体。「幽棲を占むといえども、道俗跡をたづね、蓮戸を閉ずといへども、貴賤巷に溢る」。門前に素襖を着、

一刀を帶したるは、その近郷の大名高家の人とみえる。錦のあつものを着したるは、鹿島明神の参詣の体。

金銭橋の絵解

サテ門前の傍に一寸した橋がある。稲田の前にある金銭水ぢや。その金銭橋と云う訳は、聖人あるとき外よりの御戻りの節、前の川にて御足を洗わさせられたが、不思議や後に黄金の銭が、落ちてある様に光りがさす。ヤレあそこに金の銭が落ちてあるとて、入りて捜せばなんにもない。水が澄んで上から見るとまたある。これは無相好の御開山なれども、ドウデ下地が弥陀の御化身ゆえ、御足の裡（うら）に千輻輪相が、御残りなされたのぢや。釈迦如来は大地を歩ませられるに、四寸ずつ宙を御歩き、青土は直には踏ませられぬ。そして七日のあいだ行足をおろしたまうあとに、光明が残らせられるとある。今御開山も御足を洗いたまうあとに、金銭の形に光明が残らせられたのぢや。

サテ「幽棲」とは、かすかな住まいと云うことで、御隠遁の侘びしい体を云う。しかれども「道俗あとをたずね」とは、どこどこどこ御跡をしとて、御教化にあうことぢや。石州浜田の家中に歴々の俳諧師があった。江戸から行脚が参り、「あなたの高名承りおります。御逢いなされて下され」と云えば、そのとき「角ありと浮名はづかし蝸牛（かたつむり）」と詠んだ。主が脇に「かくせどもそとへは出る竹の子」と附けた。いかさも棚の隅に砂糖を置いて、赤蟻がたかる如く、稲田の御庵草に御隠遁なされても、御跡を慕うて群集したとある。

そこで聖人ある時御弟子衆に、「おれが三十一の歳岡崎の庵室で、六角堂へ参詣の夢に、東方を見れば峨々たる岳山が見えた。その山の形が当国筑波山によく似てある。さては今の繁昌は、その夢の内に顕れたのか」と、御喜びなされたとある。

この筑波山は名高い山で、御式文には筑波山の北の辺云々とありて、この筑波山の山続き六里にして、かの弁円済度の板敷山がある。この板敷山より一里北に、稲田の御庵室がある。故にこの辺は総体に仏法有縁の土地ぢや。

関東北国二十八年の教化

サテこの稲田の御庵室には、建保五年丁丑正月御歳四十五歳より五十四歳まで十年後逗留なされた。トキニあなたを関東北国二十五年の御苦労と、何れの御教化でも一本やりに云わつしやるが、前後を算用すると丁度二十八年になる。その内三十五から三十九の御歳まで御配所。四十の春二月から四十二まで足かけ三年後在京。サテ小島の郡司武弘、並びに性信房の迎いにより、再び常陸に御下りになり、かの小島武弘が方に御逗留が、四十二三四の三年ばかり。そのとき三月逗留の寺を三月寺と云う。サテ四十五より五十四まで稲田。この間に「仏法弘通の本懐ここに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足す」と仰せられて、真宗の教典たる、『教行信証』の御本書、正信偈などはみなこの稲田にて御製作。サテ五十五より六十一まで、あるいは高田の本坊、あるいは結城その外、処々に御座らせられた。そして六十二の御年、思し召し立たせられて御上京。前後二十八年の御逗留ぢや。

種々の不思議

ときにこの稲田十年の御逗留の内には種々の不思議があった。

まず関東御教化の手始めが、下野（しもつけ）の室の八島の神主、大沢掃門（かもん）の願いにより、室の八島の池に棲む大蛇を御済度。この池に棲む大蛇は毎年氏子の中から、人身御供をせねばならぬ。その大蛇を御済度遊ばされ、大蛇の臨終に花が降り、今に花見ヶ丘と云う。そこで氏子中やレやレもう、これから人身御供の番に当たれば、可愛い我が子も大蛇の餌食にせねばならぬと案じたに、これも聖人さまの御恩ぢやとて、みなみな御徳を慕うて参詣したとある。

サテ鹿島の近辺鳥の巣と云う所に、悪五郎将監と云うものの墓から、妖怪が出て人を悩ます。それからまた与沢の喜八が女房が、産後に死して墓から火が出て人を悩ます。これらをみな片端から御済度なされ、その上鹿島明神が御帰依なされ、諸参詣の中へ交じりて、御参詣、後に釋の信海と云う法名を貰い、御剃刀まで頂戴なされた。その節「この稲田には水が不自由なゆえ、私（わたくし）境内に七つの井戸がある。一つ献上致す」と仰せらるると、稲田の境内に清水が湧き出たとある。その頃この鹿島神社の神主、尾張権の守伸親と云う人が、鹿島明神の御簾を揚げて見たれば、我が祖より申し受けたまいた、釋信海と云う法名があったに驚き、その不思議をみて稲田へ参り、弟の信蔵は御弟子となり、順信房と下された。いまの鳥巣の無量寿寺の開基となられた。

下野の高田御坊

それからまた不思議なことは、五十三の御年正月八日の晩、下野国へ御教化にお出でなされ、日が暮れてから芳賀郡（よしがこおり）の柳島と云う所に、田の中に一つの石があり余り寒さも厳しく、その石の上にて一夜を明かさせられたれば、七つのころ一人の童子が「白鷺池（はくろち）の汀（みぎわ）には一夜に柳の枝青く、般若岩（がん）の南には仏生国の種子生ず」とうたい、聖人の御傍へ来たりて、これは天竺の白鷺池の柳、これは仏生国の菩提樹。明師これを植えさせたまいて、ここに大伽藍を建立したまえて、忽ち云いすてて天へ登られた。その童子と云うは明けの明星さまぢや。ときにその柳をかの御安座の石の右に植え、また菩提樹の種を左へ植えたまうに、不思議を見ておる内に、五丈ばかりの大木となり、その辺がすべて深田ぢやに、メキメキと震動して大地が持ち上がり、一丈余りも地形が高うなりた。その所を高田と云う。

即ちその頃の地頭は、平岡の城主大内の国時と云うたが、この国時の舎弟が国分に参り、不思議を感じて、御弟子となられたが真仏上人ぢや。サテかの不思議より、聖人の御徳を慕い、大内の国時を始め、一族の大名御帰依申し、大伽藍を建立せられた。この事を天子八十五代の帝、後堀河院さまへ奏聞し、高田専修阿弥陀寺と云う勅額を下された。トキニ聖人と真仏の夢に善光寺の如来顕れたまいて、我が身を分けて与うなり、早く迎え奉るべしと、それから聖人ははるばると、かの真仏上人その外の御弟子をつれ、善光寺へ御参詣なされ、一光三尊の弥陀を御感得なされたところ。

かかる霊場の高田ゆえに、上人より七代目、真念上人のとき下野の国より、伊勢の国へお引き取りなされ、下野の下地の名を取つて、今伊勢に高田門跡と云うが、即ちこれである。

ときに我が祖の御高德を誇る奴が、御開山に対し悪う云うと買主（まいす）ぢや。平言葉で云うと山伏ぢや。そのように大蛇を濟度してみせたり、また鹿島さまに帰依させたり、幽霊を濟度させてみせたり、御洗足の跡が金銭のたちに、光がさして人に帰依させたり、そんなこととして人にくい付かすは、山伏ぢやないかと云うものあれども、さればそこが感応と云うもので、あなたはお徳をかくそうかくそうとなされても、「桃李もの言わず自ずから蹊（みち）を爲す」で、桜や桃が人を傍へ寄せようの、人の心を面白がらそうとて咲きはせぬけれども、自然と花の徳を慕うて、人が傍へよるのぢや。御開山も帰依さそうの、エライものぢやと云われようと云う名利はなけれども、自然とあなたのお徳を慕うて、人が帰依するのぢや。その御徳を草木まで感応して、一夜の間に柳が大木になった。また菩提樹とて葉のうらに、実のなる様な珍しい天竺の木が、これも一夜に大木となる。草木さえその徳を慕う。今日の我々信を取らずば、実に木石にことならんものか。愧（は）ずべし、悼（いた）むべし。

第三段 弁円教化の段

これは播磨の公（きみ）弁円教化の段。上の段は順機、今は逆機にして、即ち『御伝文』に「凡そ疑謗の輩は少なく、信順のやからは多し」とある。上の段は信順のやからにして、稲田には稲麻竹葦（とうまちく）の御繁昌。然るに今疑謗とは疑いそしる輩ぢや。ようようここでは弁円とその他の徒党十七人ばかりぢや。

ナンでも御開山が稲田十年の御逗留ゆえ、国中をひとなで一向専修の念仏へ、ナデこませられたら第一山伏が、おのれの職分にかかわる。誰も現世の祈禱を頼むものなくば、札守（ふだまもり）を誰も受けぬこれでは、第一鼻の下の峠が越されぬ。サアそれからあなたを殺そうと云う相談ぢや。

この様なことは世間になんばもあるものぢや。「春風庭前の樹を剪（さ）き、夜雨儼（ひそ）かに石上の苔を穿つ」と、木も高うのびると風のあたりが強い。人も秀づると目にたつものぢや。そこで自ずと人の偏執ぢや。「道ばたのむくげは馬に喰われけり」と、秀でものは瑕つけられる。

山伏に二派ある事

全体この山伏は岩屋にこもり、孔雀明王の呪を持ち、五色の雲に乗じて諸方の名山に登り、世間に仇となる鬼神をかりつかい、後に大峰山上をひらく。その後大峰の七ツ池という淵に、大蛇が棲んで山入りがならぬ。所が醍醐の聖

宝僧正と云うが退治せられた。この聖宝は讃州丸亀の前の沙弥島の漁師の子ぢや。今その所を切りあげの峯と云う。山上に参られた衆は知りて居る。

また山伏に二派ありて、有髪の山伏は本山派と云うて、天台宗聖護院の支配にして、役（えんの）行者を開基とする。また僧形の山伏は当山派とて真言宗にして醍醐の三宝院の支配。聖宝僧正を開基とすることぢや。今は一人の僧ありて山伏と云々とあれば、当山派の山伏とみえるなり。

不動は十界を表す

トキニ山伏と云うものは芝居でも、山伏が出てくる所は恐ろしいなりぢや。その筈ぢや、もと不動様を写したもので。己身（こしん）の十界を表す」とて後ろの火炎は地獄。お色の黒きは餓鬼。お口からの炎は畜生。お顔の恐ろしいは修羅。お首の瓔珞は天人。手に持つ智慧の利剣は菩薩界。蓮華は仏界。左の手に縄を持つて御座るは人間界を縛る。善は助け悪逆な者は、この綱で括りあげて退治しようと云う、その不動のお姿を写したのが山伏ぢや。故に鯉節はうまいが山伏の姿は怖い。

播磨の弁円発心

トキニ二人の山伏は、一人は天引辺（あまひきべ）の小川房。一人は小山寺の吉祥房と古来云い伝える。長刀（なぎなた）の鞘ははずして待ち伏せの体。すべて十八人の徒党ぢや。また一人かけはなれてあるは、まだ他に徒党の人数があることを知らず。

この門内に打ち向かうて走る山伏が、まさしく那河（なか）の郡塔野尾村の住人、豊前（ぶぜん）の僧都と云いて山伏の頭分で、これが播磨の公弁円ぢや。この山伏がこの板敷山から、稲田の御庵室へ手向かいしたは二段目の趣きぢや。

それまでに彼等が家の秘法に、人を呪い殺す調伏の法がある。御開山の人形藁を拵え、目も鼻も釘をさし、それを大地へ埋め、そして「農莫三曼陀（のうまくさんまんだ）」を唱えて呪い殺すつもりなれども、さすがに聖人は大権（だいごん）の聖者ぢや。「蚊虻（ぶんぼう）鉄牛を囓む」と云う有様で、蚊や虻（はい）が鉄で拵えた牛をかむ如く、なかなか歯ふじにたたぬ。いささか障りがない。

ついでに御開山が、稲田より鹿島滑方（なめかた）辺へお出には、この板敷山を往来なされるで、この様に待ち伏せして殺そうと出かけたのぢや。所が前にあるかと進めば後ろに念仏の声。右にありと馳せ付くれば、早や左に御念仏の声がする。「如何にも合点のゆかぬ坊主ぢや。だまし打ちがよい。今から庵室へいで、かの親鸞に手向かい、刺し違ひになりて死ぬるか、さなくば一袈裟に切るか、もしも大勢の弟子どもが取り巻きたれば、門外よりドット十八人が一同に馳せつき、サアその時はなで切りにしてくれんと、今大勢十八人が一同に往きては、定めて裏の方へ逃げ込むも知れぬ。マアおれが一人行つて、何とのお目にかろう」と案内をして、親鸞落ち着き顔で出たれば、「タッタ一討ちに本望、何事もおれが胸にある」と、弁円一人がこの通り門内に山伏の装束、甲鎧（よろい）を帶し山刀のねたばを合わせ、弓矢を携え案内を請えば、多くの御弟子達は驚いたが、御開山は「左右なく出であひたまひけり」とある。この所が有り難い。多くの御弟子衆が「もしもし山伏が、あなたを殺しに参りました。マアマア私どもが相手になります。あなたはお隠れなさいませ」と云えど、「待ち設けたわい」と他の御弟子の止むるを振り切つて御一人お出ましなされた処。

アノ山伏はいかがしけん。聖人を一目拝むと、害心たちまちに消滅して、あまつさえ後悔の涙禁じがたく、滅多無性に身の毛いよだち、有り難くなりて来た。その筈ぢや山伏のことぢやによりて人相をよく見る。御開山の御面体一目拝んだれば、実に無相好の凡体なれども、三十二相のよそおいが一時に顕れさせられたが、かの山伏が傲慢の心中も、クニヤクニヤとトコロテンのようになりた。そこで喜ばずにいられぬ。大地にひれ伏しワアワアと泣き出す。それから縁の端に上がり、刀杖をすて頭巾を取り、サッパリと弓も矢も捨ててしまい、山刀も庭前に投げ捨て、この通りに懺悔の体。すぐに御弟子となられ、法名を明法房と賜りた。そこで「日来（ひごろ）の宿鬱を述すといへども」とありて、「サテサテかかる目出度き聖人様を、妬み殺そうとつけ狙いしことのあさましさや」と、サメザメと泣きたが、「聖人またおどろける色なし」と、御開山は悪人になれて御座る故に、ビクとも驚かせなんだとある。

京の大仏の北薬缶町では、コチコチと薬缶を拵える音を、聞き慣れておれば耳には立たぬ。このコチコチとなる中に、子がそえ乳なしに寝る。正月三が日は休みで叩かぬ故に子が寝ぬ。そこで枕元で金盞（かなだら）を叩くと云

うことぢや。薬缶町のコチコチの音は、聞き慣れておれば何ともない如く、御開山は悪人に慣れて御座る故に、あなたを呪いました、殺そうとしましたと云うても、根から驚かせられぬ。強い者をこかすが相撲の大関。ソウ云う者があればこそ、弥陀本願の手柄が顛れるぞと、懺悔ばなしを御聞きなされて、お喜びなされたとおる。

何と今の弁円は男ぢや。有りの儘を懺悔せられたが、今時はその当場を言い抜けんとする人のみなり。誠に勿体なき次第なり。別して手次の前でブツブツ蚊の泣く様に、御安心を云いならうて、言うをよいにして居る。大相撲取るも地取りは稽古ぢや。負けても負けにはならぬ。兎角に四本柱の中が大事ぢや。法席では地取りぢや。不調法でも大事ない。安心・報謝・師徳・法度の、四本柱の中で足とられまいぞや。無常の風の土俵入り、臨終の顔割り踏みかぶるまいぞや。「阿弥陀仏の四十八手を聞く時は人にはまけて鬼にまけぬぞ」。サア御化導頂くが地取りぢや。客僧達に叱られても、功経た同行にお前違うと投げられても辛抱せよ。今の聴聞は地取りぢや。タノム一念の腰さえさすれば、臨終除夜の鬼には負けぬぞや。取りて抑えてお浄土へ参るぞや。

張り子達磨の喩

ある人の狂歌に「歳よれば張り子達磨にさもにたり口はかろくて尻の重さよ」とあるが、世に張り子達磨と云うがあるが、これは小児の手遊びのおもちゃぢや。何処へ投げても放つてもきつと座る。尻に土が入れてあるから、頭が軽くて尻が重い。年寄るとその通り、口が軽くなりて尻が重い。御法座参りは口より尻が軽うなくてはならぬぞや話しが少し横道に入りた。

弁円に御化導

さてその時弁円への御化導が、化土巻にある『大集月蔵経』忍辱品第十六に云く「占相を離れて、正見を修習せしめ、決定して深く罪福の因縁を信ずべし」。一念発起の信心を得、仏の正覚に腰をすえるなれば禍はない。禍がなければ占いも祈祷もいらぬ。孔子でさえ「其の徳を恒にせざれば或いは之が辱めを承く」と云い、或いは「占わざるのみ」と仰せられた。孝悌忠臣の誠を恒に守りさえすれば、占いも祈祷もいらぬ。

闇夜ぢやさかい提灯がいる。白昼に提灯ともす阿呆はない。信心ないわろは、無宿善ぢや。胸の内は真の闇であるから、占いの人相のと云う火の世話がいる。信心了解すれば、弥陀の光明摂取の白昼ぢや。祈祷の提灯は入らぬぞや。それなれば弥陀の本願を信ずる人は、サッパリ祈祷はせぬか。目が悪い故、耳が聞こえぬ故、歯がウズク故、九頭竜権現へ梨子立ちましようの、そんな僅かな目や鼻や口中の歯位の祈祷ぢやない。未来地獄をのがれて極楽へ参る祈祷ぢや。三千世界の御祈祷の先生さまぢや。「阿弥陀如来来化して 息災延命のためにとて 金光明の寿量品 ときおきたまへるみのりなり」。実に息災とは禍を除くこと。誠に禍も十悪五逆五障三従八万の煩惱の禍。それをば一時に消滅と除く。未来は無量寿のお証り。長命させたいとあなたが御祈祷。法蔵菩薩の御祈祷故に、よくきいたのぢや。よつて『大経』には「我、無量劫において、大施主となりて、普くもろもろの貧苦を濟わずは、誓う正覚を成らし」とありて、貧乏の根絶をさせて下さるる、御仏は弥陀ぢや。どんな貧乏かと思えば、娑婆はみな貧乏ぢや。天子も將軍もいかに広い家に居りても、体を置くは畳一枚で余る。七珍の膳がありても食べるものは、口にかなうもの二三種ばかりより、食べられぬではないか。これが性得の貧乏ぢや。

五人歳暮の狂歌

ここに面白い話がある。ある年の節季に、大工と左官と医者と儒者と神道者と、五人寄りて飲みながら、大工がまず始めに一首、「鑿（のみ）すぎて払いすみかねのこぎりの目もあてられぬ年の暮かな」とあれば、左官「ぬらくらとへらつかふても暮のかり下地あるのに上ぬりをする」と詠んだ。次に医者は「風よりも払いを何と正気さん煎じつまりて頭痛する暮」と云えば、儒者は「この冬は論語道断孔子でも心老子でも孟子よふなし」と詠んだ。神道者は「節季をば見すて伊勢へ年参りかへられし後お払ひがある」と。しかれどもそれはこの世一旦の貧乏。五十貫目の富取ればのされる。千貫目百貫目の富でも、逃れられぬは地獄の貧乏。それを除いてやろうと仰せらるるは、阿弥陀如来一仏ぢや。

よつてこの山伏も目が利いておる。迷いの娑婆を離れて極楽へ参る。もとの農莫三曼陀の祈祷も祈願もやめて、南無阿弥陀仏に成つたぞや。よつてこの通りに刀杖を捨て頭巾を取り、柿の衣をツイニ黒の衣に改めて、仏教に帰依せ

られた。その山伏の懐剣と八角の金剛杖は、稲田の西念寺にある。笈（おい）は江戸報恩寺、頭巾と柿の衣と袈裟とは、松原上宮寺にある。

明法房の喜び

さて弁円は廻心懺悔して、御弟子となりて以来は、常に聖人に御随順もうし、日々御教化を蒙り、初めの害相に引きかえて、柔軟慈悲の姿となり、「あだとなる弓矢も今は引きかへて西へあるさの山の端の月」と詠んだ。その廻心の年、御開山は四十九歳。明法房は三十二歳であつたとある。御開山はこの弁円に對し、こなたのこの度の廻心が、千万人の手本になると、大きにお喜びあそばされ、十字名号並びに御和讃までおしたため下された。

またある冬の頃、聖人鹿島滑方辺、処々毎日御教化ゆえ、毎々この板敷山を御往来なさるる。ある日明法房は御庵室に一人留守なされ、お帰りの遅さにお迎えに出る。峰と谷との分かれ道、この処で待つて居さえすれば、逢わぬと云うことはない。そのときに前後の山をながめ、アア思えば思えば去年はこの辺で、十八人徒党してここに待ち伏せし、長刀の鞘はずし、あなたをば殺害せんと待つて居たが、今年は打つて變わりて、今日も御帰りの遅いはいかならんと、御身の上が案じられ待つて居る。待つは同じ道理なれども、待つ我が心は火と水との違い。變われば變わる我が心とて、「法（のり）の師を迎へてここにあし引の山は年にもかはらざりしに」また「山も山道も昔にかわらねどかはりはてたる我こころかな」と詠まれた。アアすぎし昔を思えば、この山で聖人を害したてまつらんと、待ち伏せしたるこの道は、昔も今も變わらねど、變わりはてたる我が心。昔は地獄行きの種つくるこの手足。今は極樂淨土の仲間入り。昔誹謗（そしり）しこの口も、今は御恩報じの御名称え。「超世の悲願ききしより われらは生死の凡夫かは 有漏の穢身はかはらねど 心は淨土にすみあそぶ」と、御喜びなされた。

七百年昔の弁円の事ではない。今日この席の各々方も、はやく自力疑心をひるがえして、かかる身の上とならねばならぬ。「みな人の播磨の公はまなべども、明法房を習う人なし」で、兎角勝手のよい方は習い、少し耳の痛い方は、耳に詰めて聞かんからこまる。

上宮寺の開基

その後明法房は、常陸国久慈郡松原において、一字を建立し上宮寺と号し、御恩報謝のため弘法化益におこたりなかりしが、御開山聖人御帰洛の後は、檜原（ならはら）という所に隱居して、称名相続に怠りなく、ついに建長三年十月十三日行年六十八歳を一期として、目出度く往生の素懷を遂げられたとある。即ち二十四輩の内大十九番、上宮寺の開基は、この明法房である。

北陸同行への御消息

そして御開山聖人より、さきに往生せられた故、建長四年二月二十四日、北陸へつかわさるる御消息に、「なにごとよりも、明法の御坊の、往生の本意とげておわしましそうろうこそ、常陸の国中のこれにこころざしおわしますひとびとの御ために、めでたきことにてそうらえ。往生は、ともかくも凡夫のはからいにてすべきことにてもうらわず。めでたき智者も、はからうべきことにもそうらわず。大小の聖人だにも、とかくはからわで、ただ願力にまかせてこそ、おわしますことにてはそうろうなれ。まして、おのおのようにおわしますひとびとは、ただ、このちかいありときき、南無阿弥陀仏にまいらせんことこそ、ありがたく、めでたくそうろう御果報にてはそうろうなれ。おのおの、とかくはからわせたまうこと、ゆめゆめそうろうべからず。さきにくだしまいらせそうらいし、『唯信鈔』・『後世物語』・『自力他力』なんどの文どもにて、御覽そうろうべし。それこそ、この世にとりては、よきひとびとにてもおわします。また、すでに往生をしておわしますひとびとにてそうらえば、その文どもにかかれてそうろうには、なにごとともにごとくも、すぐべくもそうらわず。法然聖人の御おしえを、よくよく御こころえたるひとびとにておわしましそうらいき。さればこそ、往生もめでたくおわしましそうらえ。おおかたは、としごろ念仏もうしあわせたまうひとびとのなかに、ひとえにわがおもうさまなることをのみ、もうしあわれてそうろうひとびともそうらいき。いまもさこそそうろうらめとおぼえそうろう。明法坊なんどの往生しておわしますも、もとは不思議のひがごとをおもいなんどしたるころをも、おもいかえしなんどしてこそそうらいしか。われ往生すべければとて、すまじきことをもし、おもうまじきことをいいなんどすることはあるべくもそうらわず。食欲の煩惱にくるわされて、欲もおこり、瞋恚の煩惱にくるわされて、ねたむべきもなき因果をもやぶるころもおこり、愚痴の煩惱にまど

わされて、おもうまじきことなんどもおこるにてこそそうらえ。めでたき仏の御ちかいのあればとて、わざとすまじきことどもをもし、おもうまじきことどもをおもいなんどせば、よくよく、この世のいとわしからず、身のわるきことをもおもいもしらぬにてそうらえば、念仏にこころざしもなく、仏の御ちかいにもこころざしのおわしまさぬにてそうらえば、念仏せさせたまうことも、その御こころざしにては、順次の往生もかたくやそうろうべからん。(乃至) 明法御坊の往生のこと、おどろきもうすべきにはあらねども、かえすがえすうれしうそうろう。鹿島・行方・奥郡、かようの往生ねがわせたまうひとびとの、みな御よろこびにてそうろう。(乃至) 煩惱具足の身なれば、こころにもまかせ、身にもすまじきことをもゆるし、口にもいうまじきことをもゆるし、こころにもおもうまじきことをもゆるして、いかにもこころのままにあるべしともうしおうてそうろうらんこそ、かえすがえす不便におぼえそうらえ。えいもさめぬさきに、なおさをすすめ、毒もきえやらぬものに、いよいよ毒をすすめんがごとし。くすりあり毒をこのめ、とそうろうらんことは、あるべくもそうらわずとぞおぼえそうろう。」云々とおつかわしになりてある。

第四段 権現崇敬の段

前段弁円教化の段では、御開山の御弘めなさるる、専修念仏の御法義は、益々繁昌して、いかな仏敵法敵の弁円でさえも、遂に傲慢邪見の悪心をひるがえて、無二の信者となりたは、誠に本願の不思議ぢやと、御知らせくだされた。しかるにこの御法義は、神明の御意に契うか契わぬかと、疑うものがありてはならぬ故、この段に於て『御伝文』の通り、仏法弘通は神慮に叶うことを示す。

御上洛の異説

ときに貞永元年壬辰御年六十歳にして、「聖人は関東の境を出でて、花城の路にをもむきましましけり」とあれども、康楽寺の伝並びに高田伝には、六十二歳がの春、下総から武蔵の浅部の一ノ谷、善福寺了海上人の方へ、御越しにならせられたとある。

これは六十歳の御時、既に御上洛を思い立ちなされたれども、何分長々の御教誨地の事なれば、益々御法義の退転なき様あちらこちらと、それぞれ御弟子衆へ囑託せねばならぬ。すなわち二十四人の御門弟を撰び、これを二十四輩となされたもこの時分である。

そこで御上洛の道中が長い故、一は御上洛の初年を取り一は後年を取る故、関東の境を出でて、花城の路におもむきたまうと云うに、二年も相違する様になるのぢや。

魚食につき開寿丸の間

さて御上洛の道すがら鎌倉に御着きの頃は、従四位陸奥守北条義時の子息、泰時が政徳を専らにせられたる頃にて、一切経を書写せられ、校合の爲にとて諸宗の智者学者の人を、屈請せらるる時なりしが、事の由縁にて聖人を尋ね出して、校合の席へ請じ、御弟子蓮位、性信、慈信、顕智、順信、唯信、尊信、善性と共に迎え奉りた。聖人は一切経校合の人数に加わりて、副將軍にも昵近(じつきん)なされたが、ある時將軍家より酒盛りあらせられたことがある。盃酌のみぎりに「聖人別して勇猛精進の僧の威儀を、ただしくしますことなけれ。ただ世俗の入道俗人等に、おなじき御振る舞いなり。よつて魚鳥の肉味等をも、きこしめさるること御はばかりなし」とあれば、俗人と同じ様に魚鳥の肉を、御上がりなされたと見える。その時鱠(なます)をきこしめさるるに、袈裟を御着用なされた儘に、御あがりなされたれば、泰時の孫に当たる西明寺時頼公、その頃はまだ開寿丸と称えて、僅かに九歳の御歳なりしが、聖人に近く寄りて、御耳辺にて密かに語らるるには、「アノ入道どもは肉食をするときには、袈裟を脱ぎて食するに、貴房はいかなれば、袈裟を着用の儘にて、きこしめさるるぞ」と問い奉りたれば、聖人の仰せには、「アノ入道達は常にかようの、御馳走も戴くことなれば、これを食するときは、袈裟を脱ぐべきことと、覚悟なされて御座るが、拙僧に於てはかようの、御馳走はたまさかなれば、ツイ忘却したので御座る」と仰せられたが、またある時やはり御饗応の砌に、また袈裟を御着服ながら、御魚食あらせられたれば、開寿丸殿はさきの如く尋ね上げたるに、聖人はま

た御忘却と仰せられた。開寿殿の仰せらるるには、「サノミ御廃忘せらるる様なことは御座りますまい。何か御所存のあることならんとは存ずれども、幼少のものにてその深義をわきまえざることとて、御語りもこれなき残念さよ、何とぞ実義を述べられたし」と申し上げたれば、聖人の仰せらるるには、「人身を受けて生命を亡ぼし、肉味を食するは然るべからざることにて、如来の制誡にもしばしば、戒められたるなれども、今時末法濁世の衆生に於ては、無戒のもののみなれば、持つものもなければ、破らんものもなく、剃髪染衣の姿をすれども、心は世俗の群類に異ならねば、これを食するにはせめては、この生類をして解脱せしむるの、縁を与えんと存じ、サテハ三世諸仏解脱幢相の、靈服を着用しながら、これを食したるなれ。誠に我は名字を釋氏にかれども、心は俗塵にそみて智なく徳なく、有情利益はさらになれども、袈裟の徳用によりて、済生利物の願念をや果たすとの所存で御座る」と仰せられたことは、『口伝鈔』にも見えてある。

箱根三所権現の本地

その後鎌倉を出立なされ、「花城の路におもむかんとて」と仰せられ、京都をさして上られ、文暦元年八月十六日に（聖人六十二歳）江津の真楽寺を、昼後に御立ちなされ、小田原にてはや晩陰に及びたが、それより一里登ると湯本橋ぢや。この橋より右にとると、本箱根通りと云う、それより湯坂峠、その峠を登りつめると駒ヶ嶺、その駒ヶ嶺をおりる処が、芦川の座主町。今でさえ榎木（かたき）坂、猿すべりなど云う難所がある。「孤峯風冷ややかにして手に刀利の雲を掴むと疑う。幽溪水深く風輪の底を踏むが如し」の句の如く、まことに難所であるが、聖人は御弟子衆と共に、夜半にこの難所を越えさせられた。「夜をとへばことぞともなく明けにけりいつらは秋の流してふよぞ」とある如く、何のかのと云う間に程なく、箱根の社にゆきかかりたもうた。

サテこの箱根三所権現と云うは、神社考によれば、本社は彦火々出見（ひこほほでみ）の尊とあれば、地神五代の内第四代目に、当たらせらるる御方ぢやが、人皇四十六代孝謙天皇の、天平宝字年中に出現せられて、この地に祭られ社領二百石とある。

ときになにゆえに権現様が、御開山を尊敬（そんきょう）なさるかというに、これはこうなければならぬ訳がある。まず『諸神本懷集』によると、三所権現の法体は、三世の覺母文殊菩薩。俗体は当来の導師弥勒菩薩。女体は施無畏の觀音様ぢやとある。この法体と本地文殊菩薩と俗体の本地弥勒菩薩とは、かねがね聴聞の通り、三部經御演説の時、弥陀の本願を信じて、ともに極楽浄土に往生なされた。殊に弥勒菩薩は当来の導師とて、釈迦如来様より弥陀の本願、一念帰命の南無阿弥陀仏の御法を、弘通せよと御附屬なされた御方。また觀音様は申すまでもなく弥陀の脇士。して見ればみな極楽界中より御出現なされた、弥陀の本願念仏を御信仰の菩薩でありて、本師弥陀如来の御弟子衆ぢや。

そこでいま本師弥陀の化身たる、御開山聖人、長々関東北国を御化導なされ、辺鄙田舎の人々の、仏とも法とも知らぬものを、種々様々の御方便を以て、御法義に引き入れたまい、ついに功なり名遂げて身退くと、仏法弘通の御本懷御成就なされ、衆生利益の御宿念御満足あらせられ、関東を辞して都へお上りの道中ゆえ、本師聖人の御苦勞の程を思し召し、社人に告げて、「ただ今われ尊敬いたすべき客人、この路をすぎたもうべき事あり。かならず慇懃の忠節を抽んで、殊に丁寧の饗応を儲くべし」と仰せつけられたのぢや。そこで今祖師聖人の御通りは、丁度將軍御通行の砌りに、歴々の諸大名が丁寧に、饗応なさると同じ様なものぢや。さすれば仏法弘通は、この箱根権現の神慮に叶うは申すまでもなく、一切の神明の御本懷である。

まくわ瓜の狂歌譬喩

芸州広島の日田市に貞玉と云う人が、まくわ瓜の画を書いて、狂歌を以て讃をした。「神の地に仏のたねをまくわ瓜二つにわれど一つ味わい」と詠んだ。この歌のこころは神の地とは、この日本神国のことぢや。仏のたねとは、衆生が仏になるたねの、南無阿弥陀仏の仏法のことぢや。この日本の神の地へ、仏のたねの仏法を蒔いたれば、一つの真桑瓜が出来た。そのまくわ瓜を二つに割ったけれども、もとが一つの瓜なれば、味わいは少しも変わりはない。この日本の神国へ、仏の因（たね）となる仏法を、時き弘めようと思し召して、神と仏と二つに御分かれなされ、仏法嫌いの邪見のものは、現世の事から引き寄せて、末は御法義に引き入れたいの御慈悲から、かりに一切の神明と示現なされたれども、元が浄土の如来様。宿善の時節到来して、難行難修の自力疑心をふりすて、弥陀をたのみたてまつり、往生は一定御助け治定と喜ぶ処では、神と仏と分けはせぬ。ただかかるものをも御助けと、御法の味わい身にしみて、喜ぶより他はないほどに、宿善深厚の御互いは、唯一心一向に弥陀如来の御勅命に、信順して御恩の称名

怠りなきが肝要。

箱根御通行

聖人様が松の元に、立たせられて御座るに就いても訳のあること。松の元と云えば、来て見よと云う通り言葉になる。その訳いかんと云うに、三輪明神化女となりて、男の所へ通いたまうとき、君の住処はと問えば、「恋しくばたづね来て見よ我が宿は三輪の山本松たてるかと」と、御詠みなされたのであれば、疑いもなくその心を顕させられたものである。

サテこれなる清水（せいすい）は、湖水より流れ出る清水ぢや。箱根山は相模と伊豆との間にありて、山上に湖水がある。これを国境となす。古歌に「玉くしげ箱根の雲井かくれなしあけてもさむく月の水海」と詠んである。即ちこの湖水から流れ出る水ぢや。

この聖教を負われたるは下妻蓮位房。御流罪のときも御聖教を負い、聖人の御供せられたが、その後常に随順して、今もまた御聖教を負うて、御供せらるるを示す。一人は顕智房なり。初め性信房も共に御供して、箱根の麓まで来たられしも、関東の御法義引き立ての為、御開山と別れ後へ差し返された。

飯沼天神の夢想

さてこの性信房は、元は常州小島の郡司武弘が一族。鹿島の郡司五郎為久と云うて、至りて剛気な郷土なり。十七歳の時熊野へ参詣の戻りがけ、法然聖人の御教化を聞いて、御弟子となりたが、歳が未だ若きゆえに、我が祖へ譲りたまひ、これより武弘も勸化を蒙り、信者となりたが、先だつても弁ずる通り、この性信房と武弘との二人は、聖人四十二歳の御ときに、御迎いにとて京都へ上られた。トキニこの性信房。後に下総の豊田の庄曾根は仏法有縁の地なればとて、大いに仏法弘通なされた。それは箱根別れの後のことなり。

サテその横曾根飯沼の天神、老翁と変化して参詣したもうたとある。それらの因縁にて一字を建立せられた。天福元年正月十日の夜、飯沼の天神彌宜の夢想に顕れ、青陽（しょうがづ）の嘉儀、御手洗（ちようず）の池の鯉二尾を、性信上人の御前にそなえよと仰せられた。その儀式は今に絶えせず、存ずると云うことぢや。

サテそれから江戸へ持ち来たり、浅草の高尾山謝徳院報恩寺の祖師へ差し上げ、正月二十八日の御講の後に料理せらるる。そのかわり横曾根の、性信上人の御前に供えた、鏡餅二重は飯沼の天神へ送ることぢや。かかることを思えば、肉食妻帯しながら念仏することは、神の御ところにも叶うなり。ときにこの性信房がことは、正像末和讃見聞に、「貞永の頃帰洛につく。豆州箱根着到に、師忽ち顧みて云く、我西洛に至るたれが法炬を東海の群萌に耀かし閭宅を暁らさん。願わくば汝東海に留まりて普く東方を済へよ」とありて、この箱根山より関東へ帰られたとある。

箱根山の險阻にかかりつつ、遙かに行客（こうかく）の跡をおくりて、漸く人屋の樞（とぼそ）に近づくに、夜もすでに暁更（きょうこう）に及んで、月もはや孤嶺にかたぶきぬれば、その時の御詠に「ましてしばしかたむく月にも」とはん我身も西へいそぐものかは」と御詠みなされた。それより社殿に詣で社廟（しゃごん）にて、尊重丁寧なる饗応を受けさせられた。

瀬踏の本尊

ついに箱根を下り急ぎ豆州を過ぎ、駿河の藤枝に御移りなされ、かの熊谷直実入道が、念仏を質に入れて銭をかられたと云う古跡をすぎ、阿部川へ御かかりなされたが、丁度大洪水にて渡られず、御難儀に思し召す所に、一人の老僧浅瀬を案内して、無難に渡らせられたが、件の老僧は忽ち負の内に入りたまうと見れば、これは常陸の霞ヶ浦にて、御感得あらせられた尊像なりしが、これより瀬踏の弥陀と云う。今錦織寺の本尊とす。

遠州桜ヶ池

それより遠州の桑田の専心房が方へ御立ち寄りなされた。これまで一日も早く京へところざしたまえども、かかる有縁の地を見捨てるも本意ならずと、専心房が方にて越年したまう。その間に笠原の庄、桜ヶ池も見物したもうたとある。

この桜ヶ池と云うは、叡山西塔の北谷の宝持房、肥後の阿闍梨源光は、名字観行の位では隔生即忘する間、蛇身を

受け弥勒の出世に、遭わばやと、願わさせられた。智者なればこそ生死の離れ難きを知り、何とぞ弥勒の出世に遇わんことを願いたまえども、「若し衆生有り此の経を聞く者、無上道に於て不退転に住すること」を、知りたまわざることの残念やと御歎きなされた。

翌年文暦二年専信房の方を御立ちなされ、遠州の浜松へ越したまうとき、三河の碧海（あおうみ）郡矢矧の柳堂にて、七日の御説法に貴賤群集、門前市となした。焼栗の御旧跡もこのときのこと。それより三河の安静の城下円善房が方にて御教化。これまたすこぶる御繁昌。

故郷へ錦をかざれ

それより名古屋から美濃路へ越させらるるに、道々の御教化に御隙どり、四月二十三日江州木部村に、天安堂として伝教大師が彫刻の、霊験あらたかなる毘沙門堂へ、御参詣あそばされた。庵主と地頭石畠民部の大輔氏連、夢想を得て聖人を請せられた。

サテ霞ヶ浦の尊像を真ん中に安置し、負いを傍に置き左に聖人の像を願いて安置し奉りたが、この時聖人の像を能事満足の御影と云う。秋七月まで御逗留なされたるに、六日の夜寅の時堂内に天女顯れ、錦を織ること横三尺竪一丈五尺。それをかの満足の御影の前に備えたが、その事天聴に達し八月二日、勅使権中納言頼資卿をもて、天覧にそなえるように、詔がありしによつて、聖人この錦を以て御帰京なされ、ただちに御参内せられた。実に天人さえも供養する念仏の大法。これ偏えに親鸞の徳行の顯れなりとて、天人護法錦織之寺と、勅額を下された。古歌に「紅葉葉をわけつつ行けば錦きて里にかへると人の見るらん」とあれども、聖人は天女の織られた、錦を以て御帰洛なされたところあるぞや。

唐の朱賈臣は山中の芝刈り親父ぢや。芝刈りながらも書物を懐に入れて離さぬ。見る人がこれを止めたれど、なかなかしばらくの間も離さんだが、後には上呼び出され、学問が能く出来るとて、その所の奉行に成りたとある。また齊藤別当実盛が、篠原の合戦のとき、三位唯盛卿より、赤地の錦のひだたれを拝領し着けられたも、越前は故郷なれば、錦をかざる心ぢや。けれども三国に珍しき、天人の織りた錦をば、天子へ天覧にそなえ、天井ぬけの錦をかざられたは、一宗開闢の宗祖の飾る錦はまた格別なものなり。

第五段 平太郎教化の段

前段では念仏弘通の祖師聖人は、本師法皇の弥陀の化身であるから、箱根権現も尊敬なされたことを御示し、この段ではその祖師聖人様の御教化を蒙り、念仏喜ぶ行者も、また神明の御敬いを蒙ることを示す。

さて前段に述べた如く、祖師聖人は御帰洛なされ、天人の織りた錦を天覧にそなえ、御参内ありて堂上の譽れ、この上もない御取り沙汰なれども、御隠遁の志あれば、それを功にも思し召さず、伝教弘法の如く、いかなる大伽藍をも、建立すべき御身の上なれども、さすれば他宗の妬みもいかがと思し召され「扶風馮翊ところどころに移住したまいき」とありて、扶風というは東山、馮翊というは加茂川以西の土地など、何処とも定まりたる住処もなく移住したまわれたが、その頃九条道家卿は兼実公の御孫なれば、別して御遺言もあることとて、御開山を御敬いあらせられた故、或いは小松谷法性寺の小御堂、または岡崎などと御心任せに御住みなされた。その内おもに御座なされたは花園の御殿とて今万寿寺通り西洞院の東へ入る、北の角に浄土宗の大泉寺あれが、昔は松原通りまでぬけてありて、大きな九条殿下の御下屋敷ぢや。これに御住まいあらせられた。これを御伝文に「五条西洞院わたり、一つの勝地なりとて、しばらく居をしめたまう」とある。

さて元祖の御墓へ御参詣あり、過ぎし昔のありさま二十八年にもなれば、昔の友は皆故人となり見知る人も希なり。まことに「年々歳々花相似たり。歳々年々人同じからず」との、偽りなきを思い出しては、そぞろに涙の種となりたであろう。また吉水へ行つて御覧なされば、庭上に草生い茂り、『選択集』御伝授の御座敷も軒傾き、信行両座の御広間も、礎ばかりの有様は、「月やあらぬすぎしむかしの春ならで我身ひとつはもとの身にして」と云う、景平（かげひら）卿の歌の如く、ただ往事を思うて称名したまうのみなりしならん。

サテ『御伝文』に「五条西洞院わたり、一つの勝地なりとて、しばらく居をしめたまう」とあるが、一の不審である。「長安・洛陽の栖も跡をとどむるに嬾し」と仰せられた聖人様が、かかる市中を一つの勝地とは、御隠遁の御身には似合わぬと云うに、サレバ在家のものを化導なさるるには、勝手がよい土地ぢやからのことである。「住みけむ春は吉野の花のもと秋は嵯峨野の花の下露」と、浮世の隠居でさえ、時を計り所を考えて住まいをする。況や興隆仏法の御開山は衆生利益の便利を考えて、深山幽谷の閑静なる所よりも、人跡しげき市中をば、勝地なりと喜びたもうた。

如来遊化に二所あり

善導大師の序分義に、「如来遊化の処を明かす即ち二有り。一に王宮聚楽に遊ぶ、在俗の衆を化せんが為。二に耆闍崛山等の処に遊ぶ、出家の衆を化せんが為に」とある如く、釈迦如来も靈鷲山、耆闍崛山、祇園精舎、大林精舎、竹林精舎の御説法は、皆目当ては出家ぢや。また王舎城あたりの御説法は、在家が目当てぢや。聚楽とて市町や在方の説法は「蜘蛛の巣の中に花咲く木槿（むくげ）かな」と同じ心持ちぢや。観經の韋提夫人御教化の如く、七重の牢内のムシヤクシヤした内で、御説法なされしは相手は在家の者ぢや。

神樂が岡の弥陀

そんなりや弥陀の御心に就けば、何れがよいかと云うに、されば伝教大師が神樂ヶ岡にて、一刀三礼の弥陀を彫刻し北山へ御供えなされ、この山に在して衆生を利益したまうや。また京近郷春は花見秋は月見と、見物騒がしきこの所に在して、衆生を済度したまうかとのたまえば、山とのたまうときは何ともなく、京近辺にとのたまうときは、三度まで領きたもうたとある。兎角に在家の者は逃げ回る。故に彼方（あなた）から付き添うての、御勧めが御意に叶う。存如様までは御本山にも、御影堂に高座がありたれども、これを取りて在家と膝すり合わせて、御談合のころと、その後は高座を取りのけさせられた。よりて本山始め六条の市中、兎角に在家へ近付くと仰る御摸範（てはん）ぢや。

サテ次の『御伝文』に「今比、いにしえ口決を伝え、面受を遂げし門徒等、おのおの好を慕い、路を尋ねて、参集したまひけり」とあり、水深こうして魚鼈集まる。聖人どこに在しても後世者は、御跡を慕うて集まるは道理ぢや。

この一段は常陸の国那荷の西の郡、稲田より丑寅に当たりて一里ばかりぢや。「大部の郷に平太郎某と云ふ庶民あり」とて、生え抜きの百姓があったが、大部の郷の地頭佐竹形部左衛門末賢、熊野参詣の歩役にさされ、参りて雑行になるかならぬか、いよいよ御開山へ御尋ね申しに上られたとある。

『蓬原（ほうげん）』という書物には、八十六代四条の院の御宇、仁治庚申元年二月わざわざ尋ねに上京して、極月に参詣せられたとあれば、聖人六十八歳の御時である。熊野へ参るついでに立ち寄ったではないぞや。その年の冬の年越しに参るを、わざわざその年の春の二月に尋ねに上る。銘々はわざわざところか参るのでさえ、がてら参りぢや。今度の御勸化まだ始めてから一座も参らぬ。マア御齋米上げがてら、近所の伯母見舞いがてら、参ろうかと云う位ぢや。

ここに壁の張り付けに鶴鴒（せきれい）が書いてある。「千早振る神代のむかしたれかしるるべむかしのいなおふせ鳥」と、古歌にある如く、みとのまくばへとて夫婦の道も、この鶴鴒が教えたとある。今も鶴鴒のものを賢く教え伝えし如く、聖人にも能く仏になる道を教えたまう表示。

あるいは鴨の絵が書いてあるものもある。西行法師が「事たしぬ身こそやすけれ鴨の足短くてこそうかむ瀬もあれ」と詠みし如く、平太郎の如き無願無行の足なえなればこそ、かかる者を御助けと、浮かぶ浅瀬もあると表示ぢや。

トキニ上の一段即ち、我が祖箱根権現の崇敬はありうちぢや。弟子たる在家には熊野の権現様が、屈敬の礼をあらわす様の事は、有るまいと云う不審あり。されば平太郎を手本にして、平太郎でさえこの如くぢやと示されてある。これがもと人天到敬の願の御約束ぢや。

聖人口業説法

トキニ上來聖人口業の御勸化はこの一段ぢや。山伏教化はただ一目拝むやいなや、忽ちグニヤグニヤと害心が消滅する。これは色塵の御説法ぢや。ただ今の口輪説法に平太郎が、参りてよいか悪いかの問いに対して、参れとも参るなともたまわぬは、これは根元を教えさえすれば一心を了解し、その上はたとい参るも障りにはならぬこと。云わ

ずともしれたことである。平太郎は我が発起し、立願ありて参るでない。地頭の扶役なれば、雑行にも雑修にもならぬは知れたこと。その位なことがかみ分けなないと云うに、知れたことではあれども、往生の一大事に拘わる大節なれば、はるばる上京して尋ねる。

銘々ほもつとした大事な不審ありても構わぬ。若い時立願して、大峰山参りして病氣も本復し、その後礼参りしようとお約束申したが、今信心了解したればもう参るには及ぶまいか。まだ参らねばならぬか。金比羅様へかようかよの願立てをして、早速叶えてくだされ、それから一生何々を断ちましよう、御約束申したが、食わぬ分は苦しうなければ、破つて食べたら罰が当たろうかと、心掛かりながら放りやりにおく。丁度狂氣（きちがい）のとき云うたことを、本性になりてから、御前はかようかよう云われたとて、取り上げ沙汰する様なもので、そいつがやつぱり氣違いぢや。この願叶えて下されたら、一生何々を断ちましよう。皆信心のない氣違いのとき云うたのぢや。それを信心決定の正氣になりた上で、そちはその食を断つと云うたが、どうぢやとねだる神なれば、その神がまた氣違いぢや。大峰山上へ願かけして、裸足で御礼参りする筈が、信の上からは参るに及ばぬ。こちらからゆかずとも、信心さえ了解すれば、あなたから御光明の中へ御見舞いぢや。

「朝霧やよべばこちらに渡し守」。向こうに居ると思うていた渡し守は、こちらの岸におるのぢや。向こう向こうと思うて居りた。諸仏諸神も信心を得たれば、みな念仏の行者を守護なさるる。

事毎に問うこれ礼

さてこの平太郎は「聖人の訓を信じて、専ら二心なかりき」とある。してみれば信の上から我が発起し、立願して参るでない。参りて雑行になるかならぬかは、能く知れたことと思えども、知りつつもわざわざ尋ねに上るは、往生をいよいよ大事に思うからぢや。

論語に「子大廟に入ることごとく問う。ある人曰く。誰か鄒人の子礼を知らざらんや。大廟に入りことごとく問う。子之を聞きて曰く。是礼なり」と。いかさまおれが興門様の御代香に、長州萩の殿へ三辺まで下りた。八百石から千石までの侍が、騎馬にて先駆けあとおさは、そして菩提所の寺にて山門まで乗り込み、それからあの馳走役が階（だん）まで案内。それから三千石も取る衆が、長上下御奏者役。それから後僧（しそう）を十二人つれ御霊前の焼香、御読経。万石の家老六人へ挨拶。それは御客部屋で御馳走の応対の着到もしち面倒な。そして三日まで御奉答で、殿から人馬で送り、それから大阪まで御用船が出る。この御代香を二辺つとめ、三度目はおれが案内をよく知りて居る。けれども向こうより、三度も四度も何の刻より何の刻まで客部屋で馳走、それから菩提所の奏者への口上の案文、家士衆への御挨拶の御手控えはいかが、先例の書き付けなど、知れたことを向こうよりも尋ねれば、こちらからも問いにやる。知れて有ることでも、一々尋ねるが礼をすてぬと云うもの。今も知れてあることなれども、尋ねるは後生大事と思うからぢや。

梁の武帝の後悔

梁の武帝は楹頭（がつず）律師に、御帰依なされてありた。あるとき楹頭律師参内したまうに、帝碁を打ちながら、「切れ切れ」とのたまう。故に律師を市へ引き出し、勅命なりとて首切り落とさんとせしに、その時律師「これは何ぞ間違ひならん。再聞して我に失あらば、切りたまえ」と云うも聞き入れずして戮（りく）す。やや暫く有りて、「律師をこれへ通せよ」と仰せ出されたれば、「先刻切れとの勅命ゆえに、絶命仕りし」と奏上せしに、帝大いに慟哭したまい、定めて臨終に何とか云いつらん。されば「我過去に小僧たりしとき、樹を植ゆるに一匹の蚯蚓（みみず）を切り殺す。その蚯蚓は後福力を修して今帝王となる。われはその沙弥なり。誤りて殺したる順後業の顕れにて、今殺さるることなり」と仰せられた。（梁僧伝）

澄むと濁るで大違いの話し

「世の中は澄むと濁るる大違い蛇（じや）は人を呑む茶は人が飲む」と云う歌の如く、僅かなことにて大いなる間違ひが生じるものぢや。江戸に御乗橋と云うがある。その下で鯉を釣ると縄目にかかり、御掟通り首が落ちることになる。ある時御乗橋の下で、鯉を釣りと云うものがあつたゆえ、奉行が聞いて詮議のとき、下（した）ではあるまい下（しも）であろうがとおつしやつた。下（しも）なれば深川まではシモ。どこで釣るもかまわぬ。御乗橋の下（した）が禁制ぢや。シタと云うとシモと云うと、シとモとたった一字の云い様で人の命が助かりた。今も参りましよう

か、参りますまいか、出入りの違いで往生の障りになるならぬを調べに上がられた。

暴風駛雨のたとえ

聖人そのときの御教化は、遠方から網掛ける如く、「それ聖教万差なり。いずれも機に相応すれば巨益あり。但、末法の今時、聖道の修行においては成ずべからず」と云うて、証拠を出せば、「則ち「我末法時中億々衆生起行修道未有一人得者」といい、「唯有浄土一門可通入路」と云々 此皆、経釈の明文、如来の金言なり」と、『大集月藏経』の御沙汰をなされるのぢや。故に如来の金言なりと御むすび、そんなら今日の人は、助からぬかと云えば、「琴の浦に朽ちて捨てたる蟹（あま）小舟わか方に引く浪もありなん」ぢや。たった一つあるそこを「唯浄土一門通入すべき路有り」云々と云うは、またまた沢山な経釈の明文はあれども、まあこの文ばかり云うて聞かそうと云うこと。ときに経釈の明文と云う、御経はいかにも『大集経』は聞こえたが、釈文は何れにあると云えば、この経文を道綽禪師の『安樂集』に引き、そのあとで「若し起惡造罪を論ずれば、暴風駛雨に異ならず」と仰せられ、それを御和讃では「濁世の起惡造罪は暴風駛雨にことならず」と。これは御譬えぢや。暴風駛雨とは大風大雨のふるとき。道を行きかかりわが在所へも一里。向こうの在所へは三里もある。日は暮れかかるその上に大風大雨に大雨。ところがその間にたった一つの軒家があった。それがしかも知縁近付きの人で、これで御泊まりなされと云うてくれる。誰もあること左様なれば、御造作ながらと泊まらざるまいぞや。

釈迦如来御出世の城下は、最早過ぎ去りてから三千年。弥勒菩薩の向こうの在所は五十六億七千万年。その間で末代の日は暮れかかるし、煩惱の大風惡業の大雨、その上に頭の上には、落ちかかる様な貪欲瞋恚の大雨。それをうかうかするその間に、命の日は暮れかかる。獄卒の狼に食われるぢや。しかるに彼の軒家にたとえたは、唯有浄土一門の、第十八願の知縁近付き。処が真実大悲の弥陀の親様の内ぢや。泊まれと云う御挨拶どころか、やれ待つて居たと撰取不捨と手を引いて、本願の座敷へ抱え上げて下さるのぢや。それを振り切つて向こうの弥勒の在所まで、修して行こうが聖道門。御辞儀なしに泊まるのが浄土門ぢや。今まで大事にした雑毒虚仮の、善根功德の簑笠もいらぬぞや。現世祈りの脚絆甲掛けもいらぬぞや。かかるものを御助けと、疑いの尻おろしたのが、泊まる筈に成りたのぢや。煩惱のひとしぼりになりた着物は、心光撰護の衣装と着替え、本願の御座敷の真ん中で、光明の炬燵に当たり、往生治定と足のぼして、無始以来の迷いの長旅も、これで草臥れが休まり、御恩報謝の枕して寝た間が、また婆婆の夢見ておるのぢや。臨終一念の暁の鐘に目をさました所が、極樂参りの夜が明けたのぢや。

三国祖師の御釈

「しかるに今、唯有浄土の真説に就きて、忝く彼の三国の祖師、各此の一宗を興行す。所以、愚禿勸るところ、更にわたくしなし」とあるは、諸神諸仏に心を散らすな、唯弥陀をタノンで極樂へ参れとある。この唯有浄土の一門の教えは親鸞が、一了見で云うではない。忝なくも彼の三国の祖師、即ち七祖達がこの一宗を興行す。この故に愚禿勸むる所、更に私なし。いかさま七祖相承の中に、少しでも雑行くさいことがあるかや。龍樹は「疑えば則ち花開かず。信心清浄なれば、花開いて即ち仏を見たてまつる」と仰せられ、天親は「一心帰命」と願生せられ、曇鸞は「他想像わること無し」と御釈あらせられ、道綽は「唯有浄土一門可通入路」と示させられ、善導は「一向専称弥陀名号」と教えさせられ、横川は「唯称弥陀得生極樂」と顕わさせられ、元祖は「往生極樂の爲には、南無阿弥陀仏と申す外には、外の子細候わず」とのたもう。怪我にも雑行雑修せいとは仰らない。

それもその筈ぢや。「花といへばさくら一木の名になりて世に類ひなき色に匂ひに」とある如く、桜は花の王故に、他の花を根しめにせぬ。桜は一式を生け花にもする。念仏は一切諸三昧の王ぢや。故に念仏には他の仏や、他の法をまじえぬものぢや。トント念仏一式がよい。よつて「しかるに一向専念の義は往生の肝腑、自宗の骨目なり」と仰せらるる。これ雑行を捨てて弥陀をたのむと云うことは、人間の腹の中では五臓六腑、体にとつては骨、顔にとりては両眼の如く、実に大切なことぢやぞよ。

三経の隠顯

そんなこと云わつしやれども、七高僧ばかり御相承にして、御経になくは承知はならぬと云うに、「三経に隠顯ありといえども、文と云い、義と云い共に明らかなるをや」とある。この一節、『大経』と『観経』と『小経』と三部経を並べて、彼の一向専念の義を御述べなされる。サアこの下が六本檉ぢや。魚のように目を張つて聞け。また舟

で櫓械（ろかい）を使うに、ころころと櫓をこぎはずして、横へころりとやつてはならぬぞや。その目を張るのは後生大事と、気を張りつめるからぢや。

サテ「三経に隠顕あり」と仰せらるる。隠顕とはつぶさには隠彰顕密とて、隠はかくるる彰はあらわると云うて、丁度寺の内敷が表は牡丹、桐に鳳凰、梅に鶯（うぐいす）、波に兎と模様は変われども、裏はすべて一面に糸が渡りてある。表は『大経』では三輩、『観経』では九品と、自力の模様どりがあれども、弘願真実の裏から見ると、他力の相一面に渡りてある。即ち善導の御釈には「娑婆の化主、其の請ひに由る故に、広く浄土の要門を開く。安樂能人、別意弘願を顕彰する」と仰せられた。この文によりて御開山は、隠彰顕密と云うことを御立てなされた。しかるに観小二経は、しばらく方便を帯びる経故に隠顕はありうち、一の他力を説いた『大経』には、隠顕はありそもないものと云うに、されば御開山は『大経』の三輩などは、『観経』の九品と開合の異にして、『大経』にありながら、『観経』へ取り降ろす思召しなれども、今は義に於てはなれども、文の上では隠顕がある。

いかがとなれば先ず「大経の三輩にも一向と勧めて流通には、これを弥勒に付属し」とは、この三輩とは三通りの輩とありて、十方の衆生を上中下の三段と分かち、上輩は捨家棄欲のまことの出家。中輩は出家ではなれども、諸々の功德を修する者ぢや。下輩は善も修せず功德もなし、世間並みの凡夫のことなれども、共に後生大事の無上菩提の心を発せばこそ「一向専念無量寿仏」と説いてある。そして流通分として仕舞いには、そのはなはなしい「捨家棄欲」「起立塔像」等の菩提心沙汰はない。捨家棄欲或いは起立塔像等の、菩提心で参るのか、一向専念の了解で参るのかと云えば、流通分の仕舞いに土俵際で、菩提心が足とられころり負けぢや。菩提心で往生するではない。弱々しい凡夫が「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と申す一念に、はや無上大利の御功德をひつくるめて仕舞うぞや。これ弥勒をタノム一向専念ほどの、菩提心はないとて、弥勒菩薩へこれを付属なされて「仏弥勒に語りたまわく、それかの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念することあらん。当に知るべし、この人は大利を得とす。すなわちこれ無上の功德を具足するなり」と仰せられ、そなたも五十六億七千万年の後に、おれが通りに仏になりて出現したら、おれが通りにこの名号をおもに勧められよ。タノムぞやと釈迦が弥勒に手を下げて、御頼みなされたことを「流通には弥勒に付属し」と仰せられたものである。

観経の九品

サテ次に「観経の九品にもしばらく三心と説きて、これまた阿難に付属す」とは、『観経』は表は定散二善自力難行ばかり、しかし九品の始め上輩の所に、三心を説いたが「三心を弁成し以て正因と爲す」とて、その三心は九品の総かぶせになりてありて、上六品になんたあろうが、三心は九品の通因で、行はいろいろそのものの心まかせにつとめても、往生の因が三心ぢや。故に仕舞いには「汝好く是の語を持て。是の語を持つとは、即ち是れ無量寿仏の名を持もつなり」と仰せらるる。よつてそれを善導大師は「上来定散両門の益を説くと雖も、仏の本願に望むれば、意に衆生一向専ら弥陀仏の名を称するに在り」と、『観経の疏』の中に示されてある。

サテ次に「小経の一心ついに諸仏これを証誠す」とは、『阿弥陀経』に「彼の仏光明無量にして、十方の国を照らして障碍する所無し。是の故に号して阿弥陀と爲す」と仰せられ、また「彼の仏の寿命、及び其の人民、無量無辺、阿僧祇劫なり。故に阿弥陀と名づけたてまつる」とのたまいて、弥陀の名義を説いたが、『阿弥陀経』ぢや。その内光明無量は、能く衆生一切の無明を断じ、生死の苦因をぬき、寿命無量は「及其人民」とありて、能く衆生の生死の苦果を絶したまう。その所の間違いないと、諸仏が御請け合い証誠なされるぞや。この名義を「聞説阿弥陀」と説き、聞こえて信受するを「執持名号」と云い「一心不乱」と云う。しかるにこの一心が容易には、得られぬ故に「極難信」と云う。それを得させようと疑うな間違いないと、諸仏が御受け合い、勧め手が恒沙諸仏の勧めなれば、信もまた恒沙の信なり。弥陀一仏を信ずる所に、証誠の諸仏を信ずるわけがある。恒沙の諸仏が御請け合い下された、その御影で今ようようと、往生一定と落ち着いた。

前漢の王陵の事

前漢の王陵という人は、漢の高祖に従うて、戦場に臨んで居りたが、楚の項羽、かの王陵が母を捕らえ、戸板に張りて戦場に持ち出で、「サア王陵降参せよ、サナクバこの母を金いりにする程に」と攻む。王陵血を吐いてもだえたれども詮方がない。その後王陵用事ありて、項羽の方へ使いをやられたとき、彼の母を引き出し使いの前へ引きすえ、

「汝帰りて王陵に語れ急ぎ漢王に背き、我に従わずば母をいよいよ釜いりにせん」と。王陵が母、使者に云うよう。「その方が帰らば王陵に云え。必ず必ず母に引かれ二心を懷く。漢王は長者なり。随分抽んでて忠節を尽くせ。我死を以て使者に贈らん」と、刀を抜いて喉をつらぬき、目の前で自害せられた。使者この由を申しければ、王陵涙にむせび、その後余念なく、高祖につかえ功名を天下に顕された。母一人が身をすてて、王陵が心が定まりた。

今は恒沙の諸仏が弥陀をたのめ、往生に間違ひあらば、この舌は壞爛（えらん）とくちくさるであろうと、舌が腐れば命がない。命がけの御請け合ひ故、今は往生治定とところが定まりた。そこで「之によつて、論主一心と判じ、和尚一向と釈す。しかればすなわち、何の文によりて、専修の義、立すべからざるぞや」。何と立てずにはおられないがと仰せられ。

証誠殿の事

「証誠殿の本地すなわちいまの教主なり」と示され、熊野権現と云うは誰あろう、極楽の弥陀の出現権現の御納戸、御本家は極楽の弥陀ぢや。神仏一体の旨を顕して、証誠殿の本地を御説きなされたのぢや。

トキニこの証誠殿とは、熊野の本体を云う。証誠とはまことの証拠を立てぬくこと。約束を誓うて立てぬくこと。世間でも物が失せそれを隠して出さぬと、熊野の牛王（ごおう）を吞ますと云うと、血を吐いて心中の虚実を顕すとして、誓文詞（ことば）を立てるとき、熊野の牛王に七枚起請を書き、その牛王を灰にして吞ますと云う。とんと誓いのまことを立てぬく仏ぢや。

餅好きは餅で引つ込むがよい。酒好きは酒より引つ込むがよい。ある酒好きの歌に「酒といふ名をきくだにも嬉しきに召させる人は神か仏か」とある。八岐の大蛇、酒吞童子も酒が好き故、酒から引つ込んだ。仏は皆衆生の好む所より引つ込む。熊野権現即ち証誠殿の本地と云えば、弥陀の御化身なれば、難行すてたこの一心帰命が御好きぢやによつて、ゆめゆめ冥眈（みようし）をめぐらしたまうべからず。フワフワ思わず参詣せいと仰せぢや。

和光の垂迹の事

「証誠殿の本地すなわちいまの教主なり。故に、とてもかくても、衆生に結縁の心ざしふかきによりて、和光の垂迹をとどめたまう。垂迹をとどむる本意、ただ結縁の群類をして願海に引入せんとなり」と、この御言葉は『御文章』にも、神明六ヶ条に「一切の神明ともうすは、本地は仏菩薩の變化にてましませども、この界の衆生をみるに、仏菩薩にはすこしかづきにくおもうあいだ、神明の方便にかりに神とあらわれて、衆生に縁をむすびて、そのちからをもつてたよりとして、ついに仏法にすすめいれんがためなり。これすなわち、「和光同塵は結縁のはじめ、八相成道は利物のおわり」といえるはこのころなり。さればいまの世の衆生、仏法を信じ、念仏をももうさんひとをば、神明はあながちにわが本意とおぼしめすべし。このゆえに、弥陀一仏の悲願に帰すれば、とりわけ神明をあがめず信ぜねども、そのうちにおなじく信ずるころはこまれるゆえなり」と、仰せらるるが同じころぢや。

和光同塵の事

『止観』の六に別教の菩薩の事を明かし、從空出仮の下に「和光同塵は結縁のはじめ、八相成道は以て其の終とす」と云い、『老子経』にて「其の光を和して其の塵を同うす」とある。仏と出ては迷いの衆生に近付きにくい故に、神となりて衆生に近付き、好きな現世祈りから祈らせて、ついに仏法に勧め込ましやるを「和光同塵」とありて、『維摩経』の注には「欲の釣（つりばり）を以て引いて仏道に入る」と云い、深き淵の底に沈んだ魚は網では取られぬ。その魚の好く餌を釣り針にさしおろすとき、我が好きな餌に食い付いて、呑むを合図に釣り上げる。生死の水底に沈んだ我等は、御教化の網では救われぬに依りて、息災延命、諸願成就と餌になされ、第一死ぬると云うことを忌み嫌うてみせて、社を構え何でも祈れ、叶えてやるぞと欲の餌を施し、これを縁として生死の水底より、菩提の彼岸へ釣り上げて下さるを、和光同塵と云う。

この和光同塵をば、または垂迹とも云うなり。垂迹とはあとをたたと書いた文字。天台の釈に「本にあらざれば以て迹を顯す無し。迹にあらざれば以て本を顯す無し」とある如く、本地垂迹は対々のものぢや。朱雀院の「道の辺のちに光をやわらげて仏も神とあらわれにけり」と詠ぜさせられた如く、神仏はつねに垂迹なさるるものぢや。

本店と出店の喩え

仏法から神道へ出店をするのぢや。大きな商売は本店が京にありて、江戸長崎へ出店をする。本店がなければ出店もなく、出店なければ商いが広くならぬ。商いを広うせねば本店の名も知れぬ。本地と云えば極楽の本店。垂迹と云えば娑婆の出店。出店がなければ十方衆生と、廣う御済度の手が届かぬ。とてもかくても衆生結縁の為に、垂迹の出店を出されて御座るのぢや。

あなかしこの事

「しかあれば、本地の誓願を信じて偏に念仏をこととせん輩、公務にもしたが、領主にも駆仕して、其の靈地をふみ、その社廟に詣せんこと、更に自心の発起するところにあらず。しかれば垂迹におきて、内懷虚仮の身たりながら、あながちに賢善精進の威儀を標すべからず。唯、本地の誓約にまかすべし、穴賢穴賢、神威をかるしむるにあらず、努力努力冥眈をめぐらし給うべからずと云々」

サアサアこの一向専念の義は、三国の祖師がこの一宗を、興行するばかりではない。元三経にあり、和光同塵して神明権現と顕れたまうは、ただ結縁の群類をして、願海へ引入せんと云う思し召しぢやとの、長々の御教化、本地の誓願を信じて念仏をこととする輩は、我が発起ではない。地頭よりの人夫にさされて参るなれば、あながちに賢善精進の威儀を表すべからず。垢離（くり）取るに及ばず物忌みせずに、産（うぶ）の儘にて参れと仰せられた。

「穴賢穴賢」とは、穴とは尊むことば、賢は恐怖の義でおそれることぢや。尊び恐れることぢや。鶯宿梅（おうしゆくばい）の歌に「勅（のり）なればいともかしこし鶯の宿はと問わばいかが答えん」とある。これかしこしのしは助字、ただかしこと云うこと。おそれうやまうこと。女の文にもトント書きしまいに、かしくと書く。かしくとは通音ゆえにかしくと云うて敬い慎むこと。今穴賢と云うも、そうして参るのかかえて神をおそれ敬いに成るぞ、さらさら神の御威光を、軽ろしむにあらずと勧めたまうなり。

「努力努力（ゆめゆめ）」とは、ちつとばかりもと云うこと。すこしも、御咎めは有ろうと思うな、氣弱く思うな、これが仏の御約束ぢやと云うこと。

「冥眈」とは冥は冥見のこと。眈はマシロクとよむ。挙目（あげめ）相い忤（さから）う貌（かたち）。神様は御恨みはないぞよと云うこと。あの女中などは聞き分けが悪い。今まで金比羅さまに、十日十日に御神酒をそなえて居るに、これからもうそれをやめて、弥陀をたのめば、罰あてはなさるまいかと云うに、丁度殿様が御通りになり、下女のおさんが御目にとまり、御傍女中になされようとするのに、まだおさんは五年の年季であるに、勤めずに殿へ女中に上がるとて、主人は腹を立てぬ。返つてその出世を喜んで、憎いとは思まいがや。

平太郎尊教の事

「これによつて平太郎熊野にに参詣す。道の作法別整儀なし。ただ常没の凡情にしたがえて、更に不浄をも刷事なし、行住座臥に本願を仰ぎ、造次顛沛に師孝をまもる」とある。この「行住座臥」とは、行くも座るも眠るも起きるもと云うこと。「造次」とはさわさわしたとき、「顛沛」とは忙しいときもと云うこと。

この平太郎常州を出てから、紀州牟婁（むろ）郡に参るまで、唯口の休まる間もなく、「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と、称名の声を絶えなんだ。

「はたして無為に参着の夜、件の男夢に告げて云わく、証誠殿の扉をおしひらきて衣冠ただしき俗人仰せられて云わく。汝何ぞ我を忽緒して、汚穢不浄にして参詣するや」と。この衣冠正しき俗人とは権現のこと。この権現様が御咎めなされ、サアいかかと思ふ所へ、京西洞院に在す御開山が忽然と顕れさせられた。そこを『御伝文』には「爾時かの俗人に対座して聖人忽爾として見え給う、其の詞に云わく、「彼は善信が訓によりて、念仏する者なり」と云々ここに俗人筋を直しくして、ことに敬屈の礼を著わしつつ、かさねて述べるところなしと見るほどに、夢さめおわりぬ」とて、権現様が御開山へお辞儀をなされ、平太郎を御敬いなされた。

甲斐の万福寺の御絵は、覚如様より直に下され、満足の御絵をいう。彼の御絵は聖人までが、証誠殿の内より光を放ち、平太郎を御照らし、余り不思議に思い戻りがけに、京へのぼり右の御咄を申し上げたれば、「聖人其の事なりとのたまう」。どうやら覚えのあるような御返事であつた。「不可思議のことなりかし」と御示しあらせられた。

先に「彼は善信が訓に依りて念仏するものなり」と仰せられた。彼とは平太郎一人ではない。末代の御門徒をも、

一つにさして彼はとのたまう。依つて一節にあそこに御座る御開山は、仁治元年六十八歳、熊野へ御影向（ようごう）の御影ぢや。現世をみだりに祈るな、念仏せよ、神が腹立て恨むならば、おれが出て言い訳しようとの、親切なる仰せぢや。

平太郎の参詣に三義

ときにこれに一つの不審がある。「証誠殿の本地すなわち今の教主なり」とありて熊野権現が直ちに弥陀の化身成ればなぜ、また弥陀の化身がその後「汝何ぞ我を忽緒して汚穢不浄にして参詣するや」と、御咎めあらせらるるや。それでは彼の垢離をとり、現世祈りの者は咎めず、実にしてあなたの好きな念仏者の平太郎を、皮になさるるではないかと云うに、これに三つの訳あり。

一には雑修の失を払わんが為の故に。彼の平太郎が思うには、他の人は垢離をとり、別鍋を食するに、おれは何もせず、もしも罰が当たりはせまいかと、念仏に広大なる利益のあるを、危ぶむ思ひの離れかぬるが一分の雑修になる。しかるに権現が御咎めなれば、いよいよ如何と疑うところへ、聖人が御返答なされ、その雑修の煩ひの失が、蛇の目あくで洗うた如く、明らかに払い捨てさせたまう。

二つには念仏の利益を顕さんが為の故に。他の籠もりの者は別火や、垢離とて穢れを除けるに、彼の平太郎は田辺のほとりでは、死人が道の傍に倒れて居るを、とりかたずけてやりたり。別火もせず垢離とらず定めて罰が当たらんとする所を、権現が念仏の行者を崇敬したまえば、いよいよ念仏の広大のことを知る。

三には神仏一体を示さんが為の故に。平太郎が心にも諸人が心にも、神仏は別と思う故に、今咎めたれば聖人の言い訳で、権現の崇敬したもうて、皆々神も仏の垂迹一体にして、念仏を御好みなさると、知らしめんが為なり。

宮の赤きは慈悲を示す

サテこの御殿の赤いは慈悲の姿。すべて他宗の伽藍でも、宮々の赤いは慈悲を表したものの。なぜかと云えば旭の赤いのも慈悲心なり。その赤い日輪の恵みで五穀が出来る。その天上の日が下界へ下りて火となりて、その日輪の御陰で出来た、米や麦を鍋に入れて、食物となるも火の御陰。食を調えるばかりでない。闇夜を照らすも火なり。また人間の体も五色に配すると、心臓は赤い色に当たる。依つて火の体は赤い。愛染明王の赤い姿も、持国天の赤い形も、みなこれ愛敬衆生のところを知らせる。神も仏の垂迹にして慈悲心を体とすることを知らせて、この通りに赤く染めてある。

この駒犬は白沢（はくたく）と云う獣にして、一切の獣が恐れそばへ寄らぬとある。今神の威光が勝れて一切の悪神が恐れてそばへ近付くことならぬは、丁度駒犬を恐れて、他の獣が傍へ寄らぬ如くなりと云うことを示す。

籠もりの人々

この籠もりの中の真ん中に、鼠色の装束は佐竹形部右衛門末賢。

左の方におらるは久留本坊と云う山伏。佐竹形部御参詣に付いて、先達の山伏なり。その他姫君の姿の装束の袴はいたる女中は、佐竹殿の奥方ぢやとある。いかさま平人の姿ではない。

この右の方に寝て居るは、平太郎ぢや。即ち「無為に参着の夜、件の男夢に告げて云わく」等とありて、寝て居る体相も示し、また「内懷虚仮の身たりながら、あながちに賢善精進の威儀を標すべからず」と仰せられ、また「道の作法別整儀なし。ただ常没の凡情にしたがえて、更に不浄をも刷事なし」とあるを絵に標したものぢや。兎角神明はありのままが御心に叶う。内心に名利や貪瞋を懷いて、表に賢こらしく繕うても、神明の御心に叶わぬ。

墨絵の鷲の喩え

解脱上人春日様に唯識の御咄をなさるに、あちら向いて御聞き故に、「なぜ拙僧に面を御向けなされぬ」と、さすが大徳故に咎めたら、「汝が胸に名聞の心がある故に、面は合わさぬ」とのたもうたとある。

また和泉式部の熊野へ参詣し、鳥居を越し権現様の社檀へ、片足ふみ掛けると、女のことゆえ月の不浄ありければ、こはいかがと驚きそのとき「晴れやらぬ身に浮き雲のたなびきて月の障りとなるぞ悲しき」と詠んだが、この晩熊野

通夜の夢に「もとよりもちにまじはる我なれば月のさはりは何ぞ苦しき」。兎角繕うことを御嫌いぢや。

仏法の上ではその繕わぬ、むきだしが機の真実。ただ本地の誓約に任すべしが法の真実。それなれば機法と云うは二つのものか、また二種の深心は二つものかと云うに、墨絵の鷺は地を薄墨で黒うすると、世話なしに中に鷺が出来る如く、わが身は悪いと手本が黒うなると、かかるものを御助けの信心の鷺が出来てある。

「松かげの暗きも月の光かな」。松かげの下がくろう見えるのも、やはり月の影ぢや。その我が身は悪いと気のつくのも、現世祈らぬ心に、本願を信すれば、心業清浄。口に名号称すれば、口業清浄。歡喜の思い身に余れば身業清浄。六根の内外清浄の人故に、神も崇敬なさるる。

ときに平太郎熊野へ参詣について、世間に『平太郎物語』と云う書物がある。寺によりては往古より節分の晩に読まれる。これは悪いことではなけれども、もと偽書ぢや。そして嫌なことが書いてある。彼の平太郎を権現様が敬いたまう夢を、その夜一千三百八十余人の籠もりのものが皆夢みて、佐竹殿も大きに驚き、殿の乗りたまう御召の乗物に平太郎をのせ、大名が供して直ちに亀山院さまへ奏聞したれば、天子御感の余り平太郎を出家させ真仏上人と御名を下されたとある。余りハゲハゲしいことぢや。何を云うも覺如様の御伝が正銘ぢや。この佐竹殿は八幡太郎義家の次男、新羅三郎義光の嫡孫にして、代々大部の郷の地頭ぢや。いかに云うても我が乗物を平太郎に譲り大名が京まで供するなど書くは、チとばかり横腹がいたい。

しかれども佐竹殿が件の夢を見て、深く仏に帰依し、すでに京へ上り御開山の御教化を聞き、法名を常光と頂き、後常陸で入道なされ、建立されたが今に水戸の城下から三里ばかり東、湊の常光寺とて残りてある。二十四輩の内第一の大寺ぢや。本堂十五間総門と中門の間に塔頭も十二ヶ寺ある。まのあたりおれも参りた。

御開山の御答え

ときに平太郎の夢に、権現様よりキツイ御咎めがあつたに、御開山が顕れて「彼は善心の訓に依て念仏するものなり」と、仰せられたがモウ御咎めがなかったぞや。御開山は賢善精進の威儀を標すべからず、汚穢不浄も構わず、参れと教えたもうたればこそ参りたのぢや。依つてこの度は権現様が、御開山様に取りてかかりて、「汚穢不浄も構わず参詣せよと、何故勧めたまいた」と御咎めあれば、いかが御答えなさるる。「おれは知らぬが三国の祖師、おのおのの一宗を興行す。三国の祖師に御尋ねなされ」と云えば、権現様またその三国の七高祖に対して、「何故にさよう御勧め」と御咎めなれば、七高祖口をそろえて「私も知らぬ。正依の三経にこの通りあるからぢや」と云えば、その釈迦に対して、「何故左様に御説きなされた」と云えば、釈迦の御答えに「根本弥陀の本願に、誓いたまうからぢや」と仰せらるる。その弥陀如来が証誠殿の本地、即ち今の教主なり。ナンノ咎めさつしやろう。その弥陀こそ熊野権現ぢやぞや。ナンナラ始めから咎められねばよいにと云うに、前にも云う通り三通りの訳がありて、平太郎の胸の内の雑修の失を払い、念仏広大の利益を示し、神仏一体の義を顕わさんが為に、実は一体の弥陀が権現様とも顕れ、御開山様ともあらわれ、咎めてもみたり、答えてもみたりして、衆生を済度なされるのぢや。

不動の金縛りの喩え

大坂の日本橋の上で、ある侍の鞘に坊様の衣の袖が引っかかりたとて、堪忍ならぬ手討ちにせんと云いかけて、侍は刀ふり上げたを出家は不惜身命で、一鉢の境界なれば、これも因縁と覚悟して、手に不動の印を結び、口に農莫三曼陀を称えて、不動の金縛りをかけたら、侍は次第にすくんで振り上げた刀、上へも下へも動かすことならず、当惑して居る所へ、侍の傍輩が通りかかり、坊様に挨拶し両方へ別れる。

後で聞けば坊様も侍も、みな長町裏の中着切りのしたこと。それを知らずに、こりや不思議と、阿呆の三太で見物の人は、鼻の穴の天上するほど眺め、懷中とられ羽織脱がされた。

今も娑婆の日本橋の上、権現様の侍が、「汚穢不浄にして参詣するや」と、振り上げた刀を御開山が「彼は善心の訓に依て念仏するものなり」と、御答えなされ、誠に不動の金縛りと同じく動かれぬ御答え。ところで権現様も情けの刀をおさめ、サテは念仏行者かと御敬いなされ、随類応道の芝居してみせて、アラ不思議やと、われわれが目をさまさせ、煩惱の中着を切り、かの極楽へおさめ取ろうとの思し召しぢや。

熊野権現の縁起

ついでにこの熊野権現の興りを弁ずるに、この熊野、本宮、新宮、那智は、唐の秦の始皇帝が除福と云うものを、蓬萊山へ遣わして、不老不死の薬を取りにやられたが、日本へ来たりせつかく来て、本宮、新宮そこあたり尋ねても薬がない。何でもこの所に仙人の住処がある筈と、調べられたれどもトント知れぬ。本宮の証誠殿が、本師無量寿仏の垂迹なれば、不老不死とは弥陀のことぢやと云うことを合点せず、遂に熊野で死なれた。今除福の墓が残りにある。死なぬ薬を求めし人も、死ぬるが娑婆の習いぢや。

ときにこの三所権現は、社家の縁起では、天竺の浄飯大王五代の孫に、慈悲大願王と云うが在して、我が魂はこれより東域に渡りて、万民を救わんとて、八角の水晶の玉となり、日本の九州豊前の彦山へ飛び来たりたまいたが、即ち人皇十代崇神天皇、即位元年秋八月のことぢや。それより直ちに紀州の国、岩田川の辺に飛び来たりたまいたが、阿倍の千代と云う獵師、山へ行き一匹の大熊を見て、あやまたず月の輪を射るに、矢を負うて逃げ行く跡を追い追ひ行くに、一つの楠の下にて獵師の連れたる犬、木の梢を見てしきりに吠える。仰ぎ見るに八角の水晶の玉がある。その水晶の玉が三つの月輪と拝まれた。千代咎めて「月輪何が故に、天を離れてここに下らせたまうぞや」。そのときかの三体の月輪、声ありて答えたまう。「われは西天の慈悲大願王なり。日の本の衆生を済度せん為に來たる。汝これに社を立て我をあがめよ」と。

それよりその由崇神天皇へ奏聞して、本宮を草創しもうた。かの三体の月輪は、即ち今の本宮三所権現なり。そのとき東の御前は証誠殿、本地阿彌陀如来。西の御前は結びの宮、本地千手觀音。中の御前は早玉雄の宮、本地薬師如来。それより百六十一年すぎ、人皇十二代景行天皇に、九里八丁へだてて、その宮と少しも違わぬ如く宮を造りたまひ、移させたまいたが新宮ぢや。また新宮から三里へだてて那智と云う、日本第一の滝がある。地主（じしゅ）は飛龍権現、本地は千手觀音。これを熊野三所と云う。彼の阿倍の千代が、大きな熊を射たが、その熊の跡を追ひ水晶の玉の、三体の月輪にあり、勧請したゆえに熊野と云う。

熊野権現の本地

その熊野権現はどうでも、本地が仏菩薩なればこそ仏法が御好き。社家の縁起に、昔武蔵の国に侍りし人參詣し、後の世の大事を折りければ、「色ふかく思ひけるこそ嬉しけれ本の誓いをわれと忘れし」との御告げがあった。現世の立願の人こそ多けれ、色ふかく思ひけるとは、実に後世大事か思ひいりて、一心に願うこそうれしけれ。本の誓いとは、若生者の十八願ぢや。その本の誓いを忘れず、たてぬくまことの神故に、証誠殿と云うがそのこころである。元祖の絵詞伝には、遠江の国の作仏と云う者が、熊野へ四十八度参り、我が後生を助かる有縁の法を授けたまへと、祈願したればそのときの御告げに、今黒谷に法然房と云う、人ありて盛んに念仏を勧む。彼の所にいたりて問決すべしと云うことが出である。

また『千歳集』には、後白河法皇三十三度まで、熊野へ御幸なされ、牟婁（むろ）郡のミモトと云う所にて、権現様の告げに「有漏よりも無漏に入りぬる道なればこれぞほとけのみもとなりけり」と遊ばされたとある。

また『玉葉集』には、徳治三年の春、後白河法皇の御発願にて、東山三十三間堂の南に、新熊野とて紀伊の三熊野を移させたまう折りから、殿上人の籠もりて、琴を弾じて手向けらるるに、傍らに修行者一人念仏す。そのとき殿上人ト口ト口とまどろみけるに、夢の告げに「夜もすがら仏の御名をとなふるはこと人よりもなつかしき哉」と遊ばされた。

何にしても仏法に因縁深い神様ぢや。

第六段 御往生の段

天皇十一代御存生

さて聖人の御往生は、仏滅後二千二百十一年目。元祖の御往生後五十年目。人皇九十代龜山院の御宇、弘長二歳霜月二十八日の御往生。御誕生はと云えば、人皇八十代高倉院の御宇、承安三年四月朔日に御誕生。それより安徳天皇、後鳥羽院、土御門院、順徳天皇、仲恭天皇、後堀河天皇、四条天皇、後嵯峨天皇、後深草天皇、龜山天皇、天子十一

代の間存命なされた。

時に仲冬とあれば霜月のこと、下旬となれば二十日頃より御病氣ぢや。所はと云えば御舎弟尋有僧都の御里坊、京都三条通り一町下ル、富小路と高倉通りの間を東へ入り、桃山町の西を材木町と云う。その真ん中の町を虎石町と云う。俗に角の坊と云う。今は法泉寺と云う寺になりてあるこの角の坊にて御往生なされた。

『高田正統伝』では、下野の高田の顕智房が、遙々と寒氣の見舞いにとて、霜月十三日発足して上られる。ついでに遠江の専信房の方へ立ち寄られたが、二人つれだちて十九日に、江州鏡山へんで了阿房光正と云う同門弟の人より、御病氣の様子を関東へ飛脚を立てられたが、その飛脚にあい夜を日につき、二十二日の朝京に着き、早速御対面申されたとある。その他御弟子追々聞きつけ、次第に上洛もあり、「聖人さま今年九十歳に御なりなされる。最早命は在すまい」とて、御暇乞いかたがた上り合わせて居た衆もあるが、その内僅か十人余りを絵相に書いたものぢや。

トキニこの右の御座敷にて、御火鉢にアタリて御座る体は、正面なるは御開山。宮内卿善鸞さまの御勘気を、高田の顕智房御託びの体なりと云い、または御弟子達や御孫子達をよせて、安心の御調べとも云う。まず安心の御調べと云うときは、あなたの御子さまは七人あり、第一が大貳さまと云う。京都で御誕生なされ、御年八つとき、慈鎮和尚の御弟子となり、御法名を範意さまと下されたが、短命にて承久三年〔辛巳〕七月十六日、御年十八才にて御遷化なされ、東山の岡崎に御葬礼申したとある。

玉日の姫御往生

ちなみに云う玉日姫も宿善の因縁の定まれる果報は、人の力を持て支えんようなく、十八才の春より、花のつばみを教えの室に養い、十九才の秋には早くも一枝の実を結ばせられ、一子範意様の寵愛も花鳥風月僅か六年の夢物語り。二十四才の盛りの春の頃は、時ならぬ嵐の為に、夫なる少納言様は、御流罪の生き別れとなり給い、明けて二十五才の夏には、父君禪定関白様に死に後れ、今茲（ことし）二十六才の秋を限りに、九月十八日を一期にして、紅顔空しく変じて、桃李の装いは、何処に失せけむ。本の雫く末の露の繁しきに洩れたまわず、はかなき声の称名もろともに、往生の素懷を遂げたまう。辞世の御詠に、「あかで世の別れの袖はしぐるともやがて晴れ行く法の月かげ」と遊ばされたとある。

かくの如く玉日姫様はおかれになり、その後常州稲田に於て、諸人の勧めにより三善為教の娘を娶られたもうたとある。即ち昌姫様以下はこの御方の御子様ぢや。

聖人御子様七人

第二は昌姫様法名恵心、常陸にて建久二年に御誕生なされ、文永七年五月十八日五十六才にて御往生なされ、御墓は越前にありと云うことぢや。一説にこの昌姫様の御血脈が、三門徒ぢやと云うことである。

第三に慈信房、宮内卿善鸞様。こなたも常陸にて御誕生なされ、弘安九年三月三日七十才にて往生。御墓は奥州の大綱にある。

次が明信様。

第五が益方（ますかた）の太夫有房卿。後に出家して粟津道性真蓮上人と申し奉りたとある。貞応二年御誕生。徳治二年九月八日に、六十四才にて御往生。山科に御墓がある。

次が嵯峨姫様と申して、御病身ゆえに御出家なされ、高野の禪尼様と云い、嘉禄二年に御誕生なされ、関東の瓜面に御住居なされ、正応五年正月十日三十二才にて御往生。黒谷に御葬り奉りたとある。

第七に弥女（いやによ）様。寛喜元年に御誕生。十八才にて、御開山の御家、元の日野家に嫁しつかされ、広綱卿の北の方と成らせられ、御男子御出生なされて、後に出家にならせられたが、覚恵法師さまぢや。これが第三代覚如さまの御爺御様ぢや。広綱卿御逝去の後には、小野の宮様へかしくかされ、この小野の宮様が後に入道なされ、禪念さまと申したとある。この小野の宮の北の方とならせられて、御出生なされたが、唯善上人さま。そこでこの覚恵法師と、唯善上人とは胤違いの御兄弟ぢや。ときに弥女さま二十四才にして、小野の宮様に御別れなされ、尼御とならせられたが、覚信尼公様と申された。この覚信尼公五十七才にて、弘安八年十二月二十三日に往生。御開山往生の後二十四年目。丸山安養寺に葬り奉りたとある。

聖人頭北面西

サテ聖人既に御年九十に満ちたまひ、御一生の御教化も今を限りとなりまして、十一月二十三日より御不例にて御病床に臥したまひ、それよりこのかた御口に世事を雜えたまわず、唯仏恩の深重なることを述べ、御声に余言を顯したまわず。ひとえに称名絶ゆることなく、二十三日より二十八日まで、僅か六日の御不例なれば、遠所の御門弟は知ることが出来ぬが、かように常隨昵近の御弟子や、御一門の方々のみ御傍にましまして、御看病なされる体。まず御枕元の右なるは御舍弟尋有僧都様。左なるは栗津の道性真蓮上人様。次の間に居らるるは、左は下間蓮位房。右なるは専信房。その他顕智房、覺恵法師、唯善様、弥女様の方々とみえる。

また庭前に白梅が咲いてあるは、時候を示す。霜月二十八日御往生の事なれば、他の花はなき時分なるに、梅は寒中ではや咲いて、しかもよき匂いがくる。御開山聖人も満九十年のそのあいだ、あらゆる艱難辛苦遊ばされ、今は田舎辺鄙にいたるまで、香も実もある弥陀の本願の弘まりたは、寒中の雪をもいとわず、咲く如くぢやと示す。

サア既に二十八日になりぬれば、午の刻頭北面西右脇に臥したまひて、如来涅槃の儀を守り、寂々として念仏の息とともに、浄土に還帰あそばされた。この時に当たりて御門弟も御別れの涙に咽び、何れも父母に後れて、孤児（みなしご）となりたる風情にて悲泣せらるるなり。

さてしもあるべきとならねば、御棺を仕繕いまいらせ、御屍骸を収め奉り、御葬礼は翌二十九日。御弟子衆これや限りの御供とて、涙とともに禪坊の前へ御棺をかき出したてまつる。夜陰のことなれば、かくのごとく松明を灯し、薪を担い行くなり。禪坊は押小路の南、万里小路の東とあれば、三条坊門富小路上る森山町に当たる。今の柳の馬場なり。かるがゆえに、加茂川を越えて東山へ行く体。

これは東山の体なり。これに見えたる山は阿弥陀ヶ峰また鳥辺山とも云う。今の清水寺のある山なり。この山の西の麓を鳥辺野と云う。墓所の堂の名を延仁寺という。この延仁寺に御棺を移しまいらせて、遂に無常の煙と立ち上りたまう御火葬の体なり。然れば常隨給仕の御弟子達も、御門徒の人々も、御葬送の場にひれ伏して、号泣すること限りなかりし。

これなるは犬神人（つるめそう）なり。または夙（しゆく）のものともいう。今も京建仁寺の辺に住して、祇園会には甲冑を帯して鉾を突き出るなり。今本寺方の御葬礼の時にもかくのごとく、赤き装束に白き頬被りをして、棒を突きて出る。

さて煙消えて後御骨を拾い、大谷に納め奉る。この大谷と云うは、法然聖人の御廟所なり。当時知恩院の境内になり、即ち空師御往生の地にして、東西三丈あまり、南北十丈ばかりなり。然れば大師聖人の御廟の側に、祖師の御墓を築きまいらせて、遠近の道俗毎日毎日御廟に参詣して、塵を払い草を抜きて、御在世の昔を思い、滅後の念を悲しみて、恋慕涕泣せざるものはない。

第七段 造寺草創の段

勅願所の繪旨

この一段は滅後利益の徳をあらわしたまう。聖人後入滅後十一年目。即ち人皇九十代龜山天皇の御宇。印信僧都、高田の顕智房より、親鸞聖人の御廟堂建立の義を奏聞せられしに、早速に御勅許を蒙り、今の知恩院崇泰院の地へ、大谷の墳墓を改め移したてまつり、この所に仏閣を建立し、聖人の御木像を御安置申したところ、文永九年十一月二十八日、龜山天皇より勅願所の御繪旨を蒙り、久遠実成阿弥陀本願寺と、勅号を下したまへり。これによりて始めて、浄土真宗の一宗本山の基礎が開け、益々御繁昌となりた。

南殿北殿の事

ただ今拝したてまつるは、すなわちその時建立の本願寺である。真ん中に御安置したてまつるは、兼ねて御聴聞の一天無二の御真影。その御真影様の両脇に見えるは、南殿北殿と云うて、南殿には唯善房様が居られ、北殿は覺恵法

師の御座所ぢや。この覚恵様の御母君は、即ち聖人の御娘弥女様、御父君は日野左衛門広綱卿である。元宗恵阿闍梨と申して、青蓮院二品親王尊助様の御弟子となり、天台門に入りたまいましたが、文永九年あたかも御本寺建立の後、浄土門に入り奥州大綱の如信上人へ善鸞上人の御息、覚信尼の甥なり」の御弟子となりて、御名を覚恵と改めさせられ、東山御本廟の御留守居職となられた。また如信上人は、つねに奥州大綱に住まわせられしが、毎年の報恩講には、必ず大谷御本廟へ御上洛あそばされた。その御留守のあいだは、覚恵上人御影堂の御鍵をあずかりたまえり。覚恵上人の御子覚如上人は御年十七歳の冬如信上人の御弟子とならせられて、本願寺第三代目の善知識とあがめられたまう。その覚如上人の御甥（覚信尼の後ぞい小野宮禪念の御子なり）様が、すなわち唯善房様ぢや。

この御廟の両側に、白梅と紅梅のあるは、白はウブの姿で信機を示す。紅梅は御慈悲に染まった姿で信法を示す。白と赤との信機信法を二色なれど、御安心の匂いも実も、一味なることを御示し。

師に事うる五事

また箒を持つて掃除の体は、これは覚如様の命を蒙り、四幅の御絵伝を描かれた、信州康楽寺の法眼浄賀と云う人。御絵を御指図に従うて書きたまうとき、私は祖師の御廟堂の御庭にて、掃除する姿を残したく存じますとの願ひ故、その師恩を報ずるの志厚きを、神妙に思し召され、このところに御書き遺したもうたとある。

この師につかうる事は、『長阿含経』の中にも「一には給仕をいたす事。二には礼敬供養する事。三には尊重頂戴する事。四には師教勅あれば、敬順してたがうことなし。五には師に随いて法をききて善く持つ事」云々とある。

御開山聖人御在世の時龜山天皇の御前にして御法談あり。ある時冬の頃、聖人御参内ありて、天子の御前にましましけるに、寒風至つて烈しかりければ、天子御自ら御衣を脱ぎて、聖人に賜りた。聖人御頂戴なされ、即ち御前を御立ちありて、手水鉢の辺にて濯ぐ真似をなされたり。これは天子の御垢を恐れたまう故なり。さて御首に巻かせられて、御前に出でたまひければ、天皇の勅諚には、許すからは苦しからずと仰せられた。聖人の御襟巻はその時の御衣なりと申し伝えることぢや。

さて聖人の滅後十一年目、文永九壬申年に、龜山天皇専修念仏を叡聞したまわんと勅ありける。その事如信上人は、奥州大綱（御父善鸞上人の御坊あり。如信上人もこの御坊にて御往生まします）に御座なされ、御教化しまして、年に一度報恩講ばかりに御上洛あり。かるがゆえに覚恵法師と唯善房と、北殿南殿にあり、看坊をします程に、即ち覚恵法師参内ありて、紫宸殿にして一向専修の法談をしたまうに、帝叡感しまして即ち覚恵法師を戒師となされ、本願相応の法流なればとて、本願寺と勅号を下されけり。かるがゆえにいまに至るまで本尊の右の脇に、今上皇帝聖躬万々歳とある御位牌を立て、左の方には先帝の御贈号を記したまう。御位牌にて代々の帝王の御菩提を弔いたまう。これ勅願所の印なり。

御ゆずりの文

さてこの御影像と申し奉るは、前にも申す通り、聖人七十一歳の御時、御手ずから彫刻ありて第七女弥女様に、御譲り文を添えさせられ、御付属したまえる所の御影像なり。即ちその文に、「ゆづりわたすこと。身の代りを譲り渡すものなり。妨をすべき人なし。ゆめゆめ煩ひあるべからず。後の為にこの文を遺すものなり。穴賢穴賢 寛元元年十二月二十一日 弥女へ 親鸞御判」とあそばされた。

上來四幅の御絵相の大略（あらまし）弁じ竟（おわ）る。

幸いに浄土真宗の流れを汲みて、報土の真因を満足せしむるもの、罔極の御恩莫大の賜予、報ぜずんばあるべからず、謝せずんばあるべからず。師主知識の恩徳は、骨をくだきても謝すべきならい、せめてのことに御影前に跪き、日頃の懈怠を懺悔すべきものなり。

御真影御遷座の事

ちなみに云う文永九年勅願所となり、御廟所御影堂退転なく、八代目中興蓮如上人の御代、即ち百二代後土御門天

皇、文明三年まで、このところに御座なされしが、浄土真宗の繁昌を姑み、山門の悪徒大谷本願寺を破却し、あまつさえ蓮如上人をも、失い奉らんとせしにより、御影像を供奉して大津三井寺に御微行なされた。それよりおよそ十年の間は御本寺は退転し、御影像は大津近松にましまし、蓮如上人はその間に北国畿内を経歴し、あらゆる御艱難をなめさせられ、遂に御念願とどかせられて、この御一流を再興したまう。文明十二年に山科において、御本寺御影堂を御建立になり、大津近松の御真影をうつし奉られたとある。

しかしながら御廟所はやはり、元のまま長樂寺の北、知恩院より西、今の三門の北にましまして、御本寺と御廟堂とは、山科と京都と別々にありた。然るに十二代准如上人の御代すなわち百六代後陽成帝慶長年中に、知恩院満誉上人、浄土宗鎮西一流の総本寺を建立せんとて時の將軍家康公に言上し、初めこの地に知恩院と本願寺（今の山門の下に本堂三間四面、御影堂五間四面。これを文明三年山徒に破却せられ今は敷地のみ）と太子堂と相国寺の常在院と、この四ヶ所の敷地を、一つの知恩院と成し下されとの御願い。そこで家康公は兼ねて御承知の通り、戦の初め御菩提寺登与上人との関係もあり、かたがた遂に板倉伊賀守勝重に仰せつけられて、いまの鳥辺山をその換え地に給わりたとある。

さて山科の御本寺は、文明九年十二月に建立に御着手にて、同十二年十二月十八日、近松の御真影を遷座し奉り、同十三年に阿弥陀堂も建立になり、同六月八日本尊御遷座なされた。それより十五年目、即ち後土御門帝明応五年に大坂石山に、蓮如上人御隠居所を御草創なされて近国の御法義御引き立てあそばされ、明応八年山科に於て御往生なされた。（山科には蓮如上人、実如上人、証如上人の御廟あり）

さて山科本願寺は、九代目実如上人、十代目証如上人まで、御化導のところ、御建立より五十一年目、即ち百四代後奈良帝天文元年八月に、近江国主佐々木彈正大弼定頼なるもの、浄土真宗に仇して、不意に兵を発して焼却した。それゆえ証如上人は、御真影を供奉して、大坂石山に御遷座あり。石山本願寺とされた。その後三十八年目、十一代顕如上人の御代、即ち百五代正親町帝元亀元年に織田信長、この石山本願寺を撃つ。これが名高い仏敵法難の、石山合戦である。ところが本願寺も諸国の門徒と、力を合わせて能く防ぐゆえなかなか強い。とうとう十年間、戦さが止まなんだ。ところが同じ天皇天正八年御勅使を以て和睦となる。そこで、顕如上人は紀州鷲ノ森に御入りなされた。丁度石山本願寺は、四十八年間であつた。その後八年目すなわち天正十六年に、ただ今の京都西六条堀川に敷地を賜り、十九年に御遷座あらせられた。爾來連綿として、御繁昌あらせらるるが、ただ今拝し奉る一天無二の御真影様ぢや。

嗚呼末流に浴するもの、遠く御開山聖人御一代の御苦勞、次第相承の善知識の、一方ならぬ御艱難も、偏に末世の我々御済度のためと我が身我が身に引き受けて、かかる雨山の御洪恩、報せざるべからず、謝せざるべからず。